shu

池坊と古流の生け方寫眞集

東京駿河臺 主婦之友社 編輯及發行

この書を刊行するに際して

日本特有の藝術は少くありませぬが、そのうちでも、華道と茶道とは、全く他に類を求めることのできぬ特異のものであります。遠く聖德太子に源を發した華道は、幾多時代の變遷を外に、整然たる已が道を辿つて今日に及びました。そして、今日は、華道の復興期ともいふべき、諸流隆盛の時期に逢著してをります。國民性に深く根ざしたこの藝術は、容易に一般の興味より遠ざからうといたしませぬ。そればかりか、婦人必須の教養として、現に全國諸女學校中、この課を特設せぬところは、少いほどであります。日本を象徵する藝術――かく生花を呼ぶも、あながち過言ではありますまい。

池坊と古流とは、普及の點に於て、まづ代表的のものといはねばなりませぬ。さきに『盛花と投入の寫眞集』を發行いたしました主婦之友社は、この度は、池坊と古流の二流の生け方寫眞集を刊行すること〻いたしました。池坊は寫眞の選擇と生け方の指導とを日本女子大學講師にして斯道の一人者たる兒島文茂先生に依頼し、古流は、同じく家元顧問として嘖々の名ある、木村理篠先生に御依頼したものであります。總數百餘種、すべて選擇に選擇を重ねて始めて得ましたもので、恐らく、いづれの一つといへども生花の眞髓を學ぶ上の、一階程とならぬものはないと信じます。殊に、兩氏の指導による説明は、ことごとく生け方の急所に觸れ、よく生花の呼吸を傳へてゐるため、初心の方にとつて、二つとなき獨習書であると信じます。

昭和六年三月二十八日

編者

目次

一、池坊の生け方順序……一
二、古流の生け方順序……四

春の池坊生花

(1) 松竹梅……七
(2) 翠松・百合……八
(3) 木瓜……九
(4) 木瓜……一〇
(5) 紫蘭……一一
(6) 燕子花……一二
(7) 深山櫻……一三
(8) 白桃……一四
(9) 梅……一五
(10) 山茱萸……一六
(11) 木瓜……一七
(12) 山茱萸……一八
(13) 連翹……一九
(14) 桃……二〇
(15) 花梨……二一

夏の池坊生花

(16) 擬寶珠……二二
(17) 薊……二三
(18) 燕子花・太藺……二四
(19) まゆみ・あらせいとう……二五
(20) 山躑躅……二六
(21) 河骨……二七
(22) 躑躅・小菊……二八
(23) こでまり……二九
(24) カンナ……三〇
(25) 夏菊……三一
(26) 花菖蒲……三二
(27) 紫木蓮……三三

秋の池坊生花

(28) 桔梗……三四
(29) 伊吹・小菊……三五
(30) 落葉松・百合……三六
(31) 鐵砲百合……三七
(32) 衛矛・濱菊……三八
(33) 伽羅・小菊……三九
(34) 深山躑躅……四〇
(35) 山空木・小菊……四一
(36) 八朔梅……四二
(37) 女郎花……四三
(38) 秋の燕子花……四四
(39) 猿猴杉・小菊……四五
(40) 菊……四六
(41) 柳・小菊……四七
(42) 小菊……四八
(43) 苅萱・桔梗……四九
(44) 八朔梅……五〇
(45) 金雀兒・小菊……五一

冬の池坊生花

(46) 萬年青……五二
(47) 早梅……五三
(48) 蔓梅擬・小菊……五四
(49) 茶……五五
(50) 水仙……五六

(51) 椿……五七
(52) 水仙……五八

春の古流生花

(53) 宮島松……五九
(54) 梅……六〇
(55) 櫻……六一
(56) 櫻……六二
(57) 山茱萸……六三
(58) 桃……六四
(59) 松……六五

夏の古流生花

(60) こでまり……六六
(61) 燕子花……六七
(62) 花菖蒲……六八
(63) 花菖蒲……六九
(64) 葉蘭……七〇
(65) 葉蘭・龍膽……七一
(66) 牡丹……七二
(67) 山吹・百合・燕子花……七三
(68) 芍薬……七四
(69) だるま檜扇……七五
(70) 花菖蒲……七六
(71) 旋花……七七
(72) 垂柳・河骨……七八
(73) 蘆・河骨……七九
(74) 太藺・河骨……八〇
(75) 河骨……八一
(76) 眞槇……八二
(77) 朝鮮槇……八三
(78) 椙木……八四
(79) 夏菊……八五

秋の古流生花

(80) 寒竹・小菊……八六
(81) 雷電木・南京七竈……八七
(82) 柳……八八
(83) 川柳・菊……八九
(84) 棕櫚……九〇
(85) 八つ手・菊……九一
(86) 伽羅・百合……九二
(87) 縞すゝき……九三
(88) 虎の尾樅・菊……九四
(89) 油點草……九五
(90) 山茶花……九六
(91) どうだん・菊……九七
(92) 紫苑……九八
(93) 桔梗……九九
(94) 雲龍柳・百合・燕子花……一〇〇
(95) 金雀兒……一〇一
(96) 蔓梅擬・濱菊……一〇二

冬の古流生花

(97) 椿……一〇三
(98) 南天・小菊……一〇四
(99) 水仙……一〇五
(100) 蝦夷松……一〇六
(101) 萬年青……一〇七
(102) 絲檜葉・小菊……一〇八

目次（をはり）

松・白玉椿

（まつ・しらたまつばき）

（池坊）児島文茂氏作

松に、白玉椿を配して、砂鉢に生けた、新年の床を飾る生花であります。人によつて、椿は不吉の花として、忌まれますが、白玉椿だけは氣品の高い花として、新年の生花に用ひられます。松は撓めるより、なるべく枝振りのよいのを選んだ方が形がとり易く また白玉椿は、開花をあまり多く用ひず、あまり擴げずに生けます。

燕子花

（かきつばた）

（池坊）児島文茂氏作

これは夏の生け方によつた燕子花で、花三本七枚組の葉で生け上げたものであります。春と違つて、葉も莖も勢ひよく、花莖は、葉よりも高く生けて、その出生の様を見せます。前の三枚組葉は、花菖蒲と違ひ、眞中の葉は低く組みます。そして葉の爪尖は、三枚とも互に向き合ふやうに組みます。尚ほ夏の場合は、垂葉を、眞の後あたりに使ひます。

石楠花

（しやくなげ）

（池坊）家元 池坊専啓氏作

石楠花五本を、行の逆勝手に生けたものであります。石楠花は、葉が比較的大きく、枝が折れ易いので、眞、副、體と、それ〴〵その役枝に使ひよい枝振りを選ばぬと、花の形の取りにくいものです。従つて、花とその枝振りの配置の手際よく生け上げられたものは、非常に面白い出來榮えを示すものです。葉は適宜に切り透かせます。

た四季の生花

紫陽花
（あぢさゐ）

古流家元　池田理英氏作

左本手に生けた紫陽花の花です。紫陽花は花首が大きく、なか〳〵生けにくいものです。撓めの利かないものですから、その葉と花を適宜に配置して、花形を纏め上ぐべきであります。淡紫色の大ぶりな花と、その緑の葉との對照は、如何にも清新で、初夏の花としてはなくてならぬものです。水揚げは、根元を燒くか、または熱湯に浸し、深水にしばらくつけてから用ひます。

アネモネ

池坊　児島文茂氏作

アネモネ三本を、古伊萬里の透しぼりの壺に入れた、華やかでしかも落着きのある生花であります。花の様子及び葉の工合は、丁度日本の福壽草のやうな調子のもので、福壽草のやうな氣分で挿せば、さほど苦心せずとも生け上ります。いまゝで顧みられなかつた洋花なども、どん〳〵生けこなしてゆくと、面白いものです。

芙蓉
（ふよう）

古流家元　池田理英氏作

芙蓉七本を、右本手の株生けにしたものであります。芙蓉は花と共に葉で形を取るやうに心掛けます。撓めの利かないものですから、眞、流し、受と、それぞれ役枝になるやうなのを選んで生けます。挿す前に大體形は整へますが、また生け上つてから鋏を入れるやうにしないと、切り過ぎることがあります。根元を叩きつぶし、強火で燒き、水に浸し、水揚げしてから生けます。

池坊と古流の生け方寫眞集

一、池坊の生け方順序

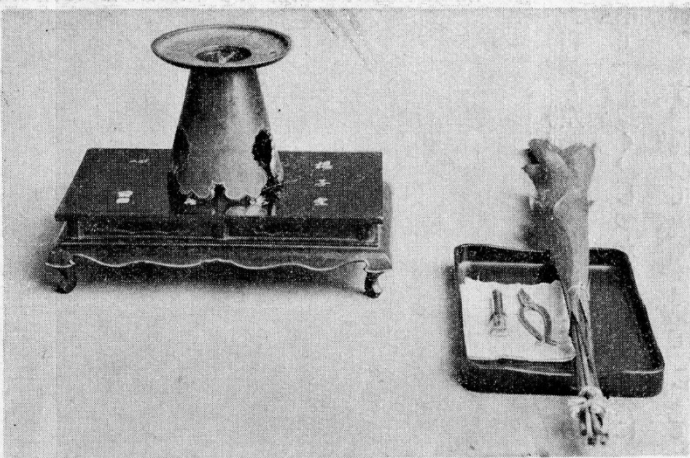
(1)生ける前に、材料を全部揃へておきます。花器は正しく花臺の上に載せ、右側の花盆の中に、花材及び花鋏、霧吹、手拭等を手落なく入れます。花器の前には、必ず正しく坐ること。これが生花をする上の第一の注意です。少しでも曲つて坐ると、花形も自然と曲つたものが出來上ります。

(2)池坊生花の初歩として、その挿し方を覺えるには、葉蘭が一番適當です。葉の扱ひ方、またどう形を作るべきかを覺えるには、葉蘭が一番扱ひ易いのであります。九枚の葉蘭の生け方を申上げませう。これで花形をしつかりお覺えになれば、他の材料は皆これに準じてお生けになればよろしいのです。こゝでは材料の都合上、逆勝手の生け方としました。

まづ花配を、器にしつかりと挿し込みます。葉蘭は束をほぐして、右葉と左葉に分けます。

葉蘭の葉をよく見ますと、中央の廣い筋からいつて、右の方の廣い葉と左の方の廣い葉とあります。右の方の廣い葉は、自然と左の方に少し彎曲し、左の方の廣い葉は、反對に右の方へ幾分曲つてをります。

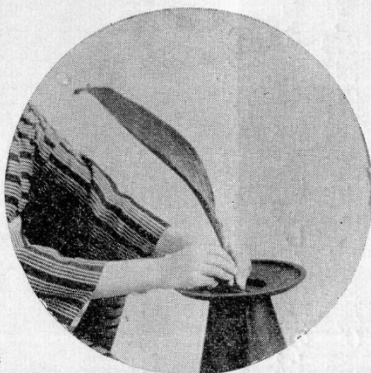
(右より花材・花鋏・霧吹・手拭・花器・花臺)

（根元の切り方）

を作つてみて、長さを定めます。

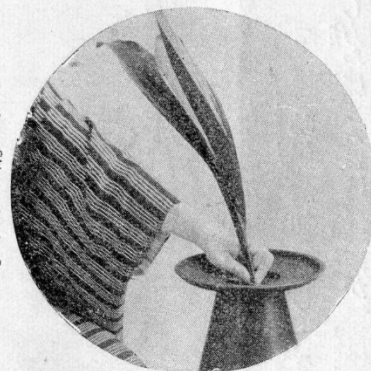
（3）初め體先の葉から入れます。花配の中に、根元がおとしの底に届くやうに入れ、左指先で押へるやうにして手前へ引きます。そして後の指は花配に添へて伸しておきます。〔體先の入れ方圖參照〕

（4）拇指でしつかりと根元を押へ、右手で一本づゝ取つて、順次に入れては手前に引寄せ、體先から、體の打込、體の立のぼり、眞前、眞と入れて行きま

右葉と左葉と二分しましたら、その中で一番長く、しつかりした葉を眞に選びます。向つて表から見て、こゝでは左の方が廣い葉を眞に定めました。本勝手なら、右の方の廣い葉を眞に見立てます。

眞の前の四枚は、眞と同じく左葉、

（體先の入れ方）

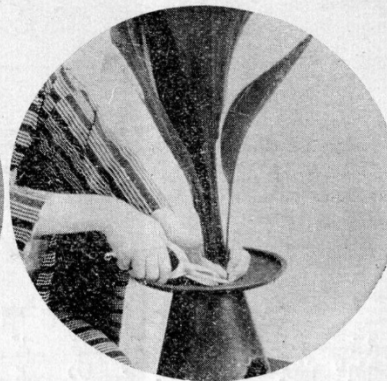
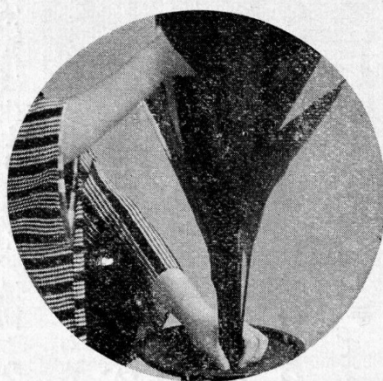
（體の打込みの入れ方）

眞から後の四枚は、眞と反對の右葉を選びます。生ける前に凡そ手の中で形

したら、眞の後あしらひからは、右葉を用ひ、眞に向き合ふやうに四枚を入

れてゆきます。〔『體の打込みの入れ方』圖參照〕

(5)全部挿し終へましたら、最後に

(最後に後張りを當てる)

(形の整へ方)

指できつちりと手許の方に引き寄せ、

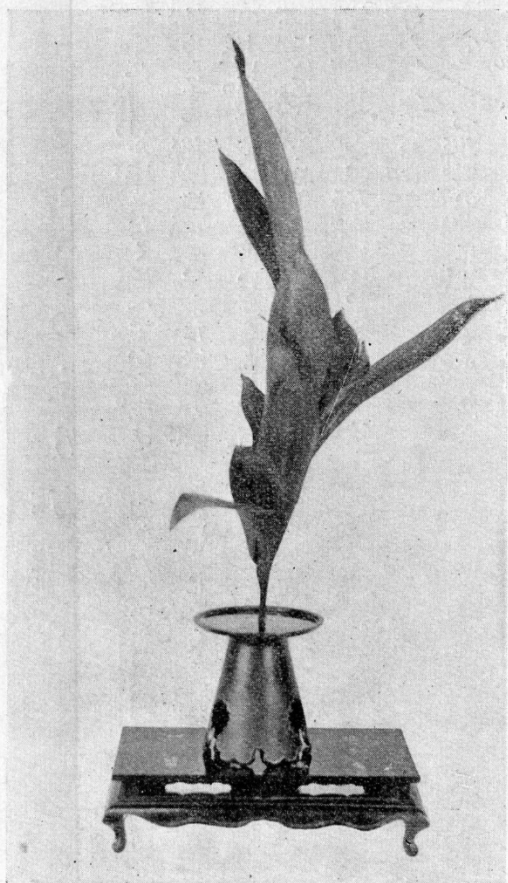
そこに、切り捨てた莖の根元を、花器の口の長さに切つて後張りに當て、全體をしつかり留めます。

(6)根元は、尙ほ左手で押へたまゝ右手で、體から眞前、眞、副と形を整へます。〔『形の整へ方』圖參照〕

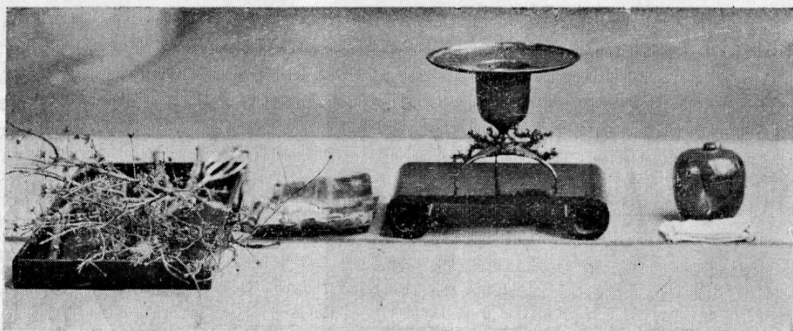
形を整へましたら、花器に水を一杯注ぎ、全體に霧を吹きます。すると葉の艷が生々と見えて來ます。

(7)九枚の葉蘭が、逆勝手に見事に生上りました。根元が一直線に揃ふのが上手な生け方です。〔『葉蘭の生け上り』圖參照〕

葉蘭で、花形をしつかりお覺えになることをおすゝめいたします。これがわからずに、木物へ手をお出しになつても、結局勞多くして、その實は擧りませぬ。やさしい材料で花形の根本を覺え込むことが、上達の祕訣です。

(葉蘭の生け上り)

二、古流の生け方順序

(1)材料を手落なく揃へてから生け始めます。花器は花臺、または他の臺の上に載せて、生けよい高さとし、右側には花盆をおき、花材及び鋏、霧吹等の道具類を、左側には、水入、手拭等を揃へておきます。

(2)まづ花器の前に正しく坐ります。姿勢が正しくなければ決して立派な生花は生上りません。最初こみを作ります。こみ木ははちすの木が一番よろしいです。ほどよい太さのところを眞直切り、その小口を手前の方に向けて眞中に鋏を入れて割り、鋏の尖を割つた中に入れて、左右にこじ開ると容易に割れます。そしてこれを寫眞のやうに、鋏の片方の刃を割れた中に挾み、上下に折り曲げてY字形に開かせます。この割れ目を鋏の尖で兩側とも平に削りましたら、もう一度折りの戻らぬやう、鋏の尖で折り曲げて、花器の口に合せて切ります。叉の方を向にして、中指を中に入れ、側面を押へて、手前の方から、花器内に入れ、叉の方を花器の口から三分六厘下つたところにあて、手前の方は、叉の方より幾分低目か、または水平にして、かたく、しつかりとあてがひます。

(材料は手順よく揃へるところ)

(こみの作り方)

　では山茱萸の花を生けてみませう。花器は薄端にしました。

（3）眞の枝を撓めます。

眞は材料のうちでも、一番丈の長い、しつかりした枝を選びます。丈の中央と思はれるところを、『眞の枝の撓め方』（イ）圖のやうに兩手で、徐かに撓めて彎曲させます。木裏に撓むべきですが、兎角横にそれ易いものですから、御注意ください。

眞の枝の撓め方（イ）

（4）丈の中央を撓めたら、更にその上下を撓めます。元の方を左手で持ち右掌を木裏より當て、、徐かに折れぬやうに撓めて行きます。〔『眞の枝の撓め方』（ロ）圖參照〕

眞の枝の撓め方（ロ）

（5）適當に撓められたら眞の枝の根元を『根元の切り方』圖のやうに切ります。この切口は花器の瓶壁に、ぴつたりと當たるやうに、注意して切らぬと、眞がぐらついて、思ふやうに留まらぬものです。

（6）『眞の枝の入れ方』圖のやうに眞の枝を、、こみの中に入れます。眞の木表は、六十度の角度に向はせ、立上りの傾斜は、正面より約七十度より八十度ぐらゐとします。

（最後の整理）

古流の生け方順序

(7)次に流しの枝を作ります。眞に次ぐ、しつかりした枝を選びます。眞の五分の四の長さに切ります。丈の中央以下の小枝を拂ひ、その中央あたりを、木裏に富士狀に撓めます。これを眞に添はせて、流しの尖を六十五度の地點に向はせて入れます。

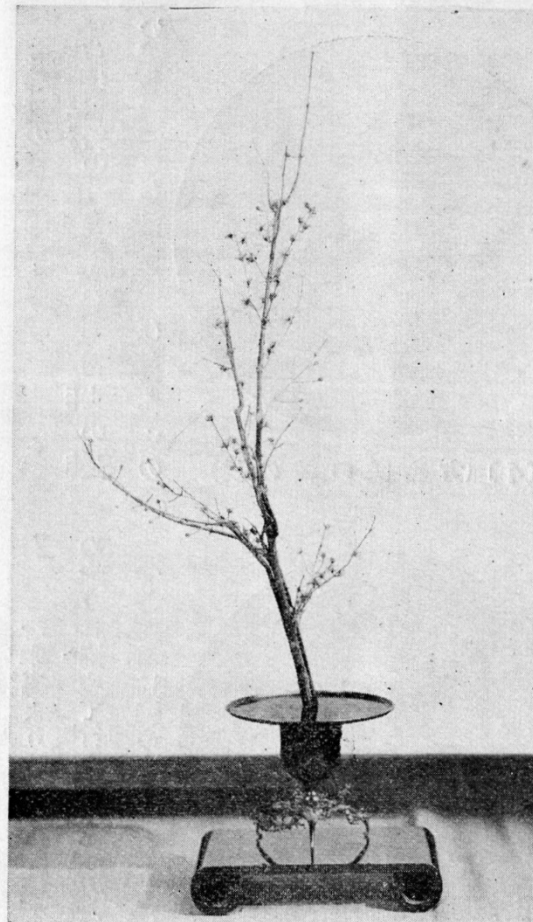
(根元の切り方)

(眞の枝の入れ方)

流しの次に、受、眞前、内副を程よく作つて、順次に入れてゆきます。

(8)内副を入れましたら、最後に留を入れて生上げます。留は流しの二分の一強、受よりも短めにいたします。生ける前に大體枝は作りますが、尚ほ生上げてからも、最後の整理をし、無駄な枝や、目障りになるやうな小枝は切り透せます。生上げてからの整理も大事であります。

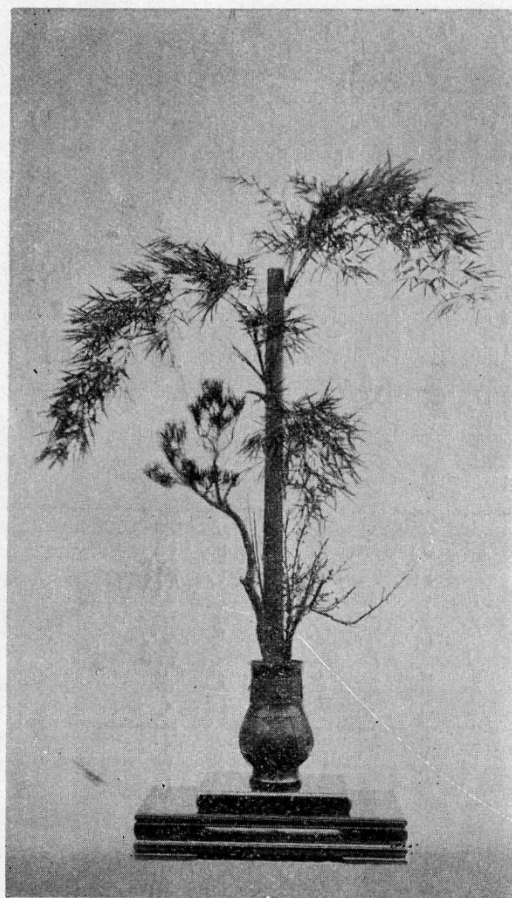
(9)次の寫眞のやうに山茱萸が右本手に見事に生上りました。水を一杯に注ぎ、お床の軸の右側に飾ります。

(山茱萸の生け上り)

池坊の生け方寫眞集

(一) 松竹梅

〔花器〕尊式古銅瓶、蒔繪の花臺。

松竹梅には松を眞と見立て、挿すものもあれば、梅を眞とするものもあり、また竹を眞とするものもあります。この寫眞は竹を眞と見立てたもので、松は副、梅は體となつてゐるのであります。しかし、何れを眞としても、竹は一番前に挿すべきことになつてゐるのであります。且つまた、竹はその節が大切にすべきところでありますから、先づ水際から約一寸前後のところに、第一の節を見せることになつてゐるのです。竹の次に體を挿し、最後に副を挿すのであります。

先づ、この寫眞でいつて見れば、最初に竹を挿し、次に梅、松といふ順序に挿します。またこの松と梅とをかへて、松を體として挿し、梅を副として挿すこともありますが、その時には第一竹、第二松、第三梅といふことになるのであります。そこで、松竹梅を挿す花配りは、眞の花配りといつて、井筒に組んでその中央のところに、全部の花をさめることになつてゐるのです。この井筒も、先づ奥の一本を入れ、次に左右、次に前といふ風にすることになつてゐます。

(池坊專啓)

(二) 翠松・百合

〔花器〕新蓬萊、蒔繪の花臺。

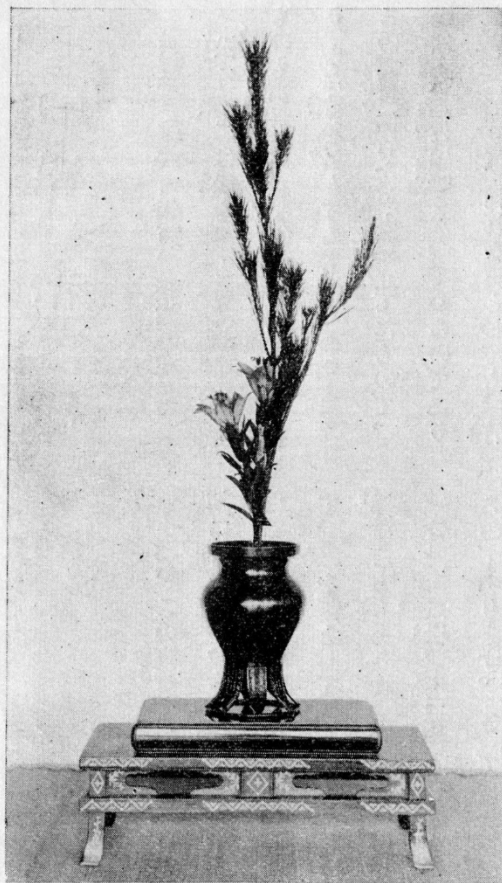
翠松は池坊家では、新年最初に挿す花になつてをりますので、その體はその時に相應したものを使ふことになつてゐるのです。この寫眞は翠松ではありますが、五葉松（根岸五葉）でありますから、池坊家で規定した時期の花といふことではないのであらうと思ひます。また百合は初夏のものでありますから、なほさういふ風に思はれるのであります。しかし今日では園藝が發達して、挿花材料には殆ど時期なしとも見らるゝやうになつて來てゐますから、或は早春のものかも知れませぬ。

兎に角、工合よく引きしまつて挿し上げましたところは、まことに鮮な手際であります。

この松は眞と副とに一本づゝ使つたやうにも見えますが、さうしますと、體の百合が二本である場合には、合せて四本となりますから、眞前にも松が低く一本使はれたのであらうと思ひます。何れの花にしても、同じことですが、かうした少ない數で挿し上げましたものは、是非奇數になるやうにせねばなりませぬ。

御承知の通り、この花は逆勝手の眞の花形に生け上げられたものですから、お軸の向つて右に飾ります。

(金子霞翁)

(三) 木瓜

〔花器〕月形。

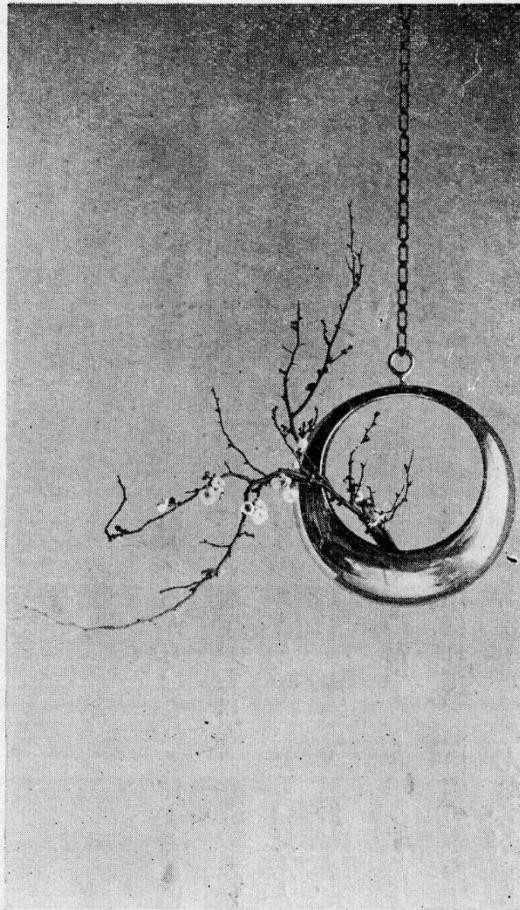
チラ〳〵開花をつけはじめた木瓜を、懸崖式に月形花器へ生けたものであります。

この月形と二重切へ挿す花は、必ず草の花形とすることが定りとなつてをります。つまり普通の形式によつて生けた花を倒した形に、卽ち眞は横に倒れて、副が却て眞の位置を踏むやうに、生け上げるのであります。

寫眞のやうに、中央に延び上つてる副が、根元と垂線になるやうに、生けられない場合もあります。これは釣花に限つて許されてゐることでありますが、かうした場合でも、その氣分だけは、垂線上にあるといふ氣持を現さなくてはなりませぬ。幾分形が崩れて投入式になつたやうな工合です。

特に注意すべきことは、月の輪を一箇所よりほか、切ることのできぬことであります。勿論輪の外で、二つに別れるのは、差支ありませぬ。

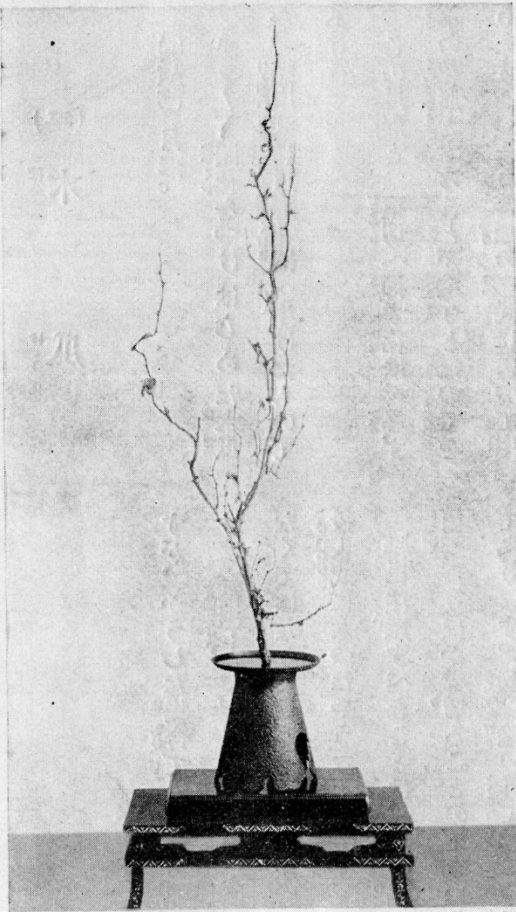
木瓜は、非常に枝に變化が多く、我儘にのびた枝を、そのまゝにかうして生け上げるのもまた、面白い風情のあるものであります。これは五本の木瓜で形作つてありますが、その附枝を利用して、生けると容易です。

（菊地芳玉）

〔四〕木瓜

〔花器〕玄猪、蒔繪の花臺。

これは、(三)(十一)の各圖と共に、各々別々の姿で、木瓜の面目を躍如たらしめてゐるものであります。木瓜はその枝振りに應じて、種々の姿に、生け分け、それ〴〵自然の風趣を現はすことができます。

棘があるために、お目出度いときや佛事供養のときなどは、遠慮することになつてゐますが、その枝振りの雅致と、花の優しさとは、誰にもよろこばれて、多く挿されてゐるものであります。しかし中々うまい花は出來ないものであります。且つ、枝が折れ易からぬところから、これを挿すときには腕にまかせて、右に撓めたり、左に曲げたりすることが多いため、だん〴〵と自然の風致を損じて、一寸見た眼にはうまくやつたやうでも、何となく拵へ物に思はれて、面白味の至つて少いものであります。こんな工合でありますから、他の折れ易いものゝやうに思うて、木振りによつて花にするといふ考へで挿し上げなければ、到底眞の風情ある木瓜は出來ないものであります。木瓜は本數を澤山生けるよりも、數を少くして、その枝の屈曲ある面白い樣を生かすやうにいたします。

(水　樂　奥)

(五) 紫蘭

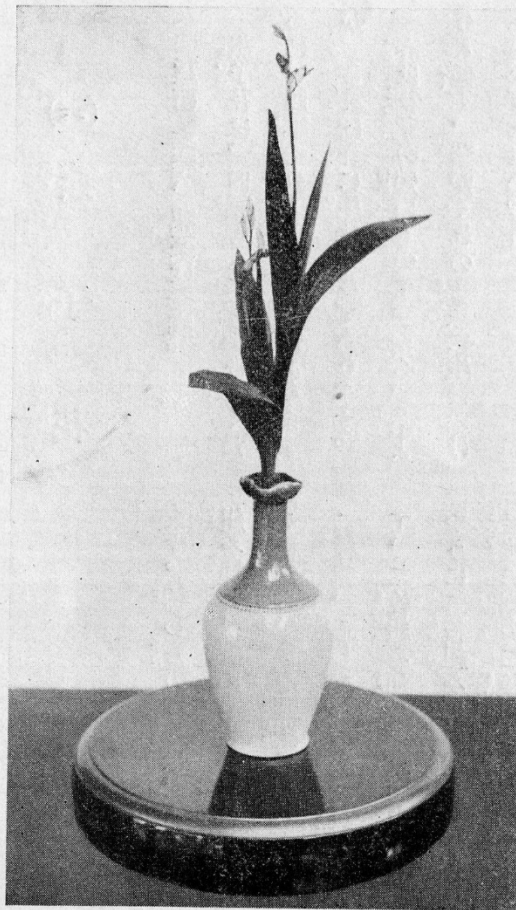
〔花器〕舶來酒器、花臺は朱盆の臺。

この紫蘭(紅蘭)は、體を一本、眞と副とで一本、都合二本をもつて挿すのが式となつてゐます。

すべてこの葉物を、花のある時節に生けるには、葉が大きいので、自然葉を組合せ、花をうまくあしらつて挿さなければなりませぬ。これは、擬寶珠、紫菀、海芋、萱草、カンナなど、共に、組葉ものと呼び、一つの形式ができてゐます。

紫蘭は、眞、副となるべき一株は、殆ど手をつけずに挿すことができるのですが、體の方は、花が長すぎて困ることがあるため、その時は花を引抜いて、先の軟いところを切取つて挿さなければなりませぬ。但し葉先を切ることは禁物です。

紫蘭は普通園培する宿根草本でありますが、時に自生のものを見ることがあります。葉は長くして幅一寸くらゐになり、六月の頃、花軸を抽いて、上部に總狀の紅紫色の花をつけます。水揚はまことによく、特別の方法を要しませぬが、挿花として用ひるときは、葉をほぐして用ひるやうなこともあります。

(春齋席)

(六) 燕子花

〔花器〕玄猪、花臺は巻脚。

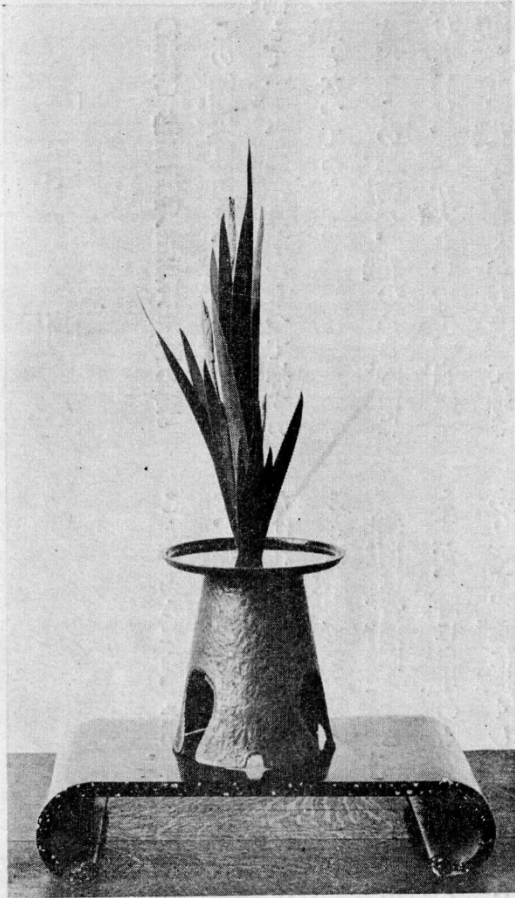
燕子花は、四季ともに花をひらくために、四季それ〴〵の挿方がありますが、これは春に生ける花であります。

春は花莖の短いものですから、葉よりも低く、葉がくれの氣味に生けなければなりませぬ。

まづ最初に、すつかり寸法をそろへて、葉組をいたします。花丈は、花器の底に達するやうに、充分深く生けなければなりませんから、豫め底の寸法をはかつておく必要があります。

これは七枚組で、十五枚の葉と、三本の蕾をもつて生け上げたものであります。挿し方の順序は、まづ體の三枚組を挿し、次に小さい二枚組を挿し、それから、花を葉蔭に挿します。次に二枚組、そして眞の葉、眞の花を挿して、二枚組を加へ、眞より副につゞくやうに二枚組を挿し、また花を挿して、最後に副の二枚組を入れたのであります。この組葉は全部葉數と共に、奇數でなければなりませぬ。

もし五つの組葉で生けるときには、體の三枚組の葉の次に生ける葉二枚、副につゞく葉二枚の、都合二組を略せば、それでよろしいのであります。

（城谷淑子）

（七）深山櫻

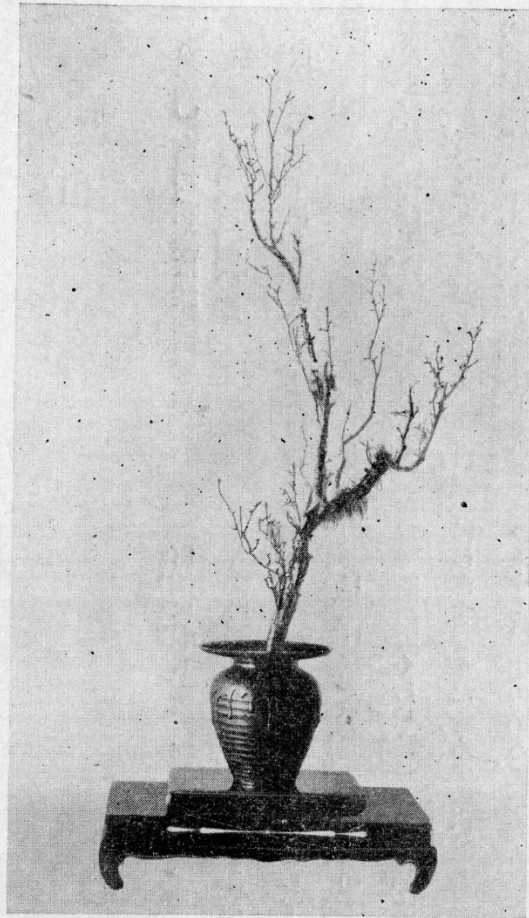
〔花器〕壺形薄端、花臺は唐木の平卓に朱緣黑塗の臺。

櫻は、池坊家の許物の一つでありますが、これはその規定によらずに、普通の行の花形によつて、挿し上げたものです。櫻でも、深山櫻であるために、かうした挿方をしたのです。

櫻を挿すときに、まづ注意すべきことは、賑やかに見せたいことであります。それから上段よりも中段下段の方に、花を多く使ふことであります。これは麓の櫻が咲き初めたといふ意味を現はすものであります。

總じて花には、一本の木とか一株の花とかいふものを、目標として挿すものでありますが、櫻だけは、一つの丘とか、一つの山とかいふ感じを起させるやうに勉めなければなりませぬ。

それ故、櫻を挿すときには、一種類でなく、一つの山といふ意味から、幾つかのものを交へて挿してもよいことになつてゐます。これは池坊家の傳物としての取り定めではありますが、何れの櫻を挿すときに於ても、その趣向だけは、花にこめて挿さなければ、櫻らしい櫻といふものは、到底出來ないのです。この寫眞は深山櫻であつても、その趣をよく備へてをります。

（松石やす子）

(八) 白桃

〔花器〕玄猪、花臺は紫檀の平卓に朱縁黒塗の臺。

白桃は、桃ではありますが、謂ゆる桃色の桃とは、單に花色が違ふばかりでなく、枝の伸び工合、またその趣に一段と變つたところがあります。白桃は見るからに強く、枝も勢ひよく、すく〳〵と伸び、普通の桃の女性的なのにひきかへ、白桃は、その全體から受ける感じが、如何にも男性的であります。

白桃はまた凛然たる風致とゝもに、その氣品を愛され、生花には、最も多くこれが用ひられてをります。

白桃に限らず、一般に桃は、眞、行とも、いづれの花形にも挿すことが出來ますが、若木のものは主として、眞の形に生け易く、老木は、行の形によつて横を廣くし、枝數を多く挿すやうにします。また老木の太いのを眞に使ひますと、力のある見事なものができますが、このときは、體にも力ある年經た古木を使つて、充分釣合を見せて生けねばなりませぬ。最も必要な注意であります。

桃は小枝の多いもの故、その枝を働かすやうにいたします。撓めがきゝますから、思ふやうに形がとれます。

(嵯峨八重子)

（九）梅

〔花器〕不老門、花臺は紫檀平卓に朱縁の臺。

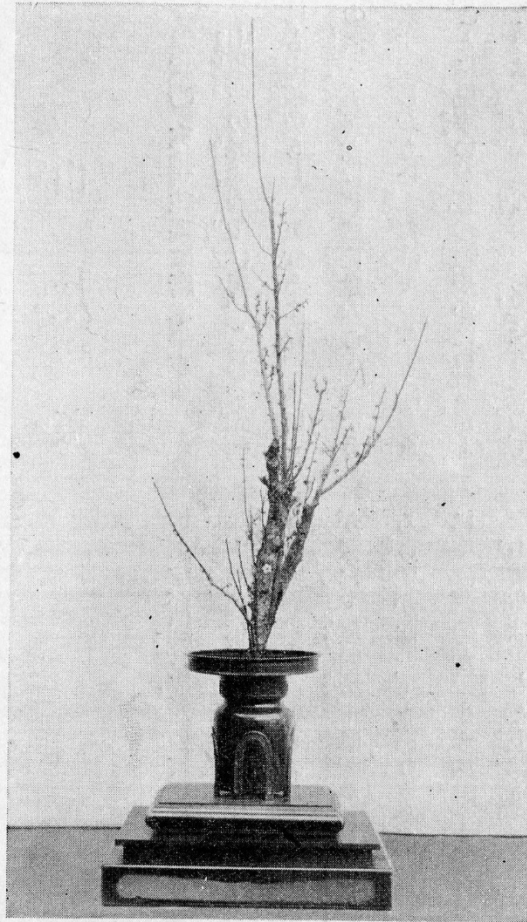
この梅は體のところが、何となく物足らぬやうにも感じられるでありませうが、老木を用ひて、この物足らなさを補つ　ところに、この挿方のうまさがあり、また生けた方の老巧なところであります。

梅は、眞の花形でも、また行の花形にでも生けることができますが、若木は眞の花形が工合よく、老木の場合は、行の花形が挿しよいものです。

梅の若木は、他の若木よりも更に勢がよく、すく〳〵と眞直ぐに伸びるものでありますから、眞の花形中でも、殊に端然たる、しかも勢のある姿に生けねばなりませぬ。古い小さい幹、卽ち曝木を見せて、眞や副等が、宛かもこの幹から分れたやうな趣に見せかけて、挿すこともあります。

また老木は、その枝に趣がありますから、これを充分に活して老木の感じを出すやうに努めねばなりませぬ。ですから、梅の場合に限り、或る程度までは、枝を見切つて十文字となることや、または枝と枝と重なつて、窓を作ることも、梅の勢を見せる點で許されてをります。

（井村照子）

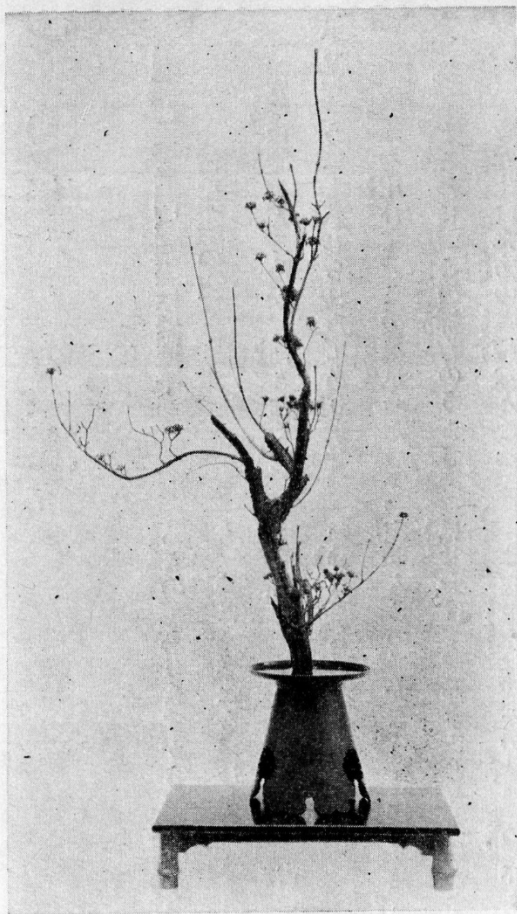
（一〇）山茱萸

〔花器〕玄猪、花臺は唐木平卓。

山茱萸の老木を生けて、これを如何にも山茱萸らしく見せるには、よほどの老巧者でなければ困難なことであります。しかも一本だけで、眞も副もまことに見事に、且つ賑やかに見せたところは、容易に人の模し得べき技巧ではありませぬ。

枝はその性質として、對生するやうになつてゐますから、切り枝や、十文字ができ易いものであります。この場合には、枝を前後に撓め上げて、切り合ふことのないやうに注意せねばなりませぬ。このやうな種類も少くないものですが、殊に草物には多くあります。

山茱萸は、眞の形に生けても、また行の形に生けてもよろしいのですが、たゞ眞の形では、あまり淋し過ぎる傾がないでもありませぬ。行の形に生けるのが、まづ無難でせう。

山茱萸は、もと支那原産の野生の喬木でありますが、いまは庭園の植込などに栽植されて、風致を添へてをります。早春、まだ葉の出ぬ前に、黄色い小さな花をつけるので、廣く知られてをります。これは眞、副を一本で作り、體を別の枝で作つたものですが、各枝の働き方に御注意ください。

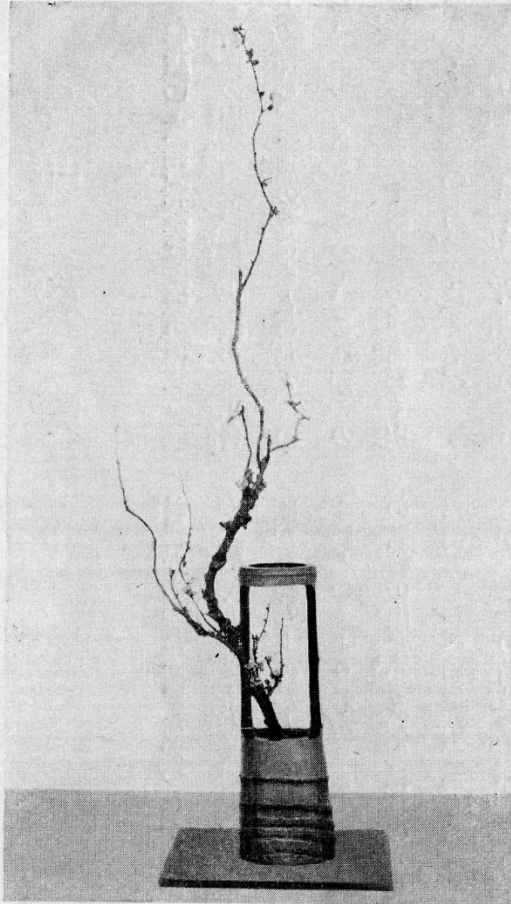
（後藤正一）

(二) 木瓜

〔花器〕兩窓、花臺は黒塗の薄板。

木瓜は、その枝數を少くして、枝の曲りくねつた、趣あるところを、工合よく、調子を合せて挿すことが肝要であります。この兩窓を用ひて挿す場合には、一層のこと枝數が少くないと面白くゆかぬものであります。しかるに、次の寫眞によつて御覽のやうに、太い幹を工合よく挿し、しかも高くのぼせてその調子をとつたところは、作者の非常な技巧といはねばなりませぬ。まことに見事な出來であります。

木瓜は棘があるために、ある場合は嫌はれますが、花としては、餘韻のある、風情に富んだものであります。またその枝の形にもいろ／＼の變化があつて、調子の工夫一つで、隨分趣きの異つたものが生け上げられます。

この花は、行の花形に挿して、最も見映えあるものですが、他の花で、行の花形を作るやうに、枝數を多くしては、却て面白くありませぬ。なるべく枝數を少くし、我儘に伸びた枝を巧に用ひて、花の嫌ひに背かぬやうに挿し上げるのが、この花の難しいところです。兩窓または二重切の花器の下の重に生ける場合は、體先は引き締めて挿して、窓を切らぬやうにします。

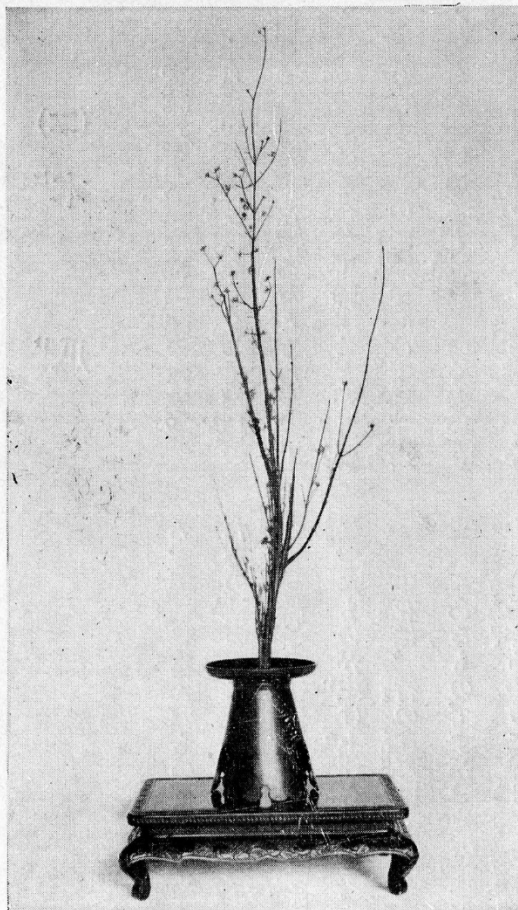
（松井幸子）

（三）山茱萸

〔花器〕玄猪、花臺は紫檀の平卓。

若木の山茱萸を、幾本か集めて工合よく挿し、一瓶の花にまとめたところが、苦心のあるところで、これがこの花の買ひどころであります。同じく山茱萸でも、（一〇）の老木にくらべますと、この方はずつと氣高い感じのするものです。また、こゝがこの花の見せどころでありませう。

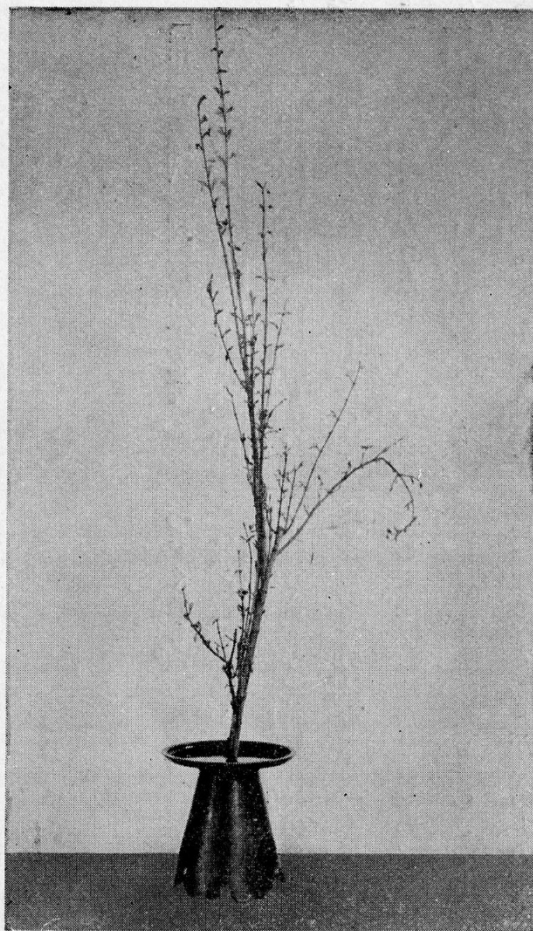
山茱萸の枝は對生してゐるばかりでなく、また若枝はあまり風情のないものであるから、これを工合よく使ひこなすところが、骨の折れるところであります。おまけに、この花を挿すのに材料があつたか、なかつたかは知らぬが、横挿しの枝もなく、たゞ一本立ちばかり挿し上げたところは、見上げた手腕といふより外ありませぬ。この副の若枝の出た小さな先枯れの木に、また何ともいへぬ價値があります。こゝらが一本立の若枝を生かして使ふ眞諦ともいふべきところであります。即ち、體は寫眞だけではどうも一寸判明しかねるところがありませうが、古枝を使つて、しかも小さめに挿したところが、宛かもこの若枝に花をもたして、隱居した趣を見せたものともいふべきであります。

（兒島文茂）

（三）連翹

〔花器〕玄猪。

連翹は、一名『いたちぐさ』ともいはれる灌木で、枝が蔓のやうにのびて、地に垂れつくと、根を出す特性を持つてゐますが、生花にも、その性質をしのばせて、一二箇所枝の垂れてゐるところを見せて、挿すべきであります。

それも、力なく自然の重みで垂れ下つてゐるやうなのでは、面白くありませぬ。その屈曲に、よく強味を見せなくてはなりませぬ。この寫眞の副先が、即ちそれであります。この注意は、ただに連翹の場合だけでなく、野生のものを生花の材料とする場合、殊に必要なことであります。勢を貴ぶ菖蒲を生けても、それが、あたかも玩具の積木をおいたやうなものでは、佛を作つて魂を入れぬ結果となります。地を破つて芽を出さうとするときの潑剌さ、清新さが缺けてゐては、眞の生花といへませぬ。周圍の景觀を、一枝一葉の中に偲ばせることも大切ですが、その習性を失はぬことは、更に大切であります。

早春、未だ葉の芽ばえない前に、黄色四瓣の美しい花をひらきますが、これは葉が出てから用ひたものです。

（兒島文茂）

（四）桃

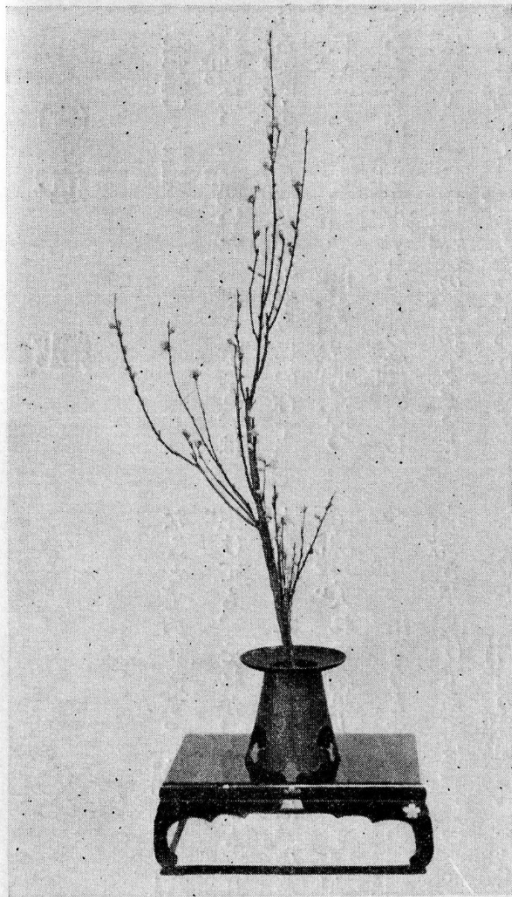
〔花器〕玄猪、花臺は唐木平卓。

（八）の白桃の、如何にも男性的に生け上げなければならないのに對して、普通の桃はいとも素直に、やさしく挿すことを忘れてはなりませぬ。あまり上手に挿さうといふ氣持を去つて、ゆつたりとした氣持で挿すのがこつであります。

まづ用意いたしました桃の枝の中から、一番大きくて立派な眞と、それに次ぐ副と、體によいと思はれる枝を見立て丶から、體から眞につゞく枝、即ち谷から立のぼりまでは、小枝を働かして工合よく高低をつけ、眞から副につゞく枝も定めます。

枝が定つたら、體から先に順次挿して行きますが、特に小枝の多いものですから、その枝をなるべく働かすやうにして生けねばなりませぬ。

花は、女性的なやさしさを出すために、なるべく開きがちのものを眞に用ひます。また眞と體との間も、花の澤山咲いた枝を特に用ひます。そして次に眞と副との間は、多少蕾がちなものを用ひるやうにいたします。撓め易く、生けよい材料ですから、かうしたもので、生け方の練習をなさるやうおす丶めいたします。

（近藤いち子）

(一五) 花梨

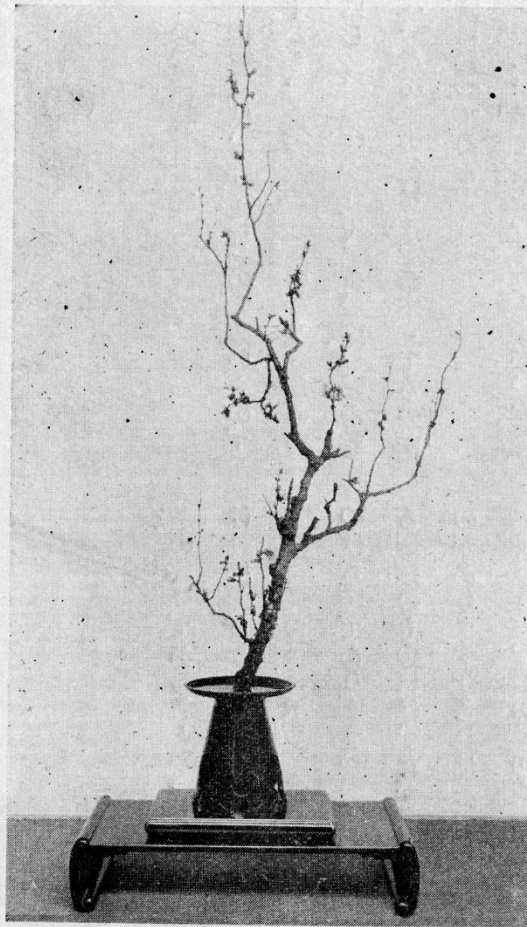
〔花器〕玄猪、花臺は黒塗の臺。

花梨は、木瓜と稍相似た樹容のものでありますが、木瓜が八九尺の高さより延びないのに反して、花梨は二三丈にも達するほどの、大木ともなるものですから、總じて木瓜よりずつと雄大な趣を見せて、生けなければなりませぬ。

花は、春、鮮紅色五瓣の花をひらきます。この寫眞はよくその本性を現はして挿されてをります。殊に、少ない枝でまとめたところが見ものであります。その内でも一本で眞をまとめ、且つまた副も一本から出來てゐるのは、自然がこれを助けてゐることはいふまでもないことではあるが、かやうな材料を工合よく配置するのは、中々骨の折れるもので、一寸出來にくいことであります。しかし、この木は幸なことには折れ易くないために、また樂なところもないではありませぬ。

次には體ですが、これは作者が餘程困つたやうな樣子が見受けられぬでもありませぬ。眞の前についてゐる小枝を利用して、體の立のぼりを助け、體の落ち込みのところを輕くつかつたところなど、苦勞のあとがあり／＼と見られるのであります。

(富小路稻子)

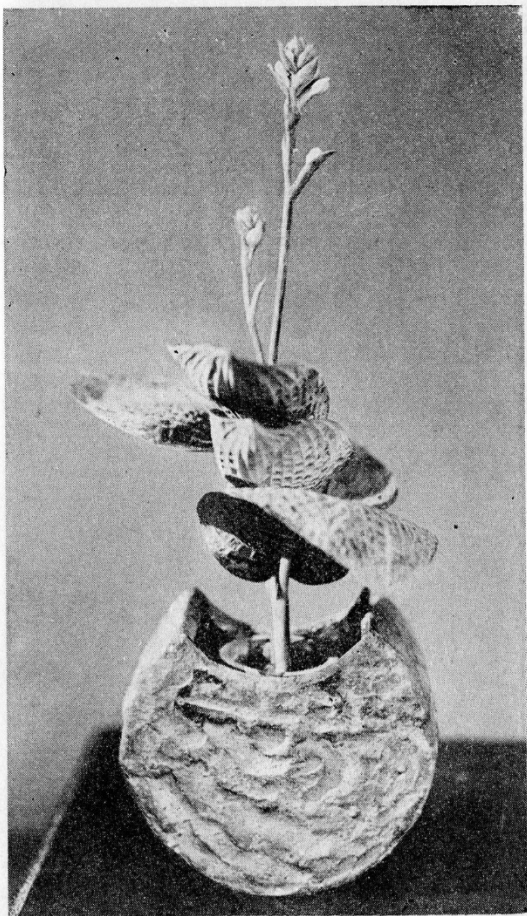
（一六）擬寶珠

〈花器〉三日月。

擬寶珠は、非常に葉の大きいものですから、まづ葉を葉蘭のやうな組み方にして、葉ばかりで、眞、副、體を整へ、眞の葉の後に花を二本立てるのが式になつてゐます。

但し、葉で眞をつくりますが、實際の眞は花で立てるのですから、葉の方は低くし、その代り體と副とは少し長目にして、花との釣合をとります。

眞に立てた花は、その一本が花の根元の垂線上にあるやうにし、他の一本の短い方は、その花の後で、幾分副方に傾いたやうに挿します。但しこれは眞の部分であることを、承知してゐなければなりませぬ。

擬寶珠の盛は、夏季淡紫色の花をつける頃でありますが、もつと早く出る種類のものには、花が葉より低いものがあります。これは眞の花を葉の後に挿さずに、眞の葉の向をかへて、その前へ挿すこともできます。この際は、葉表を前から見るやうに挿さなければいけません。

水揚法は、ざつと熱湯をかけて、すぐに冷水にうつすだけでよろしうございます。この場合、湯を注ぐ時間が長すぎぬやう注意せねばなりませぬ。

（兒島文茂）

（七）薊

〔花器〕支那の古銅器、花臺紫檀の平卓。

薊は、その葉に棘のある草ですから、吉事、佛事には遠慮します。

葉は、葉柄がなくて暗綠色、棘はその緣についてゐます。初夏の候に淡紫色の花をひらきます。風情に乏しい花ではありますが、葉の雄々しく、むしろ怪異な姿を、うまく生かして挿し上げると、相當雅趣を見ることができます。花形は、あまり大きくない方が、毒々しくなくてよいものです。

一體薊ばかりでなく、草ものはあまり大き過ぎると、面白味の少いものでありますから、なるべく小さく挿して、それを大きく見せることが、花を生ける上の秘法であるとも言へませう。殊にこの薊のやうなものは、葉の我儘なものでありますから、それを成るべく小さな範圍内に巧にまとめて、美しい調和を見せるところに、初めて挿手の伎倆と、挿花の面白味とがあらはれるといふことができます。そのつもりでこの寫眞をよく御覽くださいませ。

水揚は、根元を碎いて食鹽をすり込み、後にたつぷりある水にうつして、充分水の揚つたところで、生けるやうにします。

（兒島文茂）

（六）燕子花・太藺

〔花器〕水盤、花臺は卷臺。

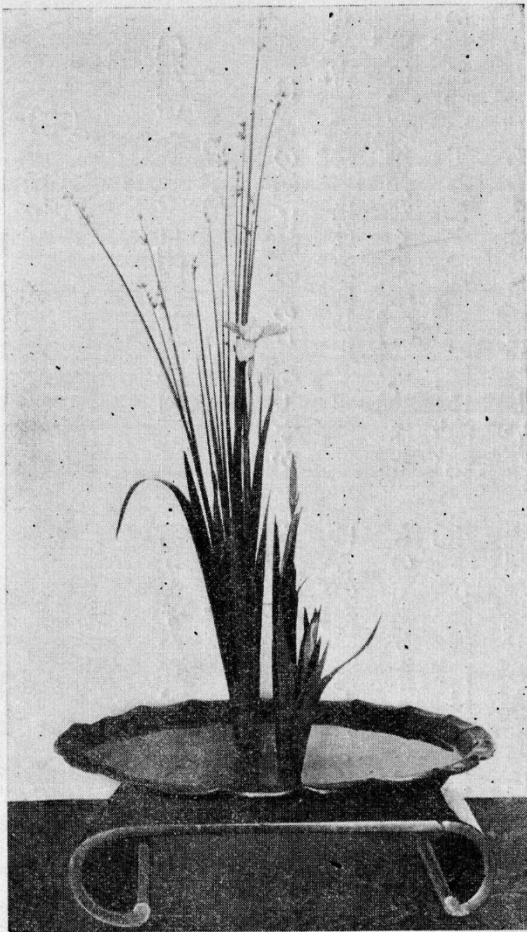
夏の燕子花を生ける場合には、その花を葉よりも高く出すといふのは、池坊家の敎へであります。次の作は、燕子花ばかりで二株に挿して、その大きい株の方に太藺をあしらつたものであります。見るからに涼しさが溢れてゐるではありませんか。

夏の燕子花は、春のものよりも幾分か緩やかに組む必要があります。

燕子花は花を賞美すると同時に、葉も見事なものでありますから、葉と花との調和には、一層の注意を拂はねばなりませぬ。一體に、燕子花の葉は、四季を通じて、絶えず後から後からと生えてくるものでありますから、前葉の三枚を組むときは、必ず中に低い葉を組み合せます。いつもこの點に留意せねばなりませぬ。

太藺は、元來原野の濕地に自生するものでありますが、今は培養されて『まむしろ』などを織るに用ひられてゐるので、一般に知られてゐます。燕子花と同樣、すつきりした、如何にも水邊の草の代表ともいひたい風情が一般に愛でられてをるのです。

太藺は、十數本まとめて、長短を作り、燕子花の後に挿します。

（小池治子）

(一九) まゆみ・あらせいとう

〔花器〕方鼎、花臺は唐木平卓。

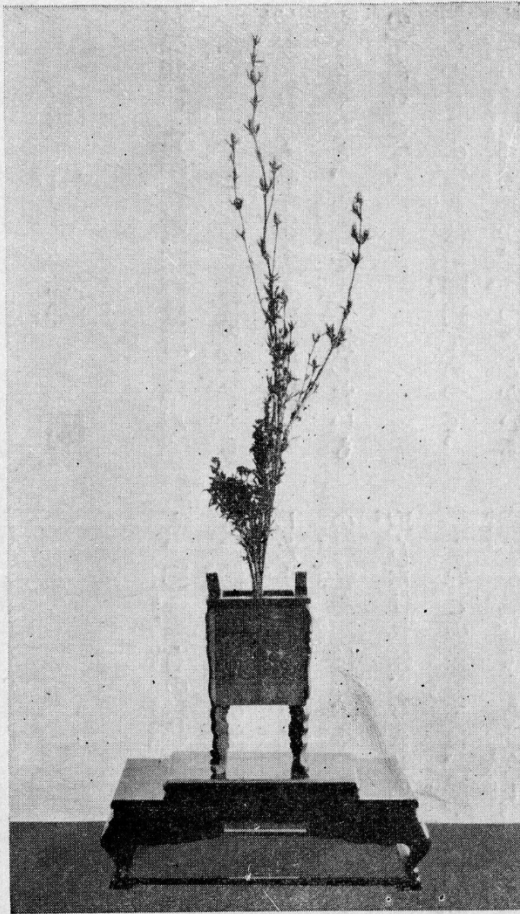
まゆみは、その幹に癖があつて、なかなか挿しにくいものでありますが、その癖と癖とをうまく組合せて、長短を整へ、一つの花とすることが、専らの骨折であります。

これは、あらせいとう五本で體を作り、まゆみ四本で逆勝手に生けたもので、あまり左右に擴げずに、體も副も引き締めて挿したのであります。

まゆみは、山野に自生する落葉の喬木で、昔はこれをもつて弓を作つたところから、この名が出たのであります。葉は對生し、その形は楕圓形或は卵狀の楕圓形をなし、周圍に細いギザギザがあります。

五六月ごろ、淡綠色の花をひらきますから、生花には、この花時を選ぶのがよく、あらせいとうも丁度相前後して、花をもつのであります。

あらせいとうは、外國の原產ですが、この頃は我國の庭園にも、ひろく栽培せられるやうになりました。莖は、その基部が灌木樣をなし、二三尺の高さに伸び四五月頃紫赤色の美しい花をつけます。水揚には、切口を砕いて、二三秒間テレビン油に浸してから、水に移します。

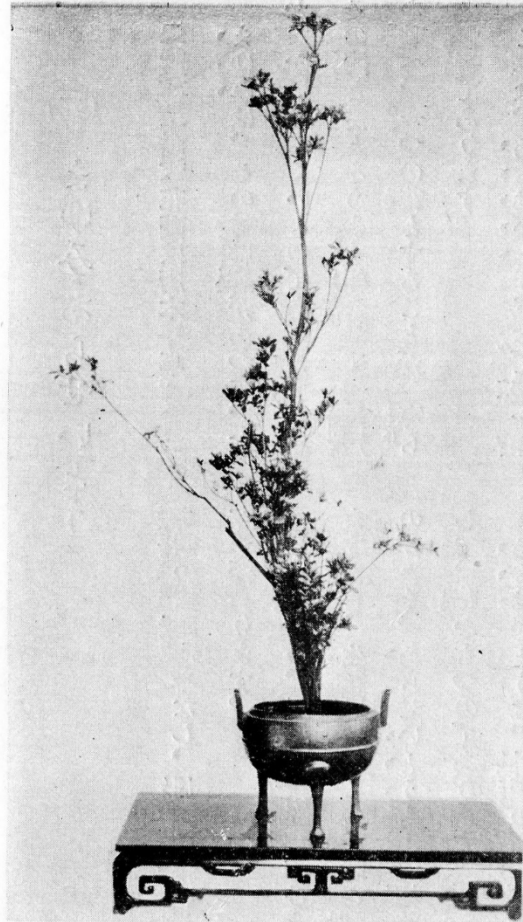
(金子霞障)

（二〇）山躑躅

〔花器〕古銅瓶掛、花臺は唐木平卓。

躑躅は灌木であるだけに、根元から枝が別れるものですから、生けた姿もざんぐりと、水際を低く挿したいものであります。

しかしこの寫眞は山躑躅であつて、普通の霧島躑躅とか、さつきとかいふものと、その出生を全く異にしてゐるものですから、どこかに淡泊な、飾り氣のない野生の風情を見せて、その性質をうつさねばなりませぬ。この副や體が、努めてその氣分を表はしたのであります。

しかしまた躑躅には何の種類にしても、躑躅通有の特性があるものですから、體より立ちのぼりあたりに、簇生した小枝をたくみに使つて、こゝにその特性を現はし、全體の釣合をうまく取らなければなりませぬ。

またこの寫眞では、體や副に、淋しい樣子を見せてゐる釣合上、眞を立ちのぼらせて、更にこゝに山躑躅の特性を見せてゐます。あまり澤山小枝を使はずに、幹を見せようとして調子をとつたところは、蓋しこの花の更に苦心したところでありませう。これもまた後進者の、特に注意して、見るべきところであらうと思はれます。

（兒島文茂）

(三) 河骨

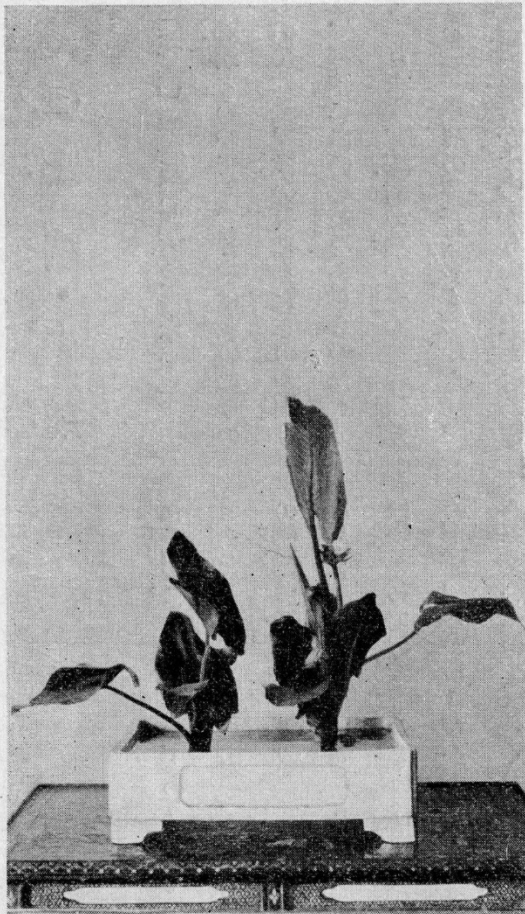
〔花器〕角水盤、花臺は蝶貝の臺。

水盤を用ひる花は、一株に挿すこともあれば、水物を二株にわけて挿すこともあります。これは河骨を、右の方が眞と副、左の方が體と、二種にわけて生け上げたものであります。この二株の間は、魚道と呼ばれてゐます。從つてこの挿し方を、魚道分の挿し方などとも申します。

これもカンナなどゝ同じく、組葉もの、一つであつて、うまく葉をかへて形をつくらなければなりませぬ。葉を奇數に用ひ、花は二つの偶數を使つても、全部で奇數としなければならぬことは、申すまでもありませぬ。

河骨には卷葉があるものですから、工合よく、花の側にあしらふやうにしなければなりませぬ。眞と副との株に花を二つ、體の方の株に花を一つ使ひました。

水揚には、ポンプを用ひて、煎茶の冷たいものを注入します。また柿澁の五六倍にうすめた液を注入するのも、同じやうに効果があります。一體に雅致あるものながら、初心の方には、なかなか困難な材料とされてをります。

葉の使ひどころは、寫眞によつて精しく御覽くださいませ。

(兒島文茂)

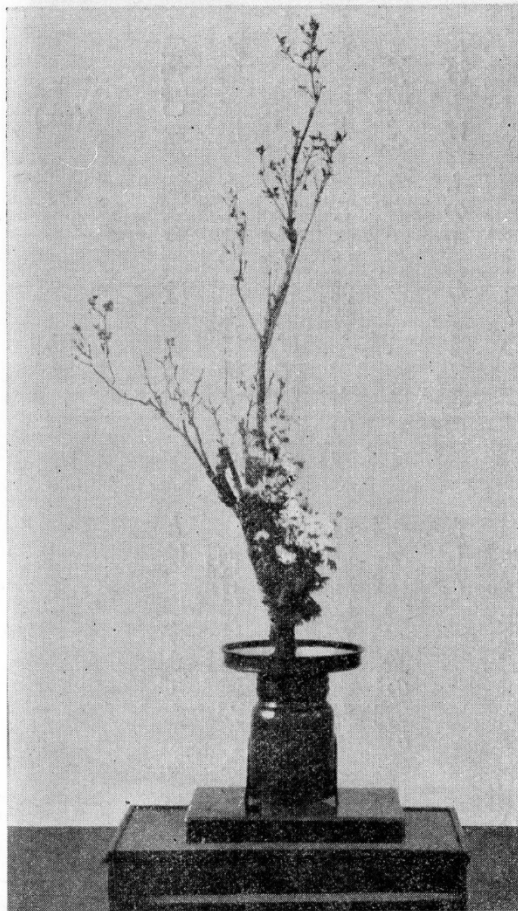
(三) 躑躅・小菊

〔花器〕不老門、花臺は唐木平卓。

躑躅といつても、これは花の盛りのものでなく、秋の紅葉したものを用ひて、根締に白の小菊をあしらつたものであります。躑躅の葉が少くなつたところに、小菊の花が數多くつけられ、全體の釣合がすつかり整つたところを御覽くださいませ。

元來躑躅などを挿すときには、成るべく横ひろがりに挿して、根元は低くした方がよいのですが、寫眞のやうな材料では、その例によることは出來ません。その出生から離れて、一つの紅葉ものと見做して挿すために、かうした花形によつたものであります。

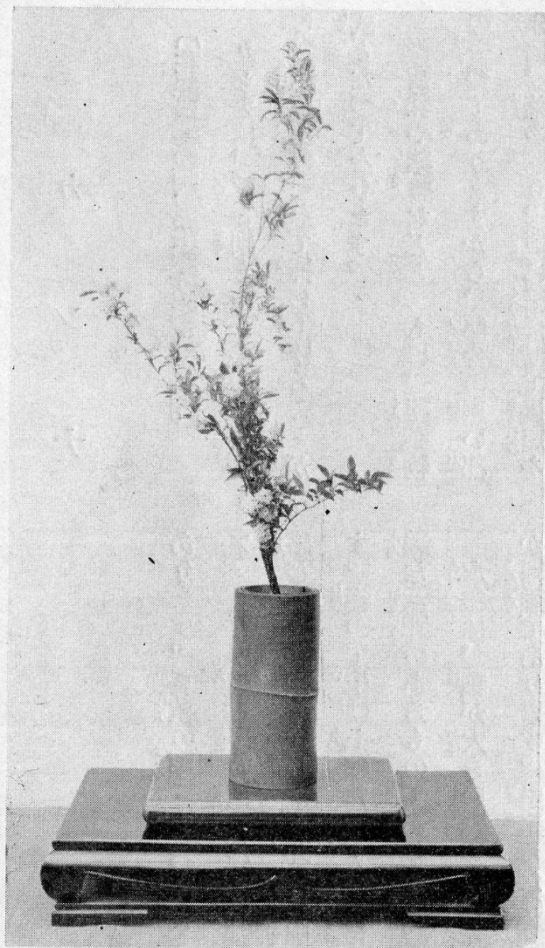
またこの季節のものを、普通の躑躅の時期に挿すやうに、根元を低く見せるとすると、どうしても小菊の根締では體としての完全なものは出來ないものです。しかし、皆かやうにせねばならぬといふのではなく、秋の季節の躑躅であつても、これに花を持つたもの、つまり、返咲きのものならば、初夏のものと同様に、低い根締で、小菊などを用ひずに、躑躅ばかりで横ひろがりのものに挿し上げた方が、如何にも躑躅らしく見えて、大變工合がよいものであります。

(野間みつ子)

(三) こでまり

〔花器〕ずんど、花臺は唐木平卓。

可憐なこでまりを挿すには、枝の多いのを望まずに、風にも堪へないといふやうな、ものやさしい風情をあらはさねばなりませぬ。

こでまりは、春の末に小さい花が簇り咲いて、手毬のやうになるため、この稱があるものです。この名稱からしても、ちよつとやさし味のあるものであります。從つてその挿し上げた花も、この名稱に背かぬやうにしなければなりませんが、その枝振りも、かく挿すのに挿しよいやうに出來てゐます。しかし初心の方には、一寸扱ひにくく、つい枝數を多く挿すやうなことになるものであります。枝數を多くすると、どうしても花に强味が出來、ゴツゴツしてくるものですから、なるべく枝數を少なくし、柔かさうな枝を使つて挿し上げなければ、うまい味を見せることが出來にくいものであります。この寫眞も五本くらゐの枝で挿したものゝやうに思はれるのです。眞が一本で出來てをつて、その後の中央部に、後に向つて垂た枝がありますが、これは眞についてをつた枝でありませう。小枝を利用すると形の取れ易いものです。

(秋山松子)

(二四) カンナ

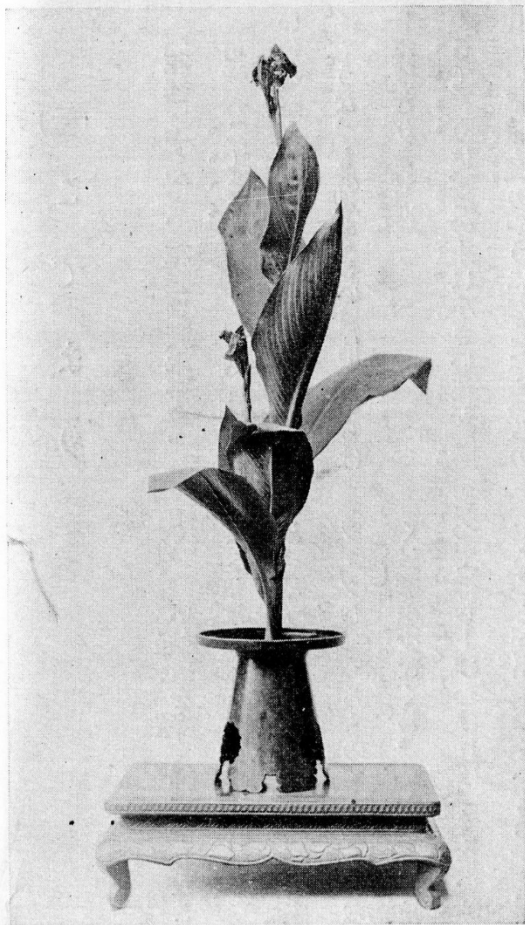
〔花器〕玄猪、花臺は蝶貝の臺。

カンナは、眞と副とをまづ一本で挿し、體を別の一本で挿し上げることが式となつてをります。

擬寶珠や紫菀などとゝもに、組葉物の一つでありますから、都合の惡い部分は、葉を取り、更に組合せて長短をつけ、ほどよく形を作つて二本挿せばよろしいのであります。撓めがきゝませんから、なるべく葉振りのよいのを選んで挿します。

カンナはだんどくといふ和名がありますが、高さは普通三四尺から六七尺までに成長し、葉は芭蕉に似たものであります。夏秋の頃、花をつけますが、アメリカに最も多い植物だけに、その感じは大まかで、しかも非常に強烈です。從つて生け上げた姿も、自ら濃艶な趣のあるものであります。

水揚は、葉が大きいために、なかなか困難であります。出來るだけ細心の注意を拂つて、次の方法をお試みになつて御覧なさい。まづ根元を割り碎いた後、山椒の實を澤山挾み込み、その部分を燒いておくのです。また別法としては脱脂綿球をつくつて、これに稀鹽酸を浸し、同樣にして割口に挾んでおいても同樣の效果があります。

(春濤庵)

(二五) 夏　菊

〔花器〕玄猪、花臺は唐木の平卓。

菊の季節は、いふまでもなく秋でありますが、これは五六月頃に開く、謂ゆる夏菊を挿したものであります。花形は、眞に近い行の形に挿すのが、最もよろしいやうであります。

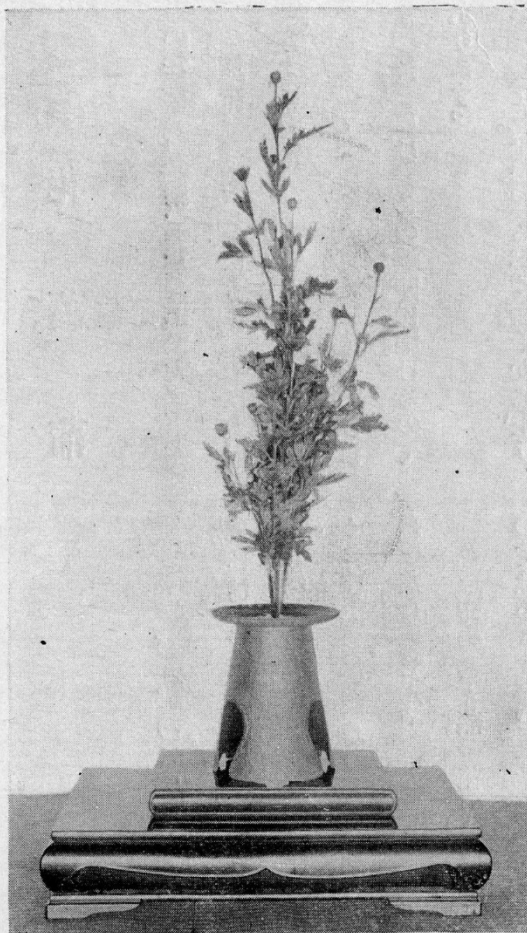
花ばかりを主とせずに、葉を上手に生かして行くことは、特に花と葉のあるものを生けるときの大切な注意でありますから、葉の混み合つて邪魔になるところは切取りますが、他はあまり切取らぬやうにして、生々と見えるやうに挿したいものであります。

夏菊は、夏白菊とも小白菊ともいはれてゐます。日本の在來種ではなく、近時渡來したものでありますが、夏季花の比較的少いときに、徑六七分の愛らしい花を開くところから、生花の材料として賞玩されてをります。全體の高さは、一二尺に及び、花の一時に澤山咲き出でた樣は、なか〳〵美しいものであります。

水揚法は、菊と同樣、根元を燒いて逆水をするのが最も簡單な方法であります。逆水とは、たゞ枝を逆にして上から水を注ぐだけです。

御注意までもありませんが、眞の前と眞の後とは、同じ數に生けます。

(細田きい子)

（二六）花菖蒲

〔花器〕新蓬莱、花臺は唐木の平卓。

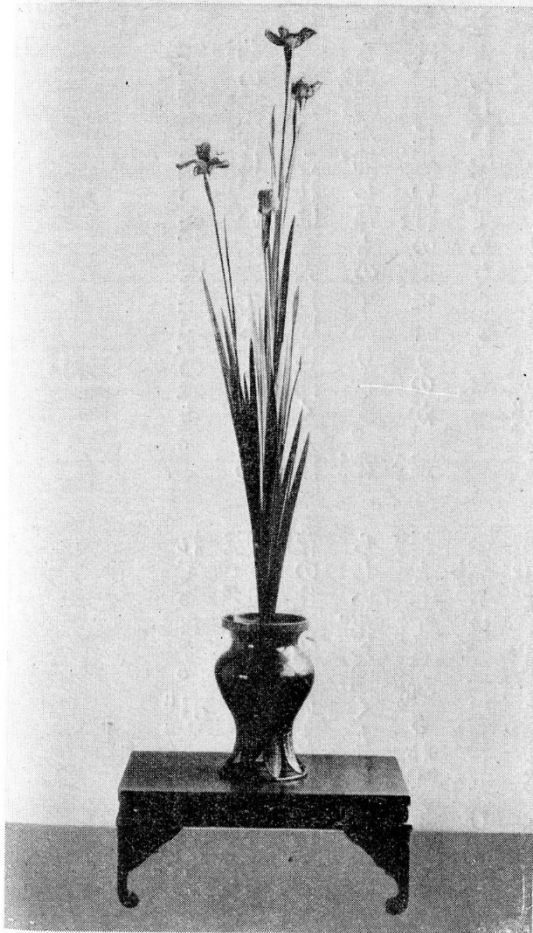
花菖蒲は、葉の中にも花の中にも、まことに男性的な趣を見ることのできるもので、夏季六月頃に花を開きます。挿花には、この季節に用ひるのであります。

従つて花は、なるべく賑やかに生けなければなりませんが、低いところに蕾を使つたのは、菖蒲が略同じ高さになつて花をひらく性質を持つてゐるからであります。これは花くらべといつて、その本性をあらはすために、同じ高さに花をならべても差支へないことにされてゐるものです。

また普通の場合よりも少し高目に、眞にはなるべく開花を使ひます。葉も花も眞直にのびたものを選び、勢よく伸び上つた姿を、そのまゝ現はさねばなりません。

花菖蒲の葉と燕子花の葉はやゝ似よつてはゐますが、燕子花のは柔かく、花菖蒲の方は強く見えます。前者を女性的とすれば、後者はあくまでも男性的であります。これは、單に葉のみでなく、花の中にもこの氣分の覗かれるものです。

花菖蒲の三枚葉は中高に組み、高い葉に向き合せて組みます。

（金子霞障）

(二七) 紫木蓮

〔花器〕壺形薄端、花臺は唐木平卓。

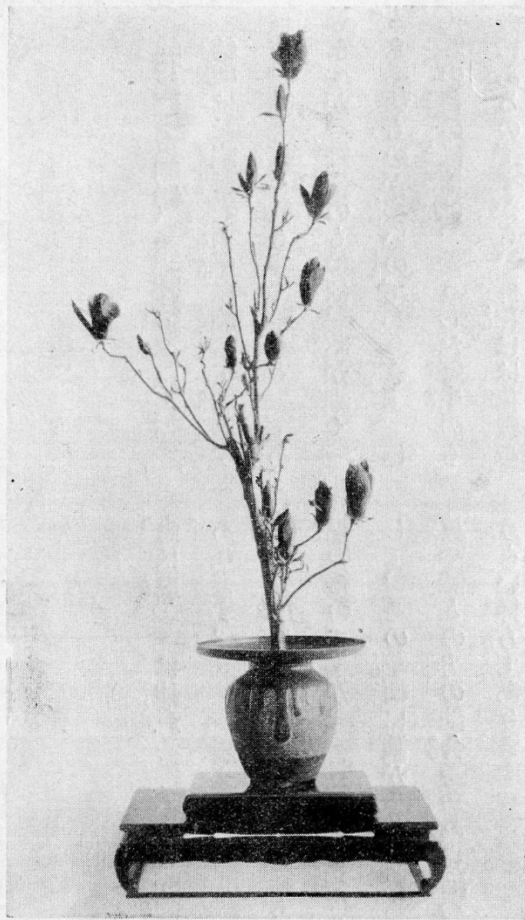
紫木蓮は、眞、行、草いづれの花形にも挿すことができますが、まづ行の形に挿すのが、一番見よくて、挿しよいものであります。普通の草花などと違ひ、大木に咲く、大まかな大輪の花ですから、その積りでこれを生けねばなりませぬ。

三四月頃、大きな紫色の六瓣の花を咲かせて、庭先に美觀を添へるものでありますが、晩春の花でありますから、のび〳〵として、如何にも健やかに生ひ立つた姿を現すやうにせねばなりませぬ。

一番恰好よく生けられるときは、葉が少し出かゝつてからで、葉が出てくるやうになると、花の方は比較的少いものですから、葉をうまくとり入れて大きな花を見せて行くと、大層工合がよいものです。

水揚法としては、根元を強い火で充分に燒き、冷水に移しておきます。また、一旦打碎いた根元を、稀鹽酸か、或は酒精に一二分間浸しておきます。花は脆いものでありますから、生けるまでは、丁寧に紙につゝんでおかねばなりませぬ。

(二七) 紫木蓮

(鈴木富子)

（六）桔梗

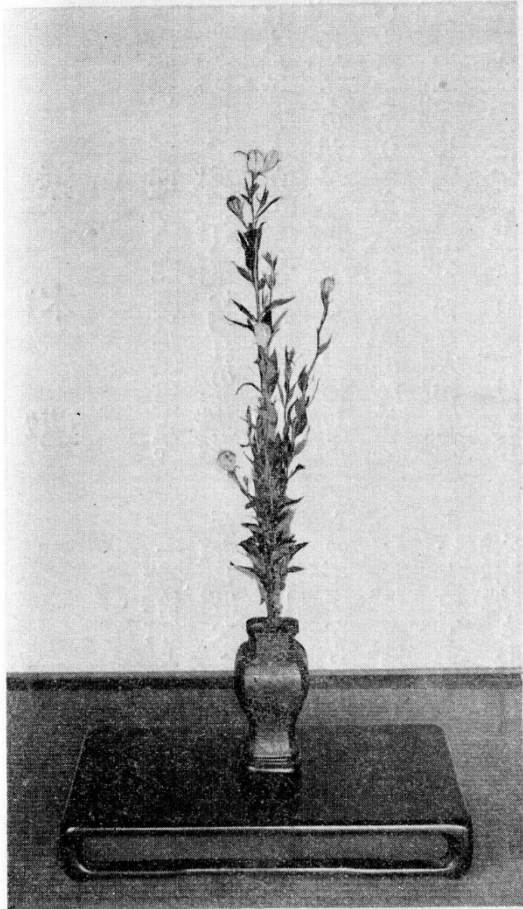
〔花器〕古銅器、花臺は唐木平卓。

桔梗は、肥料を上手に施して栽培すれば、莖も太く枝も多くつくものでありますが、野生のものは、莖が細く一本立ちのものが多いのであります。ほんとの花の風情は、かうした野生のものにあるのですから、挿花には花數をあまり多くせずに、あくまでも氣高く氣品を見せるやうにしたいものであります。

桔梗を挿して、誰でも苦心するところは、葉をうまく配置することであります。殊に一莖一花のものを挿すときには、桔梗に限らずどんなものでも、尚ほ更こゝに注意を拂ふことが肝要であります。

この寫眞は、一寸副が高いやうにも見ゆるのですが、これは副先を蕾にして、その花梗に葉が少ないために、眞や體との力の釣合を巧みに取つた、うまい挿方であります。

元來體先の花よりも、副先の花の方が小さいなどといふことは、まことに釣合のとりにくい挿方でありますが、かうした挿方がうまく手に入つて、巧みに挿しこなすことができるやうになれば、蓋し材料に對する苦情はあまり言はなくともすむでありませう。

（兒島文茂）

(二九) 伊吹・小菊

〔花器〕玄猪、花臺は巻臺。

伊吹(圓柏)は、その老木を挿せば何でもないやうなものでありますが、挿花の材料とするものは、多くは若木でありますから、それを如何にも老木のやうに見せなければなりませぬ。こゝが苦心を要するところなのです。

　さればとて實際伊吹の曝木などを使ふと、なか〳〵工合よく出來にくいものであります。この寫眞は眞に四本、副に三本の若木を使つたものですが、眞前に使つた短い一本が眞の眞正面にあるために、あるかないかが一寸わかりにくいやうになつてゐます。それからその次の一本が陽方、卽ち副の方から、眞を抱く氣味に使ひ、次には眞、次には眞前の長いのと、反對に一本を使つて、これはまた後から眞を抱くやうな工合にしたのであります。

　またその次には、副の別れるところに一本、次には副、最後に、副の別れのところのものと、副との間に低く、一本を挿したのであります。

　小菊は、花や葉が非常に混み合つてゐるものですから、かなり整理してから生けます。殊に根元の葉は除り去らぬと、すつきり生上りませぬ。伊吹は練習によい材料です。

(二九) 伊吹・小菊

(長谷川末吉)

（三〇）落葉松・百合

〔花器〕 **薄端、花臺は唐木平卓。**

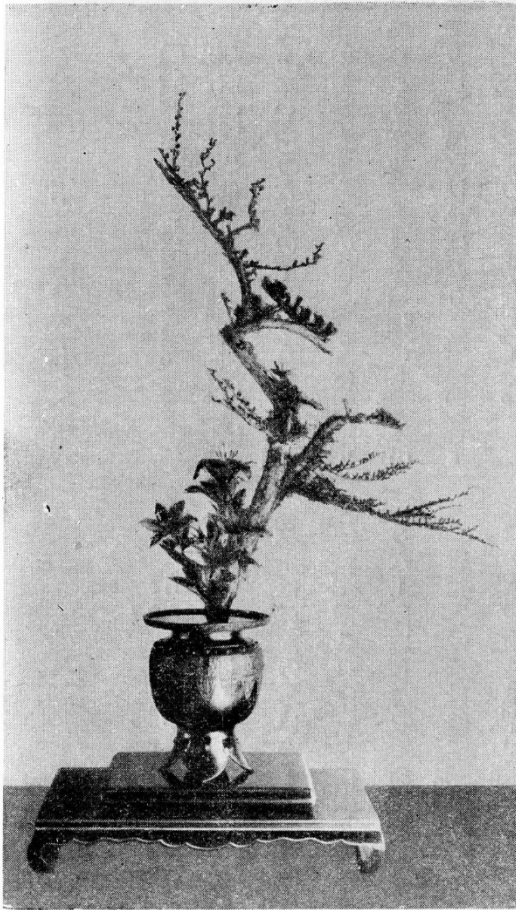
生け方は逆勝手、行の花形に生け上げたものであります。

老木の落葉松二本をもつて、眞と副とをつくり、百合を體に用ひて、根締とした、如何にも上手な取合せと申すべきであります。

落葉松は、比較的成長の早い木であつて、老木は少なく、若木を多く用ひるものですが、この木は非常に脆いために、撓めて花形にあてはめるといふことは、頗る困難であります。

しかしその若芽には、また妙に面白味があるので、誰も一寸手を出したくなるものです。この寫眞の、眞に使つた枝にしても、作者は餘程苦心をして鋏をとつた跡がうかゞはれます。

ところでこの花には普通から見ると副がないやうに見えるのでありますが、それにも拘はらず陽方と陰方との釣合がよくとれて、まことに不思議な花形であります。それは何故かといふと、眞の途中が内方に折れ込んで、しかも力があるために、その調和がよくとれてゐるのであります。もしこれを撓めでもすると、非常に無理をせねばならないばかりではなく、到底このやうな立派な花にはならぬものです。

（笠尾ため子）

（三一）鐵砲百合

〔花器〕壺形の銅器、花臺は紫檀の平卓。

鐵砲百合は、一本の莖に幾輪もの花が咲くので、その花の配置を手際よく生上げるには、苦心の要るものです。

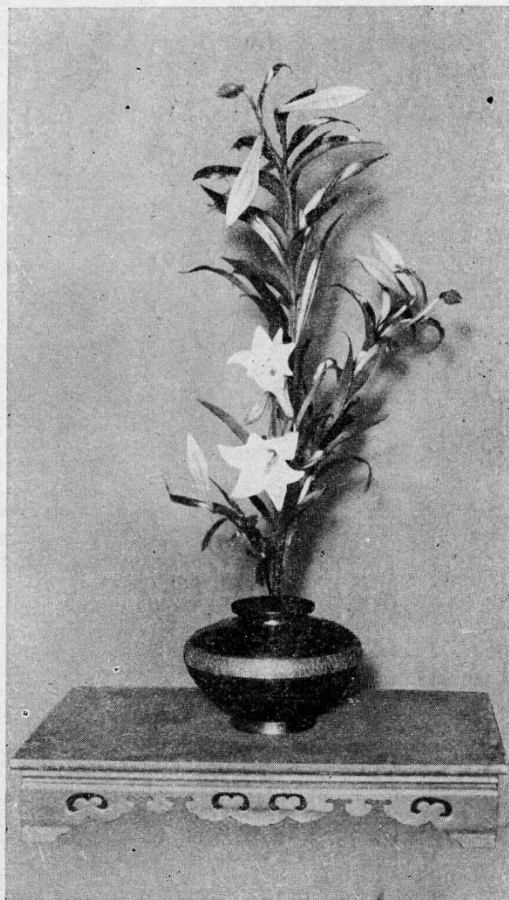
かうした花の大きいものは、本數で數へずに、輪數が奇數になるやうにします。こゝでは體の部分に四輪、眞の部分に四輪、副の部分に三輪、都合十一輪を使つて、逆勝手に生けたものであります。

これは撓めのきかぬものですから、それぐ＼材料によつて適宜に使ひ分けなければなりません。こゝでは體先に上向きの蕾一輪を使つて、眞の花に相對せしめてをります。尙ほ體の打込みも下向きの開花でその位置を取らせ、上向きの半開の花で體の立のぼりを作つてをります。副も、右前に出た蕾で、その位置を形作つてをります。

花頸は同じ方向に向かぬやうに、よく注意しなければなりませぬ。輪數もあまり煩はしい程度なら、惜しみなく切り取ります。開花を多く用ひるより蕾を多く用ひて形を作らぬと、あつさりと生上りません。鐵砲百合は、白色の香氣ある、氣品の高い花として、廣く生花に用ひられてゐます。

水揚は不要です。

（池坊專啓）

（三）衞矛・濱菊

〔花器〕伊萬里燒の壺、花臺は朱緣黑塗の臺と紫檀の平卓。

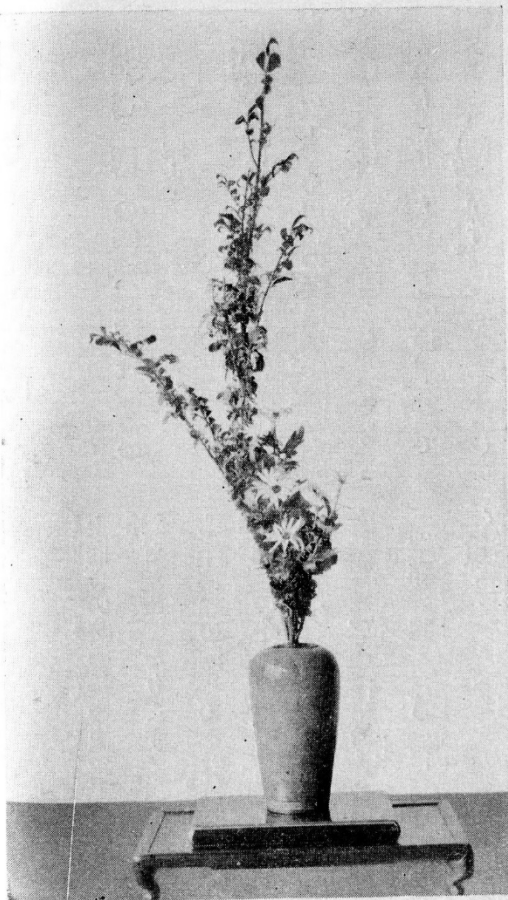
生け方は、本勝手です。

衞矛の枝は、その葉が一方にばかり出てゐるため、まづ眞を見立て、これに相對するやうな枝をとり、副として、眞と副との葉が和合するやうに挿すことが、肝要であります。

體に用ひた濱菊は、その花の近くにばかり多く、葉が出るものでありますから、それを工合よく切り透かして用ひることが、大切な注意であります。

衞矛は山野に自生する落葉灌木で、六月頃淡黄綠色の花を開き、秋に至つて實を結びます。生花には、美しい秋の紅葉が一番多く用ひられますが、これは錦木と書かれるだけに、その美しさは格別であります。

また濱菊は、その花が菊に似てゐるために、この名がありますが、菊とは全然性質を異にしたものであります。これは秋に枯死せず、冬を越して、春芽を出します。秋、白色の花をひらきますが、花頸が非常に長く、葉は密生してゐるために、生けにくいとされてゐます。姿の楚々として、如何にも愛くるしいのを喜ばれ、多く生花の材料とされてゐます。

（栗屋冬子）

(三) 伽羅・小菊

〔花器〕耳附ずんど、花臺紫檀平卓。

伽羅の葉は、片葉ものと言つて、表を一方にばかり見せてゐるものでありますから、その表と表とを、眞と副とに相對するやうに、挿さなければなりませぬ。

池坊の定りとして、花として賞すべき花のない草木には、他の種類の花をあしらつて、これを補つて行くのが式となつてゐます。卽ち體の部分だけに根締といつて、別の花を用ひるので、眞と副とは同種類のものでなければなりませぬ。

寫眞は伽羅の青葉に、小菊の白花をあしらつたもの。濃艶な美しさはなくとも、まことに生き〳〵とした、小菊の姿であります。一つ〳〵獨立させては、さしたる趣を添へぬものでありますが、かやうにして小菊と對照させると、はじめて、各が生彩をはなつてきます。この場合、眞の前の枝につゞくところの體の花は、一寸内方に見えるやうに挿す方が、工合のよいものです。これは大きい木の下にある小菊の姿を現はすためで、少しのめり加減に、大木を避けるやうな風情を見せることも必要であります。葉はかなり切り透かせます。

(阿部梅子)

（三四）深山躑躅

〔花器〕不老門、花臺は黒檀平卓。

幹の太い深山躑躅を生け上げたものであります。この花の見どころは、幹が形よく彎曲して、それを上手に働かせたところ、體をうまくあしらつたところであります。また體の上を被ふやうに見える枝を、取り枯らさぬところも、作者の苦心の存するところであります。

躑躅は、春になると根元から多くの根を出して、低く横ひろがりに成育するものでありますから、その風情を見せて、枝數も多くし、花形も行の形に生け上げるのが自然であります。葉蘭や桃などには、根のしまりを、水際から凡そ二三寸の間に、丁度一本のやうに見立て、挿しますが、躑躅一種生けの場合には、もつと低くから別れるやうに挿します。然し根元はかたくしめて、一本に見えるやうに入れることは申すまでもありませぬ。

躑躅はむしろ、もつと華やかに挿した方が、本當の感じが出るものでありますが、かうした挿し方もまた、別な面白味が見られます。

非常に水揚のよいものですから、一旦萎れたものでも、全部を水中に浸しておくと、すぐに元氣を恢復します。

（渡邊敏子）

(三五) 山空木・小菊

〔花器〕壺型薄端、花臺は紫檀平卓。

これは深山にできた瘠せた空木に、小菊をあしらつて生け上げたのでありますが、その細い幹と少い葉とを、たくみに使ひこなしたところが見ものであります。

空木は灌木で高さ六七尺、幹は中空で非常に堅く、從つて生花の材料としては、撓めの悪い缺點があります。しかしその瘠せた細いものになると、よし撓め得られないにしても、左程にあつかひ悪いものではなく、夏の初め五六寸の穂を出して、五瓣の小花を開いた姿は、なか〳〵風情のあるものであります。かの卯の花と呼んで賞美するものは、即ちこの空木であります。

しかしこの寫眞は、夏の空木ではありませぬ。これは秋に入つて、すつかり紅葉した山空木を挿したのであります。從つて花もついてゐないので、小菊を借り、體としましたが、この花の見どころは、この細い幹と、その落残つたところの葉を、巧みに配置したところにあります。

この場合注意せねばならぬことは、かうしたところの根締は、比較的小さめに作ることで、さうしないと眞や副との釣合が、全くとりにくゝなるものであります。

(長常子)

(三六) 八朔梅

〔花器〕薄端、花臺は黒檀平卓。

八朔梅は、その枝振りも花も、普通の梅と大差はありませんが、花の着き方が少いために、若葉の殘つてゐるものを、よく生して挿すことが肝要であります。

あくまでも氣品高く、凛とした姿に生け上ぐべきことを忘れてはなりませぬ。

たゞ八朔梅ばかりでなく、どの種類の梅であつても、枝數を多く使ふときは、工合のよい花が出來にくいものであります。そこで左の寫眞を御覧くださいませ。これは眞も副も、只一本でこしらへ、眞前に別に一本の花のあるものをあしらつて、大體の形をつくりそれに體をつけたものです。

體も成るべくならば、枝數を少くしたいのでありますが、若しこゝに葉をつけなければ、八朔梅の風情を見せることが出來ないことになります。

即ち八朔梅には、花あり、葉あり、そして充分に梅の風骨があつて、それが八朔梅の價値のあるところでありますから、この作者は、よくこゝに注意して、この花を挿したことでありませう。こゝが、この花の、眞の見どころと申すべきです。

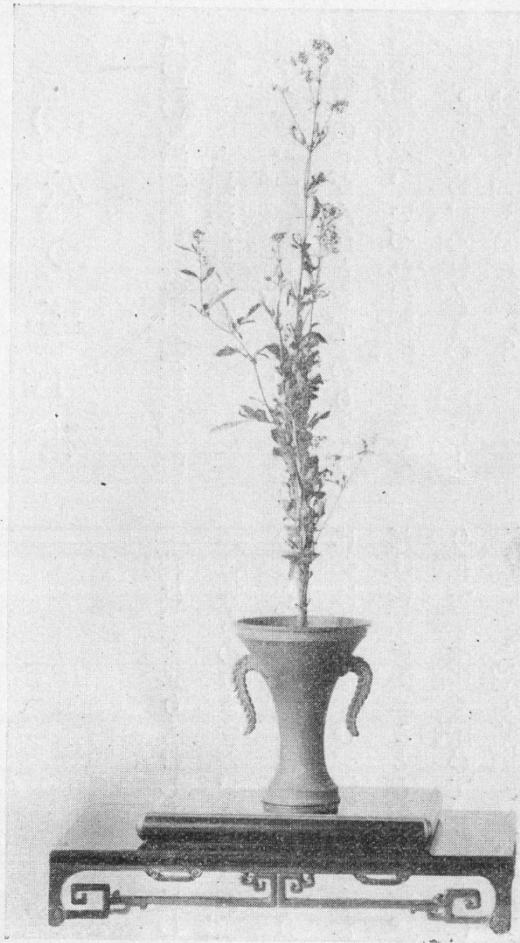
(笠尾ため子)

(三七) 女郎花

〔花器〕紫雲、花臺は唐木平卓。

女郎花は、その花梗が相對して出るために、これを工合よく切り合ふことのないやうに、生けるところに苦心のあるものです。從つてその葉を、よく活して使ふところに、なか／＼技巧を要します。

女郎花は二年生の植物で、今年生えた葉の莖には花を抽かないのです。花を抽くべき葉も無論花より先きに葉を出すのであるが、この葉は花を抽かぬ葉よりも貧弱なものです。そして花を抽く葉は葉を地上に出すとゝもに、既に花梗を芽ぐんでゐて、若い花梗を守りつゝ、葉はだん／＼と上つて行くのであります。こんな風でありますからこの花を挿すのに、花を抽かぬ葉を前に使つて、その後から花梗を挿すがよいなどゝいふものがありますが、或は挿方は花形を整へるに都合がよいかも知れませんが、池坊では、かくすべしといふことにはなつてをりませぬ。この寫眞もこの葉を使つて挿したものではありませぬ。つまり小さい花梗で體を作つて全體の姿をとゝのへたのであります。女郎花はまた苅萱などをふりかけて生けてもよく、或は桔梗を根締にして生上げても秋の氣分が出ます。

(高橋藥子)

(三) 秋の燕子花

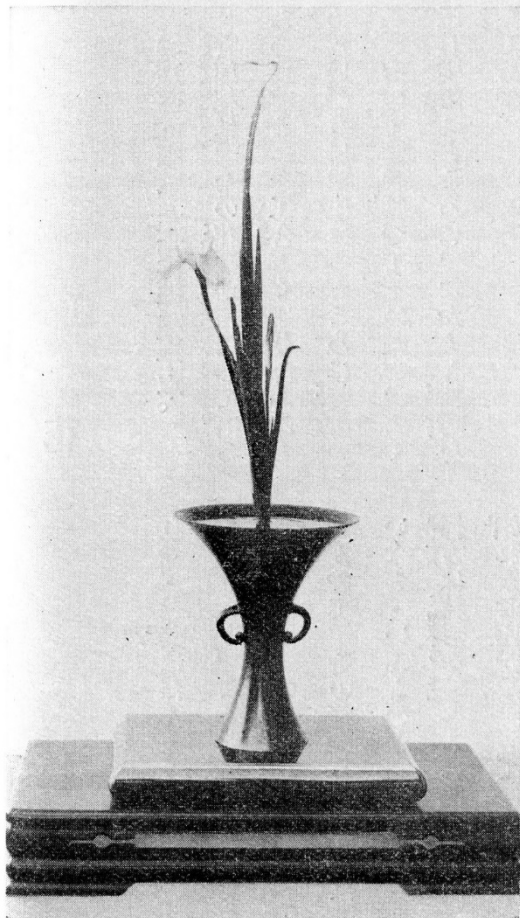
〔花器〕紫銅雨龍耳附、花臺は薄盤と黒塗華盤。

燕子花は、晩春から初夏にかけて、最も勢のさかんなときでありますが、春夏秋冬、いづれの季節にも花をもつてゐるため、それ〴〵の季節によつて、違つた形に生けます。

挿し方にも、その時により多少の相違がありますが、燕子花は、花を賞美すると同時に、葉も見事なものでありますから、花と葉との調和に苦心を要します。寫眞は、眞の葉に、先枯の葉を用ひたところで、體先の葉にも、よく秋の氣分を現はしてゐるものです。

花は、夏よりもむしろ高めにして使ふこともありますが、それは初秋の頃のことで、晩秋には、寫眞のやうに眞に葉ばかりを使ひ、體と副、または副だけに花を使ふこともあります。あまり花や葉を多く用ひて、華やかになりすぎては、秋の風情をあらはすことができませんから、なるべく寂しく生けるやう、注意を要します。

水揚のよいもので、特殊の方法を要しないほどですが、たゞ採取するにはなるべく水際に生じたものを選ぶことです。また、葉、花ともに、濕つた紙か筵にて卷いておきます。

(三好せん)

(三九) 猿猴杉・小菊

〔花器〕ずんど、花臺は紫檀平卓。

猿猴杉は、普通の杉の栽培變種で、その枝先は或は長く垂れて猿の手をのばしたのに似てゐるため、この名があるといはれてゐます。

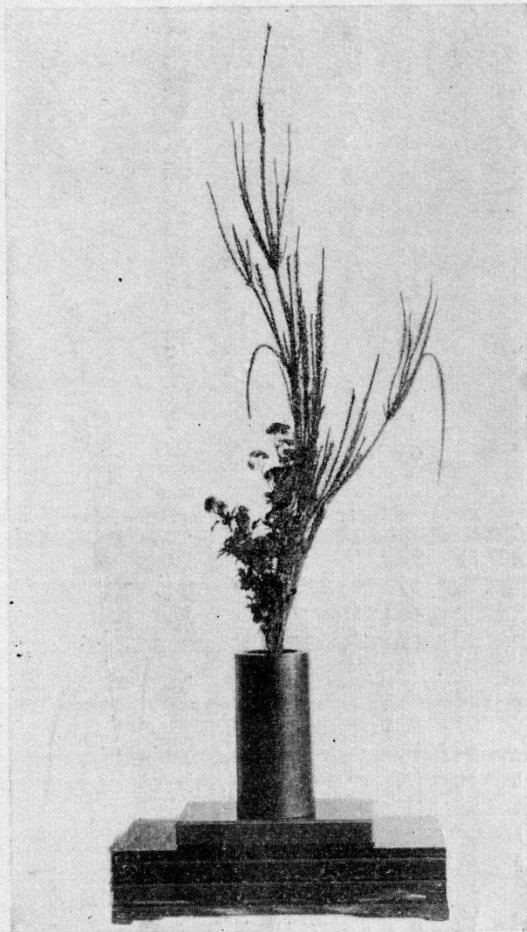
從つて生け上げるにも、一瓶中に何處かに一箇所、垂れた枝を使ふといふことが式になつてゐます。

杉は池坊家では、生花でも立華にでも使はぬことになつてゐますが、この猿猴杉ばかりは、使つても差支へのないことになつてゐます。

ところで他の杉は、使用しても差支へないとしても、使はれさうな種類はないものですが、この猿猴杉ばかいは、その枝が長く紐の如く垂れ、また垂れない枝までが、丸く小葉で包んで立ち昇つたところまで、何となく面白味があり、觀賞に値するものがあるために、これのみ使ふことになつてゐるのであります。その枝が一ヶ所に集つて出るのもまた、面白いところで、こゝをうまくあしらふのが、この花の挿どころの急所です。

猿猴杉は、あまり數多く生けると、その枝先が重つて煩はしく見えるものです。撓めのきくものですから、割に形は取りよいものです。

(山崎千代子)

（四〇）菊

〔花器〕玄猪、花臺は巻臺。

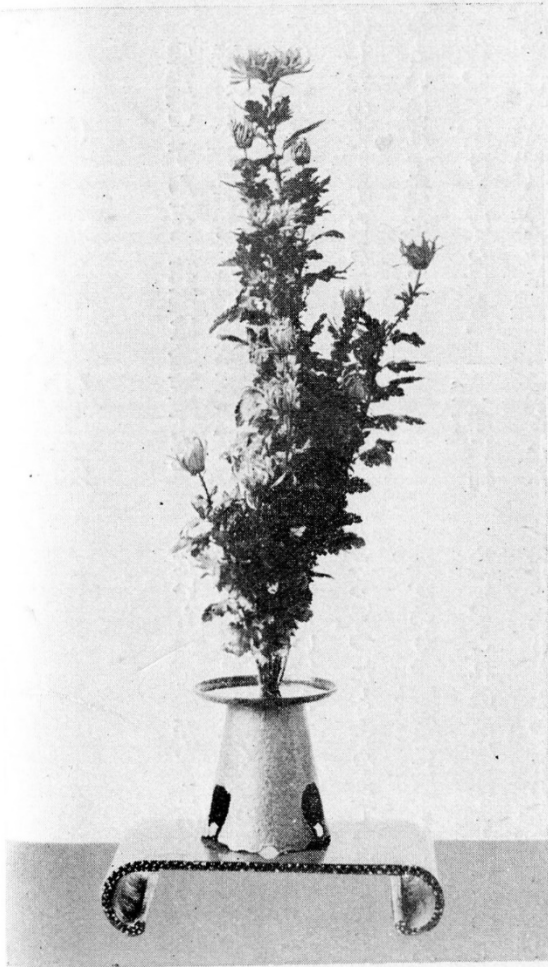
秋の挿花として、第一に數へられるものは、この菊であります。それだけに誰にも手にされながら、なか〳〵うまく生け上げるのは、むづかしいものであります。

まづ注意しなければならないのは、花の配置と葉の釣合であります。葉は多過ぎるやうに思つて、よく切り透かしますが、これは充分考慮して、生け上げてから淋しすぎるやうなことのないやうにしなければなりませぬ。

何輪挿すとしても、眞の前後の輪數を同じに使ふのが、安全な使ひ方です。眞の前に使ふものが主に開花で、後が蕾のときには、力の釣合上、蕾を使つた方の輪數を多くすることも考ふべきであります。

秋の菊は、眞先には主として開花を用ひますが、夏の菊には、眞先に蕾または半開を使ひ、それよりひくいところに開花を用ひます。この使ひ方は、季節々々の自然の生育を、そのまゝにうつしたまでゞ、どちらでなければならぬといふのではありませぬ。

水揚には葉や花を損めぬやうに、根元を焼き、逆水を注ぐのが、一番簡單で、效果ある方法であります。

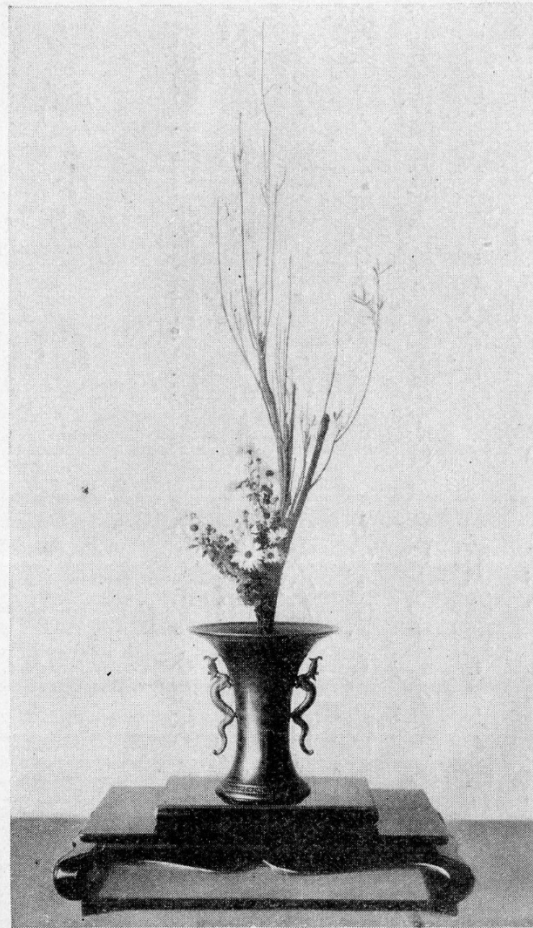
（池谷貞子）

(四) 柳・小菊

〔花器〕耳附ずんど、花臺唐木平卓。

柳は撓め易く、どうにでもなりますが、心のまゝに撓め作つてしまひますと、ほんたうの自然の姿を失つてしまふものであります。故に、なるべく撓めないやうに、よく枝振りを選んで挿したいものであります。

この寫眞の材料は、柳行李を作る謂ゆる行李柳を用ひ、これを挿したのでありますが、太い幹から出たところを適當に切つて挿したので、如何にも自然の風趣を味ふことが出來るのです。殊にまた、秋があまり深くない內、その葉の殘りをるところを挿したので、なほ一層の味があるのです。一體行李柳は一本立ちになつてゐるものを數多く挿すことが例になつてをるのではありますが、かうした挿口はまた別に面白味があるものです。尤も行李柳ばかりでなく、俗にいふ猫柳とか紀州柳とかいふものも、一本立ちのものを生けることが例にはなつてゐますが、これにも小太い幹をあしらふことは面白いものであります。序に申上げますが、猫柳などは、寒中は芽の皮をむきませぬが、春にはこれを剝いで生けますと、綺麗な花が出來るものです。しかし花物の根締は、何にしても入用です。

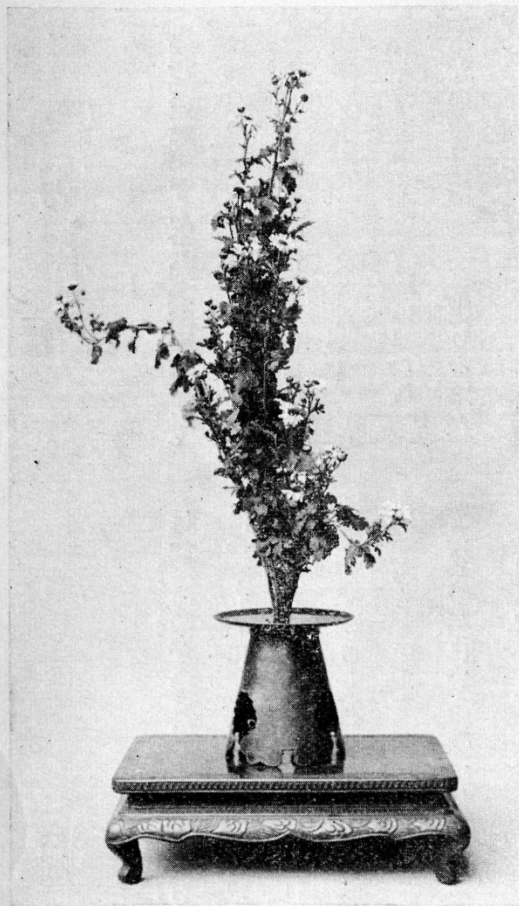
(四一) 柳・小菊

(伊藤春子)

（四二）小菊

〔花器〕玄猪、花臺は蝶貝の臺。

小菊は、菊とはいへ大輪のものとはその趣を全然異にして、一莖に數十輪をつけるものでありますから、花ばかりを目的とせず、枝と花つきの工合によつて、よく調和をとつて生けなければなりませぬ。花は、段々とならぬやうに、高下の配置には、特に意を用ひます。

花形は、行一點張りで、眞の花形には、どうしても生けられぬものであります。そして行の花形中でも、すらりとしたものよりは、むしろ横ひろがりの方が、ずつと引立つて見ゆるものであります。小菊は、普通の大輪物よりも、種類が非常に多く、花の大小、葉の大小など、各自に特異の趣があるものですから、葉に風情あるものは、葉によつて形を整へることゝします。

莖が軟弱で、よく垂れるものもありますが、これは掛花生か、二重切の上の重に、草の花形を以て生けるとよいものであります。但しこの場合でも、あまりに撓めすぎるのは、好ましくありません。要するに、その振りによつて生け方を變るといふのが、一番よろしいのであります。

（兒島文茂）

(四三) 苅萱・桔梗

〔花器〕玄猪、花臺は紫檀の平卓。

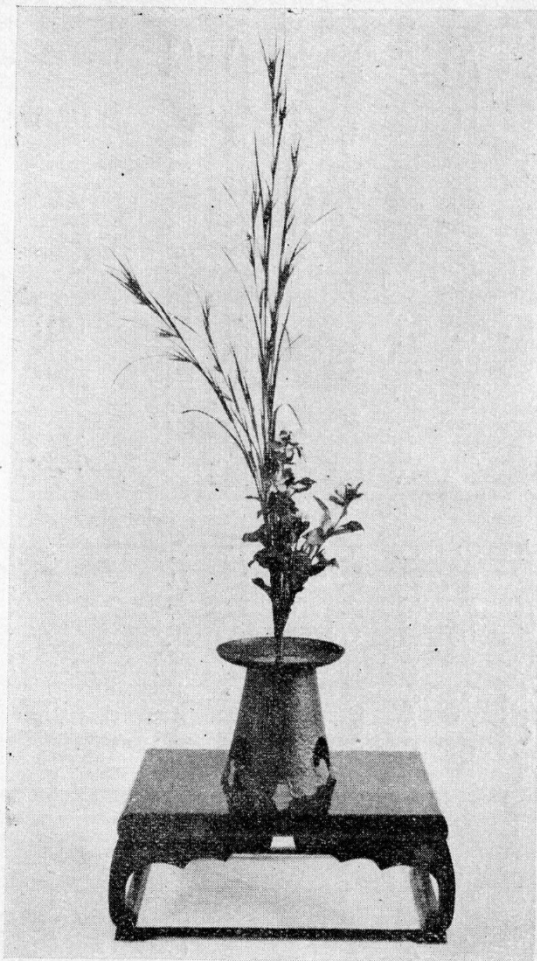
秋の花であるだけに、何處までも、寂しく、あつさりと、しかも圓熟した姿を見せなければなりませぬ。ほんとに秋寂びた風情は、菊などには、到底見られぬものであります。

桔梗は、苅萱と同じく、秋の野山をいろどる七草の一つで、二重桔梗、岩桔梗等の種類がありますが、花をつけるのは、すべて九月頃であります。しかしこゝでは、少しおくれ氣味の、實が重くなつた頃のものを用ひました。秋の氣分を出す上には、この方が都合がよいのであります。

苅萱は水揚がなか〳〵困難で、葉を巻き込んでしまふ性質がありますが、切口を消炭で燒くか、酒精に浸すのが一番簡單な方法であります。水揚法を行つた場合でも、全部に食鹽水を注ぎかけることを忘れてはなりませぬ。

桔梗の水揚には種々な方法がありますが、手輕なのは、根元を白汁の出るまで打碎きます。また酒精にちよつと根元を浸してもよく、一旦打碎いたものに、食鹽を擦り込んでもよく水揚し、藥の用意のないときは、根元を燒いても、また煮ても結構です。もと〳〵野生のものですから極めて容易です。

（近藤いち子）

(四四) 八朔梅

〔花器〕古青銅、花臺は黑塗の臺。

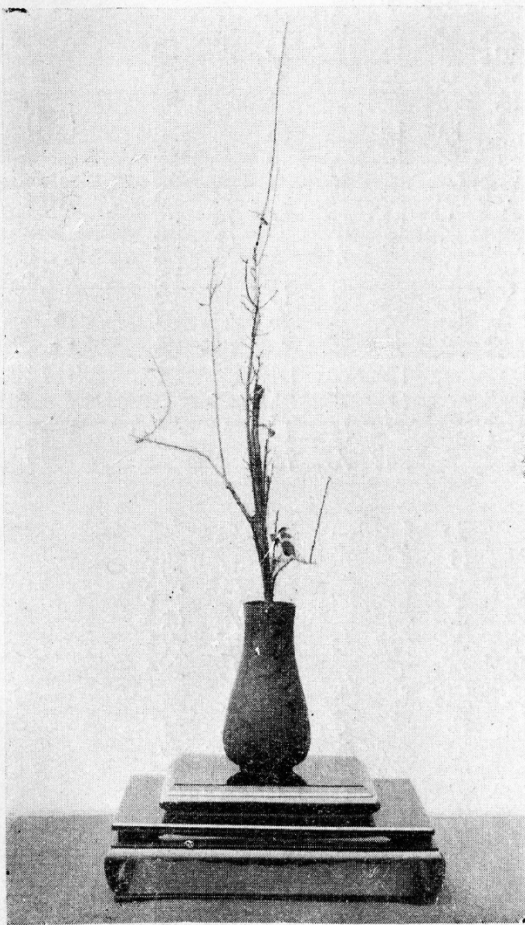
八朔梅は、枝幹が普通の梅と殆ど同じやうでありますが、秋、まだ葉の落ちないうちに花をひらきます。まだ葉のあるうちに、うまくそれを働かせて、よく梅に似た風趣を見せたのがこの花の見どころであります。

すべて八朔梅は花のつきのよくないものでありますから、工合のよいところを見立て、挿すことが、殊に肝要であります。さりとて、花ばかりで葉のないときには、八朔梅といふ氣分の出ぬものでありますから、適宜に葉を殘すか、或は葉のある枝を借りて來て、これを工合よく配置することにしなければならないのであります。

八朔梅にも相應に太い木などもないではありませぬが、前にいつたやうに、これは、まことに花つきのよくないものでありますから、花形を大きくすると、勢ひ花が少くて、間のぬけた花が出來勝なものでありますし、且つ、葉を多く使ふとしますと、梅の風致をうまく表はすことが出來にくいのであります。先づあまり大きくなく、且つ引きしまつた花形をとることになつてゐるのであります。

(嵯峨八重子)

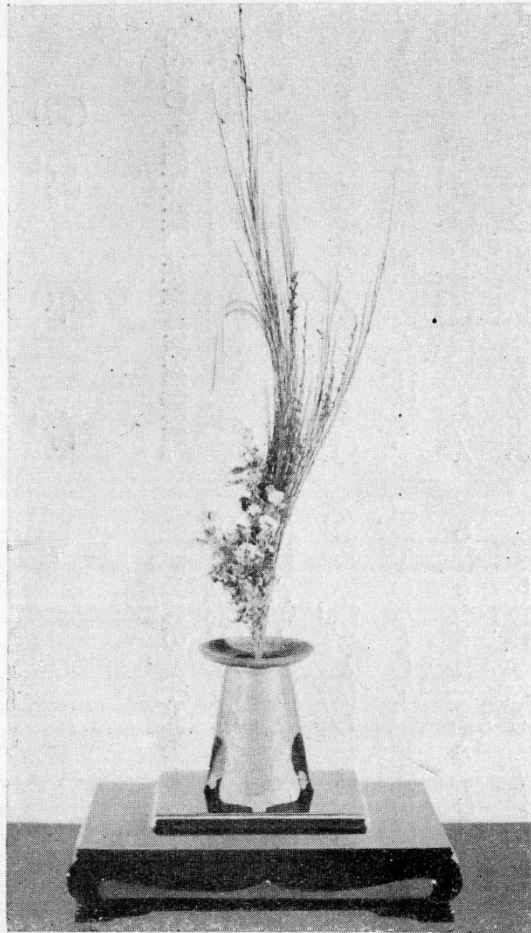
(四五) 金雀兒・小菊

〔花器〕玄猪、花臺は黑塗の臺。

綠色の細いしなやかな枝を澤山出して、晩春の頃、葉腋に蝶のやうな黃金色の花をつけるときが、金雀兒を最も多く挿花に用ひる時季でありますが、十一月頃、卽ち小春日向のときにも、また捨てがたい風情のあるものです。

これは、その秋の金雀兒の、さびしくも淸らかな姿をうつしたもので、花時ならば、別に他の花を借りる必要はありませぬが、花のない季節なので小菊を體として、美しくあしらつたのであります。

秋は比較的枝が堅くなつてゐますから、理窟の上からいへば、垂れ枝などはなくてもよいやうなものではありますが、金雀兒の性をあらはすために、この時季にも、この垂れ枝をつくることになつてゐます。ところで、秋の垂れ枝には葉をもつた若枝か、或は枝下になつて、勢のよくないやうな枝を垂らします。若枝を垂らす場合には、その重みに堪へられぬやうな風情を見せるやうにし、枝下の枝であつたならば、起き上る氣力のないやうな工合を見せるやうにするのです。

根締の小菊は、なるべく引き締つた形に挿します。

(細田碧苔)

（四六）萬年青

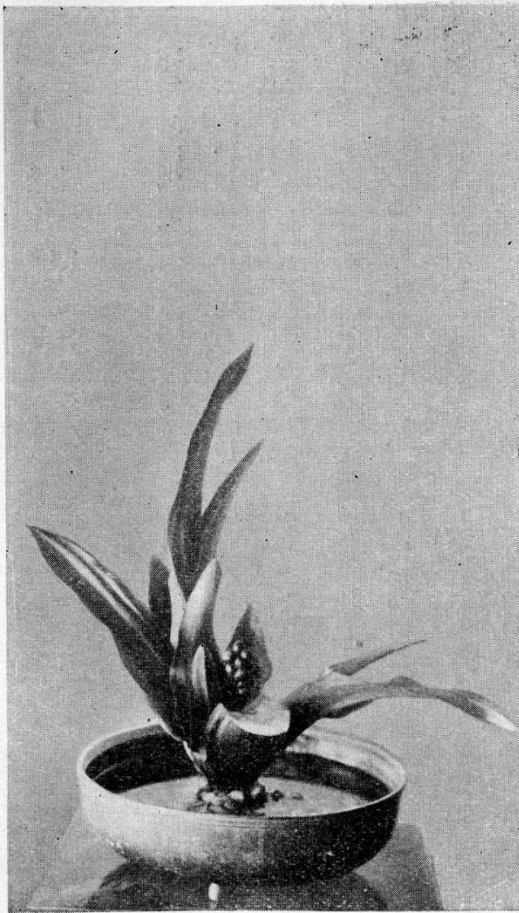
〔花器〕丸型水盤、花臺は黒塗薄板。

萬年青は、池坊家の許物の一つであつて、葉數は偶數で、實は一本に限ることゝなつてゐます。花形も、普通のものゝやうに眞、副、體と呼ばず、立葉(眞)、露受(副)、前葉(體)と呼んで、別に流し葉を一枚、加へるのであります。

その文字が示すやうに、萬年青は、いつまでも變りなく、永く青々してゐますのと、實を澤山結ぶために、祝物に使ふ目出度いものといはれ、なるべく實を圍んだ、圓滿な形に生けることになつてゐます。

卽ち眞の葉（立葉）と副の葉（露受）が、現在盛んになつてゐる主葉でありますから、これを主人と妻にたとへ、前葉（體）と流し葉は、前代の主人と妻であるとして、家運の隆盛を表徴する花とせられてゐるわけであります。

特に注意すべきことは、立葉を流し葉よりも幾分長目にして、前代よりも當主の方が、立勝つてゐるといふ意を現はすことです。これが反對になると不吉な意味にとられて、折角の目出度い花が、臺なしになつてしまひます。他の葉は、大體葉蘭と同じやうに、長短を組合せて差支へありませぬ。

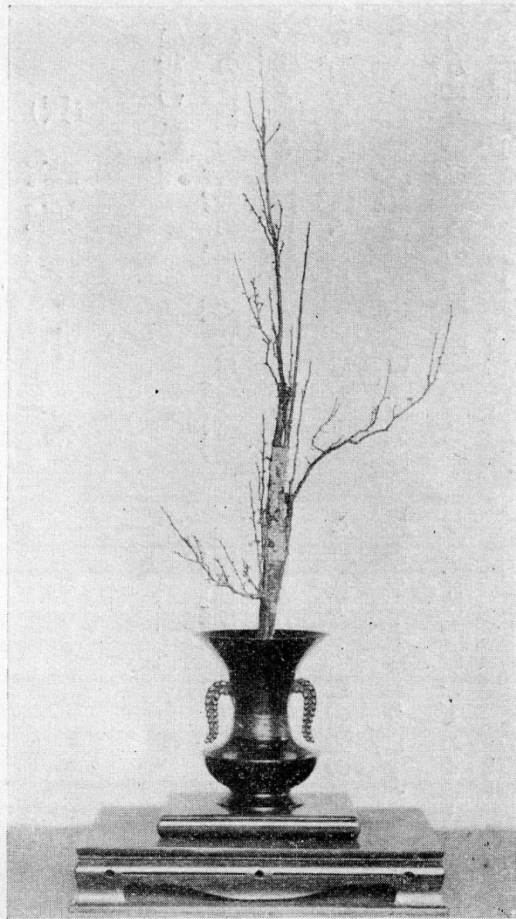
（兒島文茂）

(四七) 早梅

〔花器〕古銅耳附ずんど、花臺は朱縁黒塗臺と、紫檀平卓。

梅は早春花をつけるものでありますが、春を待たずに花を開くものも少くありません。この早梅を挿すには、すべて引きしまつた木振りを見せなければなりませんが、特にその點に注意を拂ひ、上手に生け上げられたのがこの寫眞であります。

梅は兎に角風雪を冒して花をつけるのでありますから、時のいづれにかゝはらず、凛乎としたところの風情を見せなければなりませぬ。年を經た梅は、挿しにくいやうなところはあつても、その枝振りが自然に梅らしくて、謂ゆる鐵骨槎枒たるところがありますから、それを調子よく配合さへすれば梅らしい梅が出來るものであります。しかし若枝になると、その趣が少いので、腕と鋏とにより、その不屈不撓の樣を表はすやうにしなければなりませぬ。こゝが挿手の技巧を要するところであります。

この寫眞も、眞の幹が比較的若かつたゝめに、餘程そこに苦心したやうでありますが、その前に苔つきの老幹を借り、且つ陽方に二本の若枝を使つて、梅らしい風姿をとつたのであります。

(宇佐美宗乙)

（四八）蔓梅擬・小菊

〔花器〕吊船。

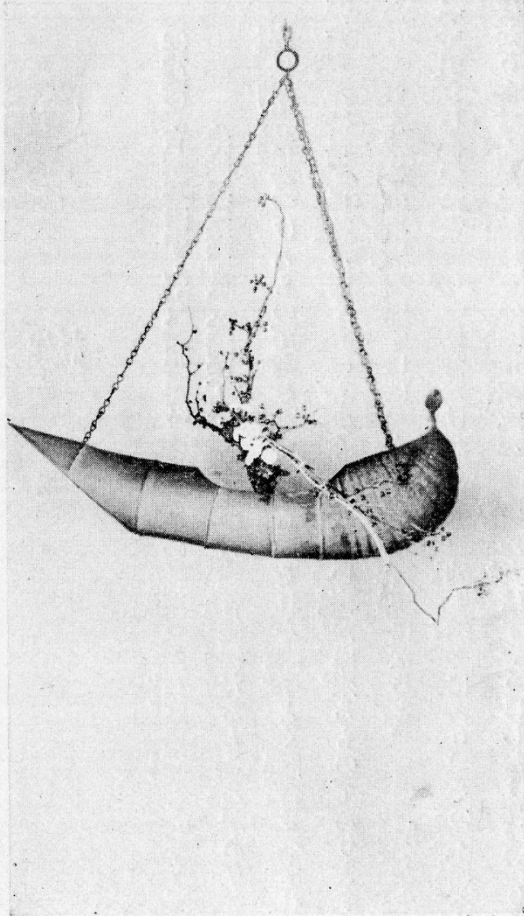
船の花は、普通の花の形とは少々異り、體と眞との間に艫形といつて、船から垂れる枝を使ふのが式になつてゐます。そして寫眞のやうにその艫形が右の方に向いてゐるのを出船といひ、その反對を向いてゐるのを入船と呼ぶのであります。

蔓梅擬は、五六月頃に小さな花をつけますが、秋、落葉してから紅色の綺麗な實が殘つて、生花には、この方が雅趣に富んで喜ばれるのであります。寫眞はその秋の木に、白菊を配したもので、その端麗な姿は、まことに賞すべきものがあります。

蔓梅擬は實物であるために、その根締として他の花物を借りるのですが、この花で蔓梅擬の體の枝を切るやうに見えることがありますから、よく注意して、枝をついでおくやうにしなければなりませぬ。この寫眞の、根締の花の上に、一つの蔓梅擬の根を使つたのが見えるのが、卽ち、そのために挿した枝であります。

吊船は、お床の三分の一寄りのところに吊ります。多く蔓物や、垂れ物等が生けられます。

（森田君代）

（四九） 茶

〔花器〕 蓬萊、花臺は朱緣黑塗の臺。

老木となつて、苔のついた茶の樹を挿したのでありますが、眞先を賑やかに見せて、副と體とを張つて釣合をとつたところ、まことに老巧の生け方と申すべきであります。

茶は老木でなくとも、丈を比較的低くして横廣がりに挿さないと、茶といふ氣分の出ないものです。それにまた茶を挿すときには水際を低くして、體の先なども葉の茂つたものを使ふやうにしたいものです。さりとて全瓶中、その幹を見ないといふこともまた力のないやうに見えて、工合のよくないものですから、どこか一二箇所に、その幹を見せるやうなところを作りたいものです。幹を見せるばかりでなく、葉の茂つてゐる中から、若葉の高く抽き出すことなども面白いものであります。しかし、この幹が多過ぎるとか、或はそれが主要の部分を占めるとかいふことになると、また茶らしい風情を失つて、山茶花のやうに見ゆることになりますから、その邊のところに注意を拂はなければ、茶らしい茶が出來ないものです。枝の配置、適宜に切り透かせた葉の工合など、寫眞に就いてよく御覽ください。

（宮坂勝造）

〔花器〕玄猪、朱縁黒塗の臺。

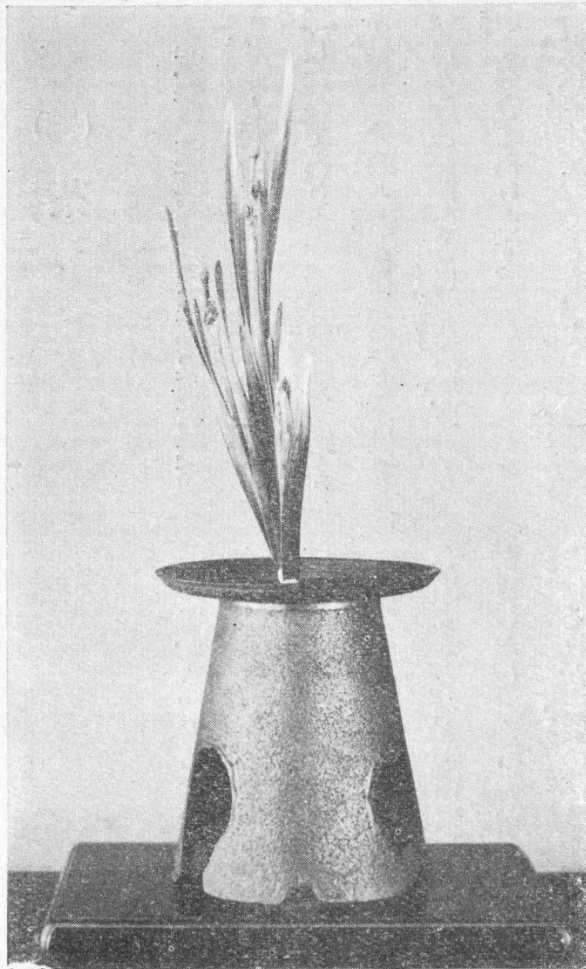
水仙は、既に仙といはれるだけに、その氣品の高いところが、見せどころであります。その心を忘れては、とても滿足に生けられぬものです。數も二本か三本として、楚々とした姿を、そのまゝうつすやう、努めなければなりませぬ。

水仙の一本といふのは、一莖の花と四枚の葉とであつて根元に白い袋（袴といふ）がついてゐます。そのまゝ生けられないときには、袴を破らずに、うまくはきかへをして、葉の長短をつけることができます。

三本生ける場合は、一番前に體の一本、その次に副の一本、最後に眞の一本を挿します。水仙はたとひ一本でも後を高く、前を低くといふ挿し方ですから、この場合も、後に行くほど高くなるやうに心掛けて生け上げます。

三本生けは、花の盛を意味するものですから、二本生け（五二圖）よりも幾分かくつろいで、横ひろがりに生けて差支ありません。またこの本勝手が普通の生け方で、逆勝手はむづかしいものですから、充分本勝手を會得してから行ふべきものとされてゐます。

〔五二圖參照〕

（細田ゑい子）

（五）椿

〔花器〕中央卓。

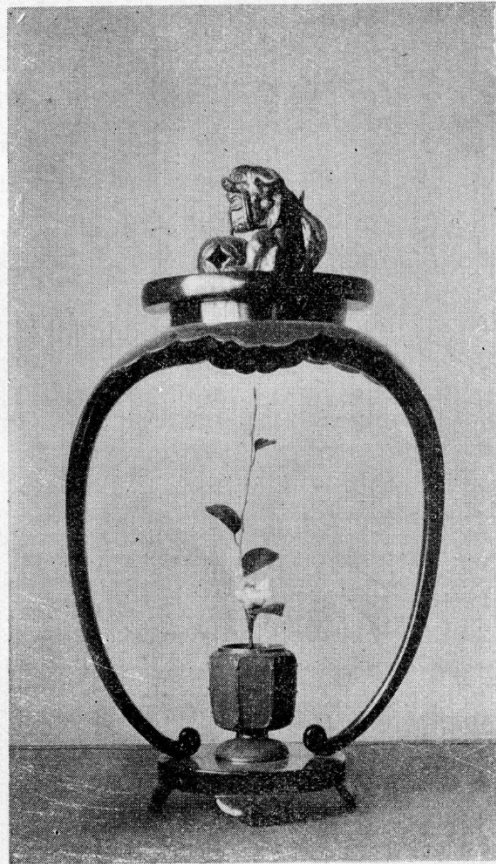
一輪椿は、特に一輪を以て生けるといふ、花式の定まつてをるものであつて、池坊家の許物の一つとなつてゐます。

まづ花を、普通の花形から言へば、體の上部の眞につゞくところにおき、體先や副は葉でとることにします。花の上には、花を掩ふやうな葉を使ひ、眞の先にはまだ發育の充分でない、一枚の葉と見るに足らない葉を使ひます。つまり葉を四枚とも偶數にせず、不完全な葉を一枚入れて三枚半とし、花を入れて五といふ奇數に纒めるのであります。

花の數が葉よりも少くて力ないために、花の丈を小く短く生けなければならないので、よく卓下などを飾るのに用ひられます。或ひは小さな床の向掛として挿すこともあります。

椿だけでなく、他の珍重すべき花であれば、却つて一輪だけを生けて賞玩するのも、面白いものでありますが、生け方はすべて椿の例に從つて差支ありません。花の外に、小さな蕾などのある場合には、それを添へ、適宜に活して使つても、差支ありませぬ。

（伊藤稲子）

（五一）椿

（五二）水　仙

〔花器〕紫雲、耳つきずんど。

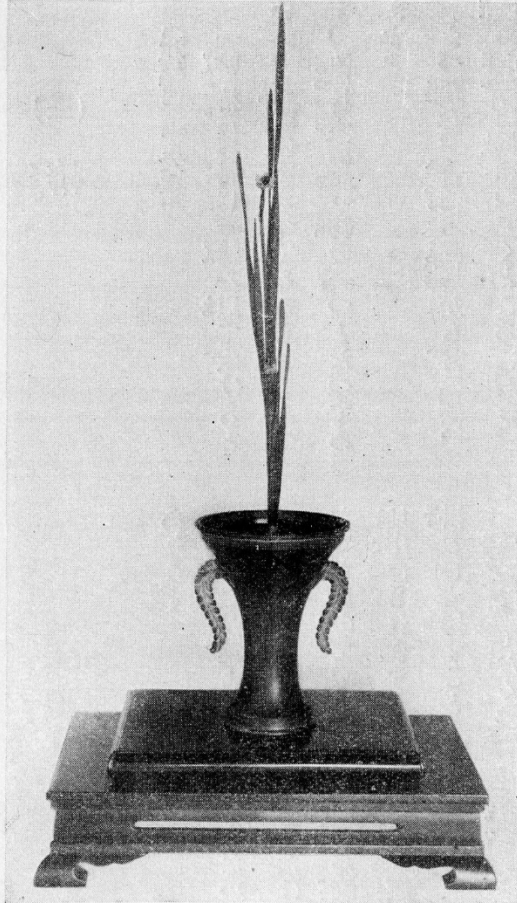
水仙は、氣品を高く生け上ぐべきものであることは、（五〇圖）で述べた通りであつて、この寫眞のやうに二本を以て形をつくる場合には、大いに苦心を要するのであります。

まづ袴のはきかへをしなければなりませんが、一本の方は、花の體になるやうに作り、もう一本は、四枚組の葉のうち、後の二枚が眞となり、前の二枚が副となるやうに、組合せるのであります。そして、體となる一本から生けはじめます。

四枚の葉を組むときは、どちらも後の二枚を高く前の二枚が低いやうに、またその二枚についていへば、內側が低く、外側が高いやうにします。そして花は、どちらの株も葉より低く組まなければなりませぬ。

季節によつて多少生け方について心得べきことは、冬のうちは眞の花形でも、特に曲りすくなく寫眞のやうに挿し、花の出初めには二本挿し、出盛つてから三本挿しにすることです。

水仙を梅の根締などに使ふこともありますが、お正月前は、その氣品を尊重して、さういふ場合に使はないことになつてゐます。〔五〇圖參照〕

（池　坊　專　啓）

古流の生け方寫眞集

(五三) 宮島松

〔花器〕古代耳附の瓶子型、花臺は黒金緣の巻臺。

この松は主として、新年または祝儀の場合等に生けます。ですから生け上げた姿が、優雅で、しかもすつきりとした、神々しい感じを、見る人に與へるものでなければなりませぬ。祝ひの場合には、特に根元に、紅白二本の水引をかけて、更に威儀を正すこともあります。

生け方は、右本手の型であります。

原則として、粘り氣のある木は、充分撓めてもよいものでありますが、松は特に折れ易い性質をもつてゐますから、なるべくならば、枝を撓めぬに越したことはありませぬ。そして、枝振りのものを選んで生けるやうにすれば最も安心です。

またこの松は、笹などをあしらふよりも、一種だけを生ける方が品もよく、また、却つてその方が、如何にもお目出度い花といふ感じを與へます。松は一般にさうですが、殊に宮島松は古來お正月などには、申分ない、生花の一つとされてゐるものであります。

宮島松は、宮島五葉ともいはれ、嚴寒の地方、または高山などに多く產するものです。

(梶川理仙)

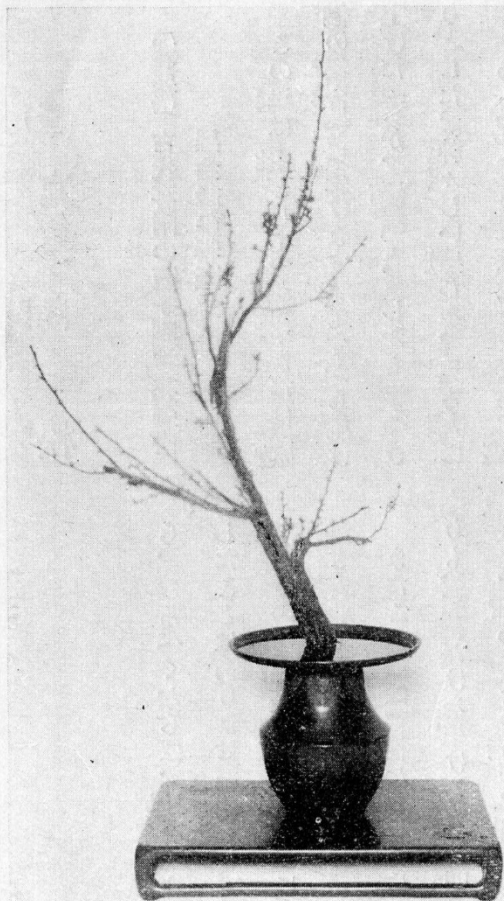
（五四）梅

〔花器〕薄端、花臺は唐木の平卓。

生け方は、右本手であります。生ける上の注意として最も大切なことは、梅本來の氣韻を失はぬことであります。梅の枝は、櫻や桃と違ひ、感じが鋭く荒く、あたかも鋭利な斧をもつて、一氣に切り下したやうな、颯爽たる趣があります。ですから、枝と枝との間隔を相當遠く作つて生けます。また、この梅に限り、枝が多少重なり合ふやうなことがあつても、差支へありませぬ。しかし、それかといつて、殊更に醜い枝のみを選んで生ける必要もありませぬ。本來の姿態を失はぬ程度で、と〻のうたものを選ばねばなりませぬ。

梅は、古來清節を守る隱士にたとへられ、また、清客雄姿、春告草などの異名をもつて稱ばれるやうに、その寒氣にめげぬ、凜然たる姿を愛される花であります。生ける場合の最も大切な注意も、この趣を失はぬところにあるのです。

蕾の枝の切口を大根に挿し込み、蕾に蜂蜜を塗つてこれを壷に入れ、床下に圍つておき、春が過ぎてからとり出して生ける方がありますが、生花の材料としては、感心せぬものです。

（酒井理雲）

（五五）櫻

〔花器〕薄端、花臺は唐木平卓。

生け方は、右本手であります。

櫻は薔薇科の落葉喬木で、非常に種類が多く、我國でも二百餘種を數へますが、一番多いのが染井吉野であります。四月初旬一齊に開花して、數日のうちに散りつくすことは、皆な人の知るところです。

櫻を生けるのに、第一に注意すべきことは、幹になるべく太いものを使つて、如何にも老木のやうに見せることで、幹が細いと、まことに引立たぬものです。生花には山櫻、染井吉野などが、一番多く用ひられます。

櫻にかぎり、幹に近く、下の方から咲き初めるものですから、生けるときもその出生に從つて、なるべく下に開花を使ひ、上に蕾を多く使ふやうにしなければなりませぬ。

小枝をあまり切り透かして、梅のやうに淋しく生けることは、何よりも禁物です。如何にも春らしく賑やかに、豐滿に、しかもその中に、何ともいへぬ雅味を持たせるのが理想であります。櫻を櫻らしく華やかに生け上げるには、相當の苦心を要するものでありますが、春の花としては、この花にまして優雅なのはありませぬ。

（河野理貞）

（五六）櫻

〔花器〕薄端、花臺は木瓜卷臺。

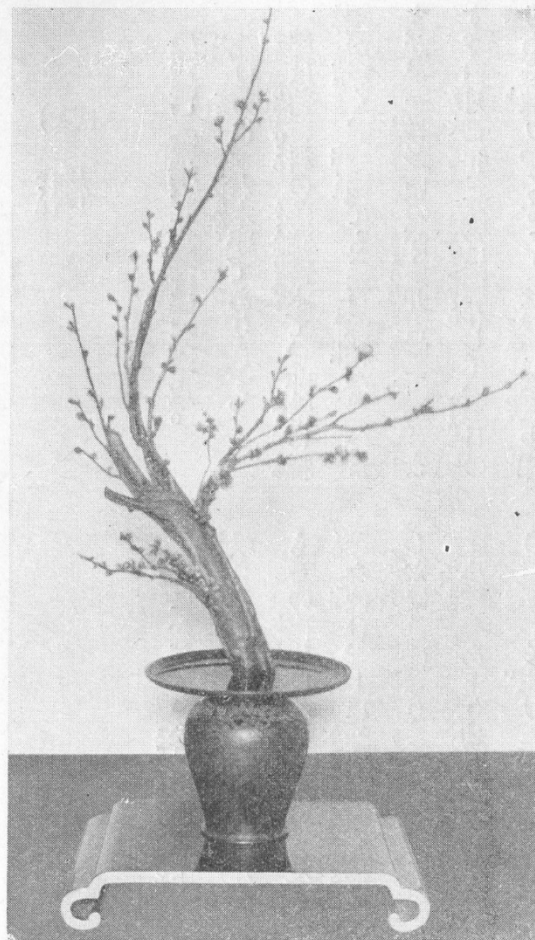
生け方は、右中流しです。

（五五）の說明のやうに、こゝでも珍しい老木を選んで、花がぽつ〳〵咲き初めた頃の、ふくよかな姿を、うつしとつたものであります。

小枝を省かずに、出來るだけ澤山につけたまゝ、賑やかに生けるため、枝が重なつたり、交錯したりしがちのものでありますが、注意してそれを避けるやうにしなければなりませぬ。

數多い種類の櫻の中で、特に花の美しいものは、山櫻、彼岸櫻、垂櫻、里櫻、染井吉野などであります。古來日本の國風を象徵する花として、その美しさと、その淡泊な性情とを賞でらるゝものは、染井吉野であつて、これは一名吉野櫻ともいひ、各地の公園や庭園に澤山植ゑられて、風趣を添へてゐるものであります。

吉野櫻は、葉に先立つて花を密生するのが特徵でありますが、山櫻の方は、葉と一緒に花をつけます。また彼岸櫻は、落葉灌木で、花は通常三箇づゝ一緒に生じ、滿開の頃から、新葉が芽ばえるのであります。生花としては、各〻の特性を殺さぬやうに、注意せねばなりませぬ。

（野田理登）

(五七) 山茱萸

〔花器〕ずんど、花臺は薄板。
生け方は、左本手です。

山茱萸はもと支那原産の落葉喬木で、葉は對生し、三月頃葉に先立つて、黄色の小花を生じますが、花の後に結ぶ赤い實は食べることができます。生花には開花のとき多く用ひられます。

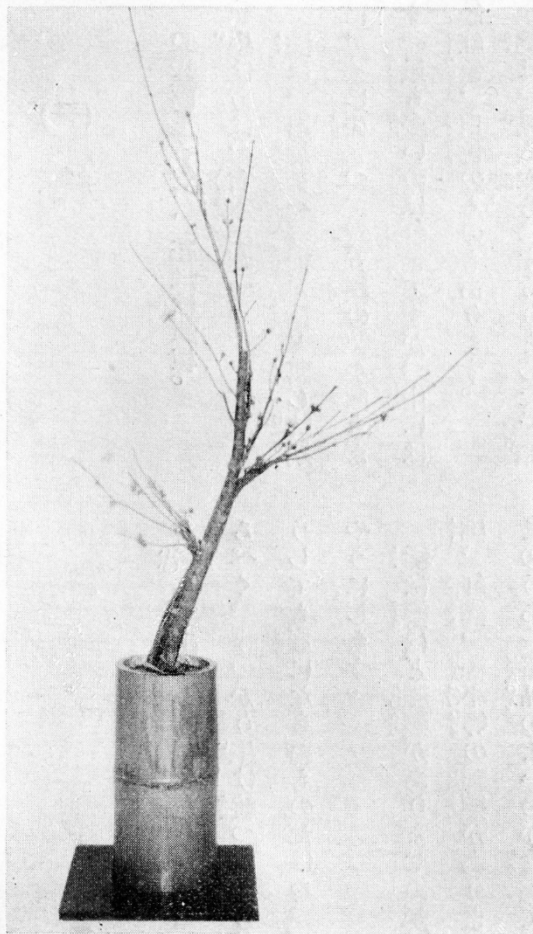
小い花を點々とつけた山茱萸は、その姿が、如何にも端麗なところから、古來茶人に好まるゝものであります。韻雅な趣は、詩興をそゝつて

山茱萸や雪まだ殘る裏の庭

など、いふ句もあるほどです。靜寂な茶室の花には、特に適してゐます。

生花としては、一番生けよい材料の一つです。しかし、非常に撓めやすく、形が自由になるかはりに、生け上つた姿が、淋しくなるやうなことがありますから、この點を特に注意しなければなりませぬ。一種生けでなく、葉蘭などを根締にすると、更に一段と趣と落着を加へます。

枝が對生する性質のもので、切り枝や、十文字ができ易いのですから、この場合には、枝を前後に撓め上げて、切り合ふことのないやうに注意します。花形は、淋しすぎる眞より、行の方がよろしいでせう。

(高橋理好)

（兲）桃

〔花器〕ずんど、花臺は薄板。

生け方は、右本手です。

桃は、四月初旬、櫻と殆ど同じ時期に、葉に先立つて、五瓣の花を開きます。最も多いのは紅色ですが、中には濃紅色、白色のものもあります。

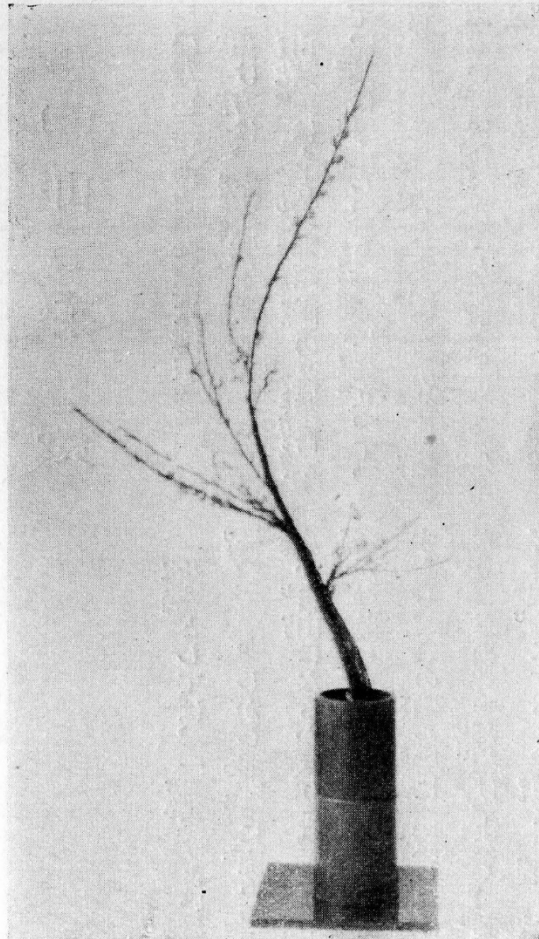
桃は、見るからにすらりとした、如何にもやさしい姿を持つてゐますが、枝にはひねくれたところが少くなく、花も、梢の方に少いところが多いものですから、注意して、枝振のよい材料を選ばねばなりませぬ。

また木瓜とよく見分けのつくやうに、あまり小枝を拂はずに、巧にそれを活して生け上げねばなりませぬ。なるべく、すつかり生け終つてから、どうしても形にならぬものだけを、切るやうにします。

桃は櫻ほど種類がありませぬが、白桃、紅桃、源平等の種類があります。このうち一番品のよいのが白桃で、生花の材料としても、最も多く用ひられます。源平桃といふのは、一輪のなかに紅白の交り合つたものですが、生花としては、綺麗ではありますが、あまり氣品のよいものではありませぬ。

水揚には、陽起石の粉を花器に投じ、水にとかし込んでおきます。

（橋本理峰）

（五九）松

〔花器〕薄端、花臺は金緣黑卷臺。

生け方は、右受流しです。

松はいづれも山地や海岸に自生する常綠喬木であります。赤松（めまつ）、黑松（をまつ）、海松（てうせんごえふ）、姬小松、這松などの種類がありますが、山野に一番多いのが赤松で、海岸に美觀を添へてゐるのは、主として黑松であります。

全體の姿を、宛然、鶴が來てとまるかとも思はれるほど、豪壯、雄大に生け上げて、松の勢を、如實に見せるのがよろしいのであります。

松はすべて神の花として、目出度いときに用ひられるものですが、これを生けるに當つては、松の習性にならつて、勢よく、またよどみなく生け上げることを、常に忘れてはなりませぬ。

松の枝には、非常に粘り氣があります。一體に、粘り氣のあるものは、撓めの自由にきくものですが、松に限り折れ易いため、撓めるときには、可なりの注意を要します。小枝は相當多いものですが、重なり合はぬやう、適當に切り透かします。

また若松には、千兩などを根元に配して、小松原を忍ばせ、自然の姿を見せるのも、面白いものであります。

（內田理艶）

(六〇) こでまり

〔花器〕ずんど、花臺は黒塗巻臺。

生け方は、左流し生です。

こでまりは、もと支那原産の落葉小灌木で、觀賞用としてよく庭園に培養されてゐます。澤山の細い幹を叢生し葉は鋸齒狀をなしてゐる長楕圓形で、初夏になると白色五瓣の可愛らしい花を、毬狀につけるところから、この名が出たのでありませう。

花は雪のやうに白く、まことにやさしい姿をしてゐますために、多く鉢植として愛玩せられ、五六月の花の咲く頃には、生花としても、その清麗な風情を、何より喜ばれてゐます。

非常に折れ易い性質のものですから注意を要します。無暗に枝先を切ることを、避けねばなりませぬ。花の重みにも堪へられない姿が、即ちこでまり本來の姿でありますから、枝先を切ると竿立ちになりがちであるばかりか、自然の風趣を、すつかり失つてしまふからであります。枝の細いために非常に生けにくいものですから、よく根を締めなければなりませぬ。

水揚には、根元を燒くのもよろしいが、一番簡單なのは、深い水にぞんぶり浸しておいて生け上げることで、これが一番長保ちもします。

(後藤理勝)

(六) 燕子花

〔花器〕鼓胴、花臺は地紙型平卓。

生け方は、燕子花の五株、三輪を用ひた右本手です。

燕子花は、池沼の邊、濕地などに自生して、夏、紫碧、白、赤、翠碧色などの花をつけますが、多く觀賞用として栽培せられるため、二百種もの變種ができてゐます。生花には、春夏秋冬それぐ\季節々々の風韻をもつてゐるために、よく用ひられるものです。

寫眞は春の花として生けたものであつて、眞の花の後にある葉は、冠葉と稱するもので、花の持葉をあらはしたものであります。これを別のものとして取扱つてはなりませぬ。殊にこの持葉は、二枚でありますから、花の軸に添はせて用ひます。自然の出生をうつすために、空株を用ひることを忘れてはなりませぬ。

水揚は非常によいもので、特殊の方法を講ずる必要はありませんが、なるべく水際に生じたものを用ひ、葉、花ともに濕つた紙か筵に卷いて、箱に入れて保存します。花は特に紙で卷き、生けてから、これをとるやうにします。

夏の燕子花は一番咲よりも、二番咲の方が長保ちがして、丈夫なものであります。

（田村理庫）

(六二) 花菖蒲

生け方は、五株三輪の左本手です。

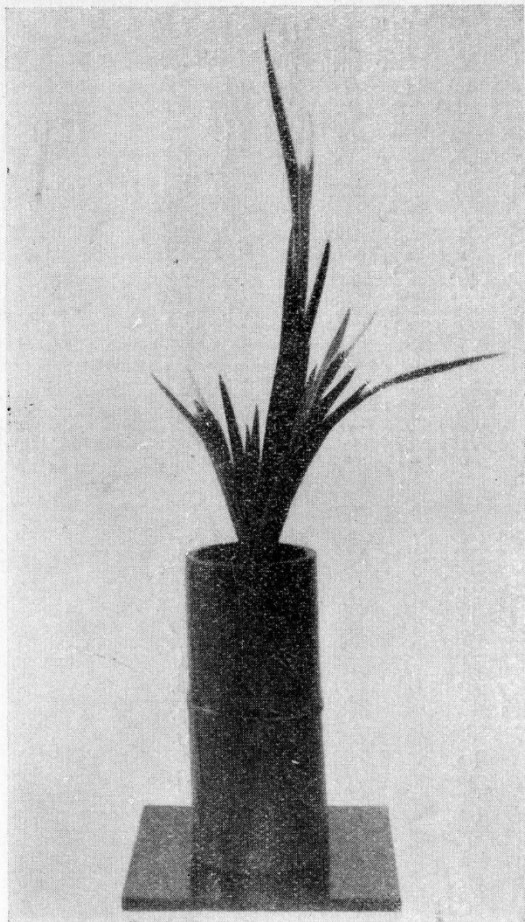
〔花器〕ずんど、花臺は薄板。

花菖蒲は燕子花と同じく、觀賞用として水邊濕地に栽培する多年生の草本であります。六月頃、葉間に三四尺の花莖を抽き、その頂に、普通三箇の花をひらきます。色は濃紫、淡紫、白斑などあり、下垂する大花瓣を三枚外側に、上向の小花瓣を中央に持つてゐるのが、特徴であります。

花菖蒲は、特に男々しく生け上ぐべきもので、燕子花が葉三枚を以て一株とするのに反し、これは四枚を以て一株としなければなりませぬ。

また眞の後にある葉は、燕子花のやうに花の持葉を現はしたものでなく、獨立した自然の形狀をうつしたものです。花を用ひる注意としては、高い葉莢の花を、株の一番高い葉と同じ向きに入れること、花と葉とは別箇のものですから、接着せしめぬやうにすることであります。

燕子花が、春夏秋冬、後から後から葉を出すのに反し、これは花の開くときを最盛期として、花が萎むと同時に、葉もまた成長を止めてだん〴〵枯れるものですから、葉の組み方も、中を高くすることになつてゐます。

（山本理幸）

（六三）花菖蒲

〔花器〕薄端、花臺は唐木平卓。

これは五株三輪の右本手に生けた、花菖蒲であります。

この葉組は非常に間違ひ易いものですから、詳しく申上げませう。まづ一株の葉を取つて、その表裏をよく見分け、表の方をみて一枚々々くづしながら、向つて左の方に劍先の向いてゐるものを右側に、右の方を向いてゐるのを左側に、若葉は膝前にと、それ〴〵全部の葉を揃へておきます。まづ右葉の四枚組を組むとすれば、右側の長葉を右手に持ち、左側の長葉を取つて、右手の葉の下に組み重ね、更に、右側の葉をその上に重ね、その上に、膝前においた若葉を組み重ねて、適當の長さとしたものであります。左葉は、このやうにして、左側にある葉から先に組んだものです。劍先は、それ〴〵長い葉に向き合ふやうに組みます。

まづ流しの葉を入れ、次に流しの花、受の葉、受の花、眞前の葉、眞の花、眞の葉、最後に留の葉を入れて寫眞の花が出來上ります。

菖蒲は、薄端でなく、水盤、馬盥、砂鉢等の廣口物に生けたもの、方が、その出生の様も思はれて、ずつと見事になるものであります。

（高橋理登女）

（六三）花菖蒲

（六四）葉蘭

〔花器〕ずんど、花臺は薄板。

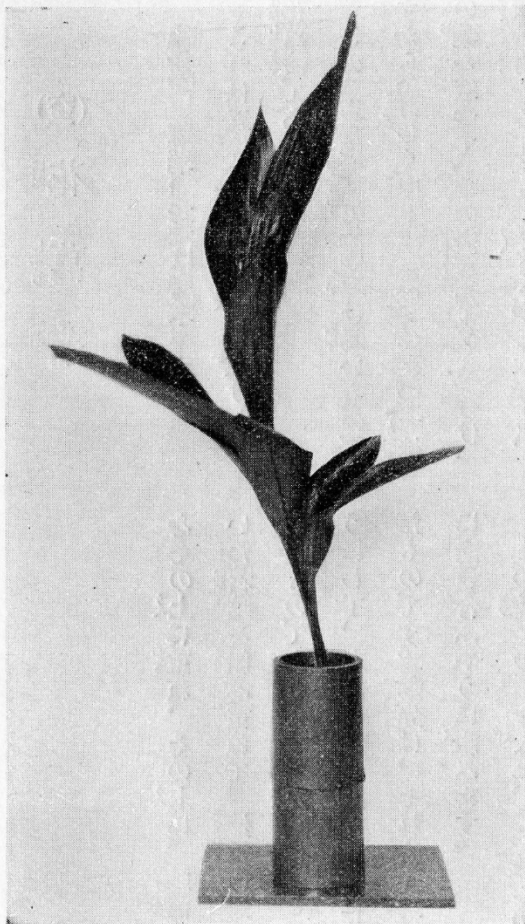
生け方は、九枚を用ひた右本手であります。

葉蘭は、初心の方が最初に稽古する花ではありますが、決して容易なものではありませぬ。この挿し方によつてほんたうの生花のこつを會得しなければなりませぬ。

生けるとき、特に注意すべきことは、足の細いものですから、しつかりと根締をして、眞の葉が廻らぬやうにします。また葉先を切つたり、卷いたりすることは、禁物であります。葉を切ることの、心ない仕打であると同様に、卷くことも、共に自然に反することであります。但し蟲喰葉と枯葉は、非常に醜いものですから、これは使はぬやうにいたします。

あくまですら〳〵とした姿に、清麗の風趣を持たせて、すつきりと生け上げます。これは特に初心者の意を注ぐべき點であります。

葉蘭は『ばらん』ともいひ、支那の原產種でありますが、今日は專ら庭園に培養されてゐます。四月頃根もとに近いところに、表面綠色、内面紫色の花をつけ、花の後は綠色をした球狀の實を結びます。

（池田理梅）

（六五）葉蘭・龍膽

〔花器〕水盤、花臺は唐木平卓。

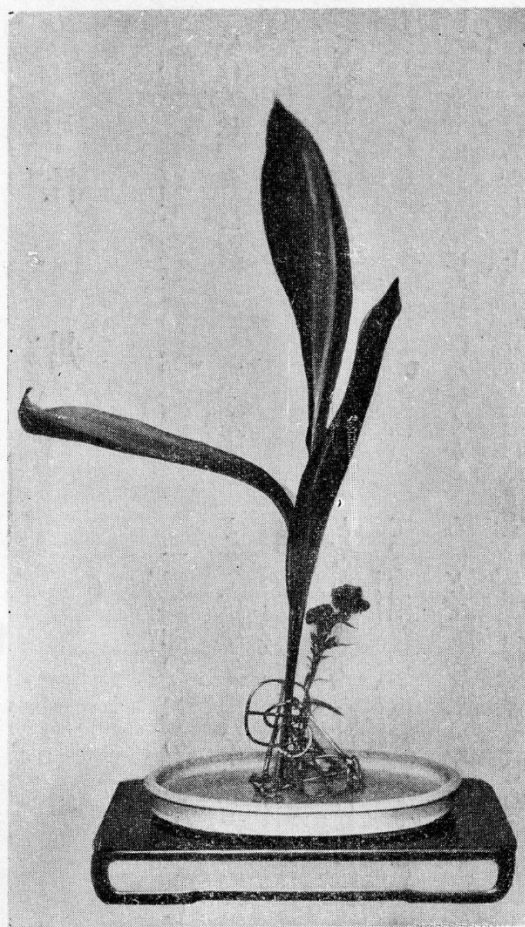
生け方は、葉蘭三枚と龍膽二本を用ひた、左中流しであります。

葉蘭の生け方を充分會得すると、他の花は一寸說明を聞いたゞけで、立派に生けることができるやうになるものです。葉をどう使つて、どう形を整ふべきかを、初心の方々は、特に充分研究し、練習を積まねばなりませぬ。

このやうに、葉蘭の枚數を少くして形をつくることは、非常に手際を要するものですが、この場合、葉の柔い若葉よりも、しつかりした古葉を選んだ方が、好都合であります。もし、葉の腰が弱くて、生け難いときには、灰汁水の中にしばらくつけておきますと、しつかりとして、大變生けよくなるものであります。

元來、葉蘭は一種生けがよろしいのでありますが、淡泊な姿の龍膽などを根締として用ひることも、何ともいへぬ趣があつて、清雅な室の花などには、大層喜ばれるものです。

龍膽は山野に自生し、『笹龍膽』とも呼ばれます。秋、濃い藍色の花をひらきます。その野趣に富んだ花の姿は、生花の材料として、それだけを用ひても、趣の深いものであります。

（小川理香）

（八六）牡丹

〔花器〕牡丹籠、花臺は天然木臺。

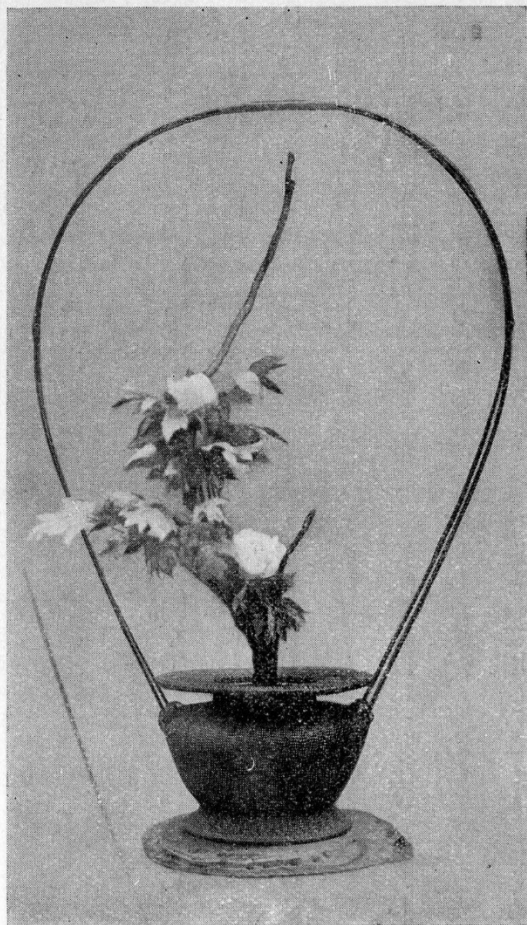
生け方は、牡丹三輪を使つた、左本手であります。

これは非常に撓めにくゝ、萎れ易い花ですから、まづよく枝振りを選ばねばなりませぬ。水揚には切口を燒くか熱湯につけるかした上、充分逆水をして生けます。特に注意すべきことは、花を大切にする牡丹の性情をそのまゝに、葉をあまり拂ひ落さず花を包み守るやうな形に生け上げることです。

また、幹に太い舊木を借りて用ひるのも、一層趣を深くする方法です。花は多くも三輪が限度であります。

一番調和のよいのは眞と受とに開花と蕾を程よく用ひて、天地の二輪とし、豐滿艶麗な姿を、充分に現すことであります。牡丹は百花の王であつて、寶相花、富貴花などゝも異稱されるほどですから、あくまで華やかに、生け上げねばなりませぬ。

牡丹は、支那の原産で、右の別名もあちらで古くから、言ひ慣らはされてゐるものです。高さは二三尺に及び、五月頃、大輪の、艶麗眼を奪ふやうな花を開きます。花色は紅色、紅紫、白など種々あり、直徑六、七寸のものさへあるといはれてゐます。

（江南理齋々）

(六七) 山吹・百合・燕子花

〔花器〕重ねつるべ、井筒。

生け方は、上に山吹の右流し生け、中に百合の左流し生け、下は燕子花の右本手であります。

　山吹は枝が非常に細く、花の重みでたわゝになつてゐるにかゝはらず、なか〳〵強いものですが、これは生けにくゝとも、枝先をつまむことは禁物であります。枝先が輕くなると、竿立ちになり勝ちで、風情を損じ、到底庭に咲き出でた可憐な山吹の姿を、うつすことができなくなります。莖は撓め易いが、皮を損ずると、すぐ折れるものですから、特に注意を要します。

　この生花は、三種の花を取り入れて一つとし、春の野原と小川の趣とを、そのまゝにうつしたまことに野趣の深いものであります。殊に丘の上に咲き競ふこぼれるやうな山吹と、麓に匂ふ白百合、せゝらぎの中に浮ぶ燕子花との取合せは、よく調和して、そのまゝ春の野の姿を思ひ浮べさせます。

　山吹の水揚は、根元を碎いて山椒を入れておくか、湯で、切口を一二分間煮ることなどがよく、一體に若芽は萎れ易いものですから、不要のものをよくつみ、水に全部を浸しておくやうにします。

（池田理梅）

（六）芍藥

〔花器〕耳附方口の瓶。

生け方は、九輪の花と蕾とをつけた左本手であります。

芍藥は、藥用の他、多くは觀賞用として栽培せられて、花は初夏の頃につけます。色は紅、白が最も多く、ときに桃色のものもあります。一重のものが原種でありますが、二重、八重のものなども少くありませぬ。

初夏の候、庭先に咲き出づる絢爛眼を奪ふやうな芍藥の大輪は、うつして生花としても、まことに艷麗なものですが、開ききつたものばかりを用ひずに、蕾や半開のものも、適當に加へて使ふことが必要であります。

あまりに葉を切り透すことは、却て淋しくしますから、禁物です。また相當に生けにくい花の一つですから、注意して、姿やさしく、淸らかに生ける心を忘れてはなりませぬ。

水揚には、切口を熱湯に二三分浸すか、切口に砂糖を塗り、そのまゝ燒いて水に入れる方法などがありますが、生けた花瓶の中へ熱湯を注いでも差支へありませぬ。

打水をするときは、重い上に更に重くなりますから、花へかゝるのを避けねばなりませぬ。

（岩井理芳）

(究) だるま檜扇

〔花器〕薄端、花臺は黒巻臺。

生け方は、右受流してです。

檜扇(射干)は、山野に自生する宿根草本でありますが、觀賞用として庭園にも栽培せられます。ひろい劍狀の葉が澤山互生してゐるため、この名がありますが、夏日葉の間から莖が出て、四五尺に達し、梢に小枝を分つて、黄褐色の花をつけます。まことに淸麗な姿の花であります。

非常に撓めのきかない缺點がありますから、まづ自然の枝振りを選ばなければなりませぬ。止むを得ず撓める場合にも、よく注意して、鋏の柄で花と葉の間を、強く押すやうにするのが、最もよい方法であります。

葉の横にひろがつてゐるものですから、生け上げてから見事に見せるためには、葉先を、鋏で適當に切りつめても、差支ないことになつてゐます。

また葉が表の方に彎曲して、生け難いものがありますから、豫め絲で莖の上下を葉裏の方向に、弓の弦のやうに縛つて引き曲げ、葉表を下にして、水中に伏せておきますと、癖が直り、花莖も向日性によつて上を向き、非常に生け易くなるものです。水揚は、特に行ふ必要がありません。

(高谷理淸)

(七)　花菖蒲

〔花器〕龍模樣小水盤、花臺は黒塗四脚卓。

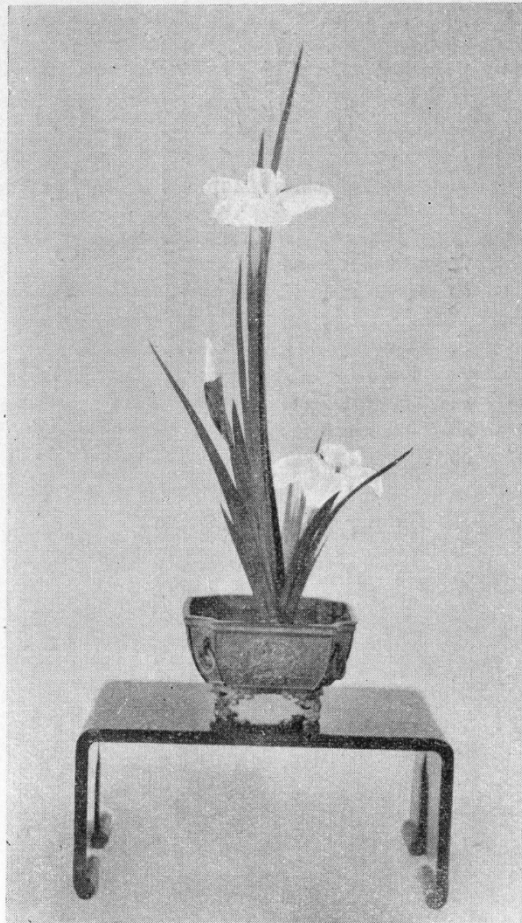
生け方は、五株三輪を用ひた右本手であります。寫眞のやうにすらりとした淡麗な姿に入れ、その持味を出すことは、なか〳〵容易でありませぬ。

生け方の順序は、まづ流し株を入れて次に流し花を入れ、受の株に受の花、眞前の株に眞の花、それから眞の株を入れて、最後に止の株を入れます。眞前と止とが空株で、葉株の表は、花の方に向けなければなりませぬ。

葉株は、流しと眞前及び眞を、右株の組方とし、受と止を、左株の組方として あります。

注意しなければならぬことは、燕子花の場合には、眞の花の奥に見える二枚の葉が、冠葉となつてゐるために、獨立せしめてはなりませんが、この菖蒲の場合は、三枚でも、獨立した一株として取扱ふことであります。

菖蒲も、燕子花も、野生の最も正しい姿を、遺憾なく現はすことに何より苦心するものですが『燕子花の花は葉よりも高く、菖蒲の花は葉よりも低し』と、古來からいはれてゐる著しい相違點を、專ら眞の姿にとり入れることに、注意せねばなりませぬ。

（千羽理君）

(七) 旋花

〔花器〕白銅月形の釣花生。

生け方は、左流し生です。

旋花は、原野に自生する多年生の蔓草で、他物に巻きつく長い莖があり、葉は長さ三寸ばかり、長い葉柄をつけて互生してゐます。花は朝顔に似て、帶紅色の如何にも優しく、また何となく淋しさを覺えるもので、五六月頃から夏にかけて、主に晝間開花するために、この名があります。

これは、もとより蔓草ですから、幾本もの蔓をからませて生けるとか、または蔓梅擬か、藤蔓などを借枝して左巻にうまく纒はせ、形をつくるのですが、蔓や葉の疏密よろしきを得ることに、注意しなければなりませぬ。

花も數多くつけるより、各枝にほどよく蕾を配り、開花は眞前か、寫眞のやうに眞と流しの分れ目におくと、そこが重點となつて、全體の姿が、何ともいへぬ可憐な趣を持つものです。

またこの蔓草は、置花とするより、釣花として平野の趣をうつすのが、風情もあり、またその感じを深くするものです。尚ほ蔓草には左巻と右巻とがありますから、生花にもその性質に從つて、自然に背かぬやうに、注意しなければなりませぬ。

(山本理薫)

(七一) 旋花

（三）垂柳・河骨

〔花器〕波紋附水盤、花臺は卷臺。

垂柳は、好んで水濕の地に繁茂する落葉喬木です。細い枝は垂れ下つて線狀披針形の葉をつけ、極くこまやかな微風にも、綠の絲のゆらぐ嫋々たる風趣は、まことに夏の季節に相應しいものゝ一つであります。

寫眞は、主花として、この垂柳を左本手に入れ、右本手の河骨は從花として、涼をもとめる夏の池畔の景色を描き出したものです。かうした二種生けの場合、主花か從花かどちらかの受を、必らず正面の方へ寄せて出すことを、忘れてはなりませぬ。

垂柳は、細い枝や葉が、相當に繁茂してゐるために、その切り透しによく注意し、縺れ合つたり、あやになつたりしないやうに工夫しなければ、涼趣の湧く清雅な風情を、表現することができませぬ。

また枝條の梢頭は、いづれもいひ知れぬ趣のあるものですから、徒らに剪裁することを避けねばなりませぬ。

雨にけむる垂柳の眺めには、趣の更に深いものゝあるところから、雨師といふ漢名もあるほどです。燕子花などの水邊の花を配して、その風趣をうつすのもまた一興であります。

（松井理玉）

(七三) 蘆・河骨

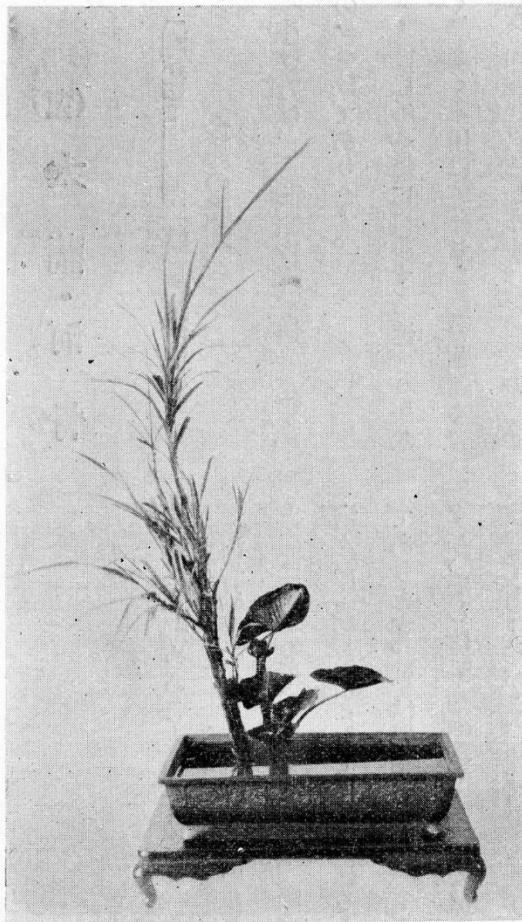
〔花器〕古銅水盤、花臺は平卓。

蘆は、沼澤または池畔などの濕地に自生する、多年生草本で、莖は太く丈餘の高さにのび、葉は鬼芒に似て、細く長く互生してゐます。その風に亂れて浪打つかと思はれる情景と、如何にも淡泊で、すこしも俗氣のない瀟洒な風姿とが、古來文墨の士に愛せられて、詩となり歌となつてゐるのも、理であります。そのために、花人もまた好んで常に生けるものです。

寫眞は、蘆を右本手に入れ、河骨を左中流しにして水道をとり、根分けとして入れたものですが、風姿の蕭條たるなかに、一種掬すべき壯麗な趣の横溢してゐる樣を、よくうかゞふことができます。

蘆は、葉の切透しともつれとに注意することが、何より大切であります。よほど練達した腕前でないと、その趣をうつし得ないものとされてゐます。またこれは二種生であるために、(七二)の場合のやうに、受についての注意を忘れてはなりませぬ。

水揚には、切口に脫脂綿をつめて、酒精または稀鹽酸に、一寸ひたして用ひます。莖を撓めることは、避けなければなりませぬ。

(池　田　理　英)

(七四) 太藺・河骨

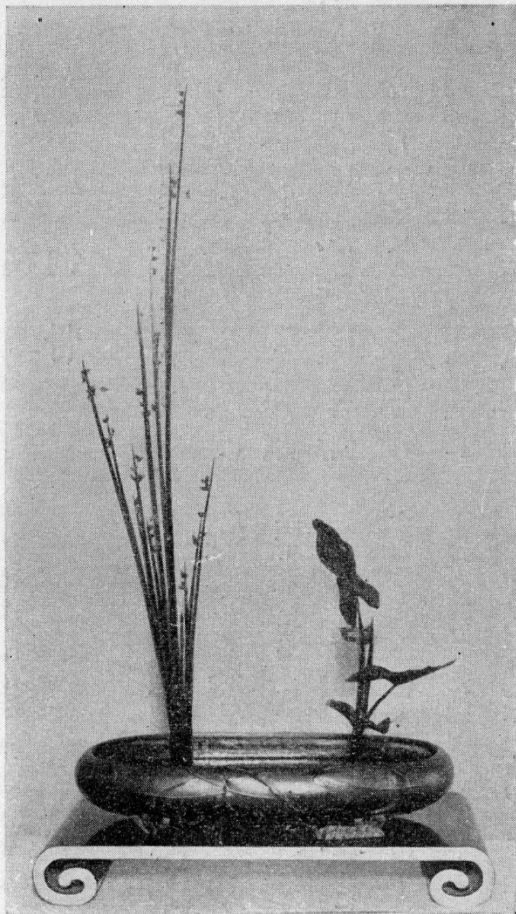
〔花器〕小判形水盤、花臺は黒塗金縁の巻臺。

生け方は、太藺右本手、河骨左本手の株分けであります。

太藺は池や澤に自生するばかりでなく、多く水田に培養せられ、莖圓く、高さ四五尺に達します。夏、莖の頂に淡黄褐色の數箇の花をつけます。水揚には、生けるまで石灰水に浸しておくと、長く生々としてゐます。

生けるには、莖がもつれ合はぬやう、一本々々筋を立てゝ、生けなければなりませんが、あまりに撓めすぎるのもその本性に背くものでありますから、なるべく撓めることを避けます。

河骨は梅のやうな黄色の堅い花を、葉の間に見せて開きます。古來雅致に富んだ清楚な花として愛でられるものであります。葉は里芋の葉に似てゐますが、感じは堅く滑かで、その姿は頗る單純でありながら、獨特の趣があります。水揚が困難であるにもかゝはらず、ひろく生花に用ひられてゐる理由もこゝにあります。詳しい水揚法は、(七五)河骨の項を御參照ください。

太藺と河骨との取合せは、如何にも涼味を呼んで、夏の花としてまことに相應しいものであります。

(櫻井理督)

（圭）河骨

〔花器〕黒塗小水盤、花臺は中卓。

生け方は、左本手です。

河骨の一式生けは、まことに清冽掬すべきものがあります。そゞろに、凉味を覺えて、夏の床の生花としては、缺くことのできぬ材料の一つです。

生けるに當つては、あまり花を多くすると、自然の風趣を傷つけるものでありますから、この弊に陥らぬやう、葉を五枚、花二本くらゐを、適度とすべきであります。

水揚にはポンプ（水揚器）を用ひ、次の溶液の一つを注入します。（一）煎茶を濃く煎じて冷したもの、（二）石灰水の上澄、（三）柿澁の五六倍液、（四）石膏の上澄など、どれでも相當效果があります。一番簡單で有效とせられてゐるのは、タンニン酸を一撮み加へた水を用ひて、葉が暗緑色になるのを度合とし、充分水につけておいてから生けることであります。水揚をすると莖が曲り易い故、細竹にしばりつけて、水中に入れておくのも注意の一つです。

河骨は沼澤河流等の淺水中に自生する多年生草本で、葉の長さ二三寸から一尺くらゐのものもあります。七八月頃、水面上に莖をぬいて、黄色の花を一つひらきます。

（池上理貞）

(𠔁) 眞 槇

〔花器〕 水盤、花臺は黒巻臺。

生け方は、左本手です。

槇は、常綠の喬木でありますが、庭園樹や生垣として、ひろく栽培せられてゐます。五月ごろ花を開き、十月頃には紫色の種子をつけますが、生花には、いつ用ひてもよく、生々とした趣は、常に喜ばれます。

これはなるべく苔のついた、幹の太いものを用ひて、落ちついた山の中の景趣を出すことに、まづ苦心せねばなりませぬ。如何にもがつしりとした男性的な趣は、到底他の花ものでは、得られぬものであります。

枝振りには非常に屈曲が多くて、葉はこんもりとしてゐるため、なかなか形がとりにくいものですが、よく注意して適當に切り透し、枝振りをよくして、重なり合はぬやうに、つくらなければなりませぬ。

また、槇は一種生けとしても面白いものでありますが、野生の草花などを適當に取合せると、一層趣きを増すばかりでなく、男らしいうちにも、よくなごやかな氣分を增すものでありますす。山中の景色を描きだすためには、是非とも試みて見たいものであります。

(篠 崎 理 金)

(七七) 朝鮮槇

〔花器〕薄端、花臺は平卓。

生け方は、右本手です。

朝鮮槇は、本名を『てうせんがや』といひ、庭園の觀賞樹として栽植せられる、常緑灌木であります。幹の高さは一丈餘に達し、葉は槇に似て、やや輪狀に着生してゐます。『いぬがや』の培養種であります。

この木は、非常に生けよいものであるが、梢をすらりと生け上げなければならないために、梢を切るやうなことは絶對に避けなければなりませぬ。そのために、枝振りを注意して選ぶ必要があります。

概してこんもりと葉のついてゐるものでありますから、生け上げた姿を、清雅ならしむるためには、注意して、明るく切り透す必要があります。

根締として、小菊などをうまくあしらふのも、まことに面白いものでありますが、何よりも幽清なる姿に生け上げることが、この生花の見逃すことのできぬ、主要點であります。

朝鮮槇はいつでも得られる材料ですから、四季樣々の草物を適當に取合せて、練習して御覽なさいませ。初心の方には、生けよい材料ですから、よい練習となります。

(森田理梅)

（六）椙　木（正木）

〔花器〕水盤、花臺は黒塗巻臺。

生け方は中流しです。

椙木は、よく庭園に栽植されたり、或は籬などゝもなる、常緑灌木であります。葉は鋸歯のある楕圓形で、七月頃葉腋上に、緑白色の細花を生じ、やがて實を結びます。これも四季を通じて、用ひられる花であります。

椙木は非常に生け易いものであります。たゞ枝も葉もこんもりしてゐるために、適當に切り透して、種々工夫を加へる必要があります。その姿には一種の趣あるもので、生き〱とした常磐木の感じは、充分に現はされてゐるものです。

また葉の黄ばんだものは、俗に黄金椙木と呼ばれ、好んで生けられるものですが、これを生けるにも、成るべく緑の葉を下の方に、黄ばんだのを上の方に、使ふやうに注意せねばなりませぬ。あくまでも清雅に、氣高く生け上げると同時に、その材料の習性、または特徴を重んじることを忘れてはなりませぬ。

緑滴る材料を生けるにも、既に黄葉し初めたものを生けるにも、同樣の手法を用ひ、同樣の氣持で生けるのでは、不自然であります。

（山　本　理　艮）

(七九) 夏菊

〔花器〕すかし彫り薄端、花臺は巻物型巻臺。

生け方は、左本手です。

非常に折れ易いために、これを撓める場合には、注意して節と節との間で、これを行ふべきであります。この際葉を損じないやう特に注意を要します。

材料を選擇するには、なるべく節の短いものを選ばないと、特有の靜かなものさびしい姿が、見られなくなるものであります。

花は、眞に蕾を用ひた時には、流しに半開を用ひ、また眞に半開を用ひた時には流しに開いたものを用ひます。葉が垂れ下つて、美觀を損じ易いのですから、よくそれを除かねばなりません。多少重なり合うても、我慢のできる程度なら、みだりに切るのは禁物です。

夏菊は、數多く入れるよりは、寧ろ成るべくあつさりと生けることが、望ましいのであります。

その生け上げた姿には、冒しがたい崇高な氣韻と、清新な趣とが生動して、しかもその間、一抹の涼味を覺えしめるものがなくてはなりません。

水揚は秋の菊とも同じやうに、根元を燒いて、逆水をそゝぐか、或は切口を薄荷油か稀鹽酸に浸します。

(和田理勇)

(八〇) 寒竹・小菊

〔花器〕胴締ずんど、花臺は巻物型花臺。

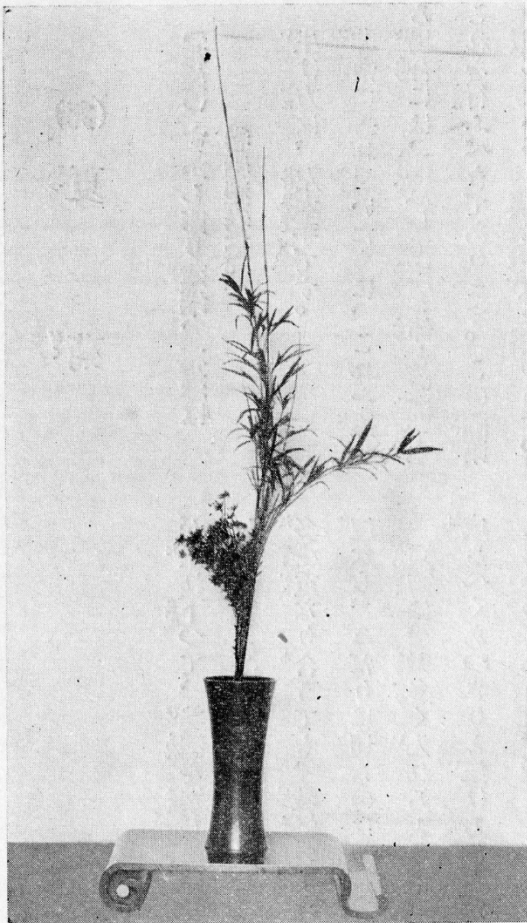
生け方は、左本手です。

寒竹を生けるには、まづ葉の切り透しに、意を注がなければなりませぬ。葉が組み合つて形をなさないのは、大變醜いものであります。

寫眞のやうに、篠を立て、生け上げるのも、一つの方法であります。その姿は、何ともいへぬ楚々たる氣分を味はせます。しかし、この篠を立てるには、可なりの熟練を要するのであります。餘り目立たないやうに、小枝や葉間に手際よくしのばせて、相交錯せしめ、篠そのものにも、天地人三才の形を作ることの工夫が大切です。小菊を配したのは、庭先の景趣を、そのまゝにうつしたのであります。

寒竹は、根を割つて、干山椒をはさみ、そのまゝ燒いてから、更に冷水につけておいて生け上げると、立派に水を揚げるものであります。

寒竹といひ、小菊といひ、ともに枯淡な材料でありますから、その趣を損ぜぬやう、注意が必要です。かやうな材料を生けた場合、もし蕪雜な感じのものや、賑やかなものになりましたら、それこそ笑止です。

(鈴木理允)

(二) 雷電木・南京七竈

〔花器〕ずんど、花臺は扇面型

花臺

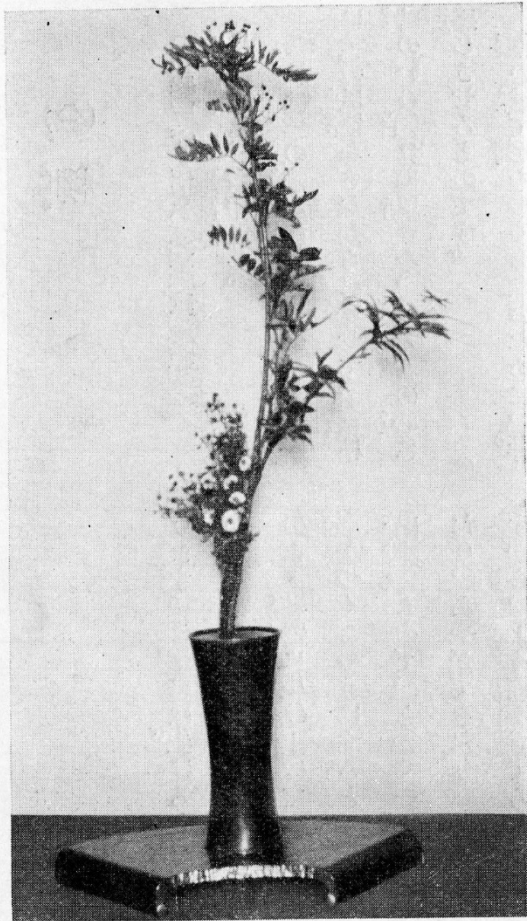
生け方は、左本手です。

この紅葉は、秋の深山の景色をそのまゝに見せる、色彩鮮やかなものを特に選びました。

葉がそれ〴〵下向についてゐるものでありますから、これを生ける場合は、枝の使ひ方に、餘ほどの研究を要します。たゞ非常にぼさつきがちのものですから、清雅な輕やかな姿に、小枝や葉は、適當に切りおとす必要があります。

雷電木の紅葉は、秋たけた山野の景致をうつし出すのには、至極適當な材料の一つであつて、木振りといひ、また葉の照りといひ、また艶麗な姿といひ、彼の錦木や、櫨、滿天星のそれにくらべて、優れてこそあれ、決して劣るものではないと、思はれるほどのものであります。

花形としては、寫眞のやうに、本手も結構でありますが、中流しや、流し生の行、草の形も、風情のなか〳〵多いもので、その美しい姿は、見る人の眼を樂しませるものであります。根締の引締め方、副の枝の出方など、寫眞についてよく御覽ください。

(中村理容)

(八二) 柳

〔花器〕ずんど、花臺は薄板。

生け方は、右中流し。

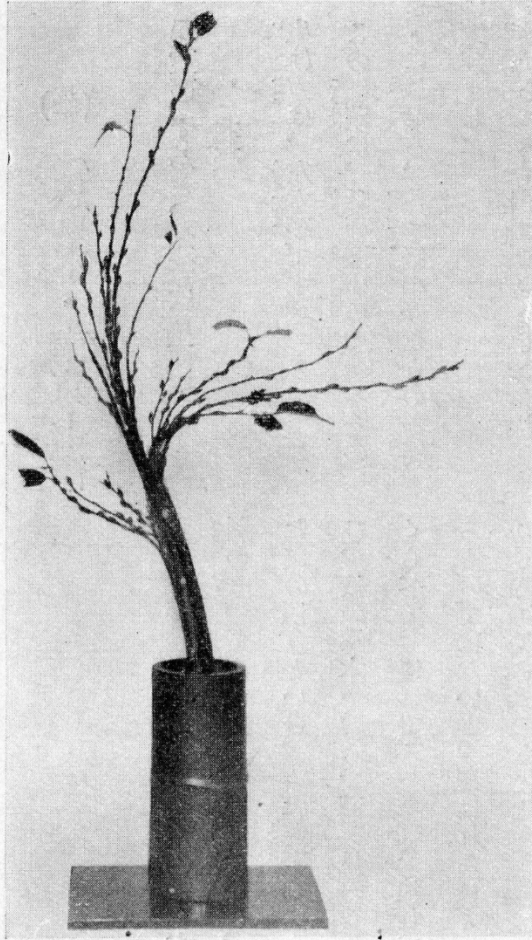
これは秋の柳を生けたものです。特に秋の風情をさながらに見せて、霜枯時のいひ知れぬ風趣を、見る者の心に感じさせるものです。

細い枝で形をつくらないために、非常に生け難いものですから、枝振りの選擇にも、撓め方にも、充分工夫しなければなりませぬ。

殊に中流しや、受流しを生けることは、相當の伎倆の持主でも、隨分苦心するものであります。これは流しが生けたまゝの姿を、保ちにくいからであります。これには生けるときに、すつかり撓めたものを一旦もとへ戻し、そのまゝ、花器に生け上げてから、次々に形をつくるやうにすると、思ふやうに出來るもので、とかく一本並べになつたり、あやができたりしがちのものですから、よく筋を立てるやうに、くれぐれも注意を要します。

また柳は數生けなどと申して、腕にまかせて無暗に數多く入れたのを時に見受けますが、これは醜く、生花の本義に背くものですから、寧ろ數少く、眞實の正しい姿に生けるにこしたことはありませぬ。

（野　田　理　登）

(八三) 川柳・菊

〔花器〕水盤、花臺は黑卷臺。

生け方は川柳を左本手、菊を左流しに配したものです。

川柳は、一名『さつきぎようりう』ともいひ、支那原産の喬木であります。觀賞用として庭園に栽培され、葉は一寸見たところ、鱗のやうに密生してゐます。夏、淡紅色の小さな花をつけますが、生花に用ひるのは、固よりその花ではなく、葉と莖とです。

川柳は、何んともいへない姿の淸らかなものであるが、かく瀟洒たる姿に生け上げるためには、相當の苦心を要するものであります。特に淸らかな姿を、そのまゝに現はすやう、心して生けなければなりませぬ。

小菊などを生け合はすのも、一層の愛らしい感じを與へるものでありますが、寫眞のやうに、大菊を數少くあしらふこともまた、一しほひき立たせる方法であります。左圖では、特にその對照に御注意ください。

水揚には、根元を充分燒いて、これを水に移すだけで結構であります。

一種生けもまた見事なもので、殊にこの場合は、大まかな、廣い原野に一もと毅然と立つ老木の姿を偲ばせて、一層感慨の深いものがあります。

(桑野理華)

(八四) 棕櫚

〔花器〕古銅製竹型ずんど、花臺は薄板。

生け方は、左本手です。

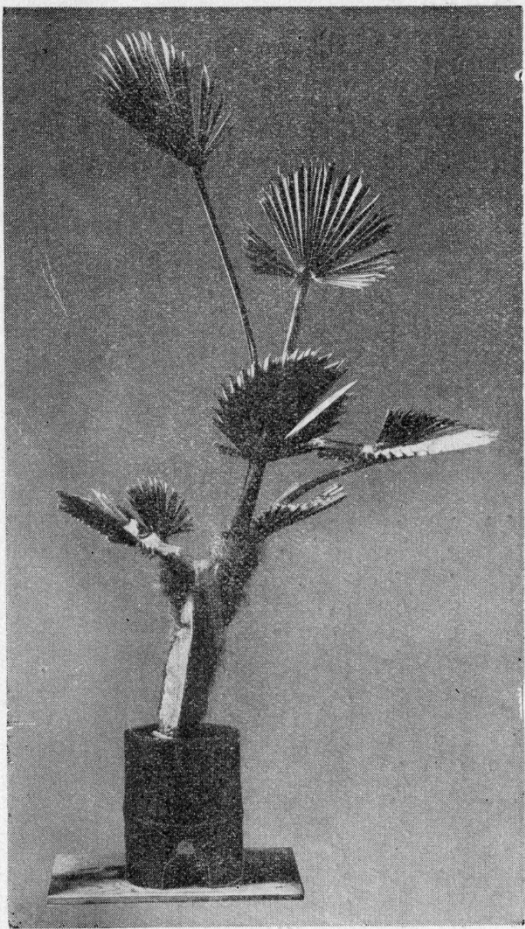
棕櫚は、その生々した颯爽たる美觀を、そのまゝにあらはしにくいものでありますが、これはつまり、葉の作り方と、撓め方、用ひ方との大切な注意によるものですから、この三點に充分注意して生けると、他には見られぬ趣のあるものができます。

葉先は丸く切るよりは、切目を入れて、あまり綺麗にしない方が、如何にも自然に近い感じを與へます。流しと受けの分岐點が、あらはに見えると、大變醜くなります。また葉と葉との配り方にも、充分注意します。

生け方は、棕櫚の毛を根元から流しのわかれ目まで、幹を包むやうにほどよくして、込のなかに眞先に入れておき、次々と順序よく入れます。芽葉は寫眞のやうに、眞前に入れて、丸葉の配置には、よく〳〵注意します。

棕櫚のやうに、甚だしく他の草本と趣を異にしてゐるものを、上手に生け上げるには、なか〳〵苦心が要ります。生け上げたものが、たゞ珍奇なだけになつたり、氣品のないものに墮してては、生花の本義にもとります。

（岩井理芳）

(八五) 八つ手・菊

生け方は、右本手です。

〔花器〕薄端、花臺は黒巻臺。

普通玄關の側などによく植ゑてある八つ手は非常に葉の大きいもので、多く枝を作らず、十年二十年經つても、さして大きくならぬものです。滑らかな、艶のある掌形の大きい葉が特徴であります。

生花に用ひるものは、寫眞のやうによくしまつた、葉のごく小さい、木振りのよいものでなければなりませぬ。さうでないものは、ちよつと形を見ても判るやうに、なか〳〵流儀花として、格のある、また品のよいものには、生けにくいのであります。

一種生けも結構ですが、葵や菊の類を根締とするか、生け合はせれば、同じ清淨閑雅な姿の中にも、美しい色彩が調和して、一層艶麗の趣を加へます。工夫一つで意のまゝに、言ひ知れぬ趣きを掬むこともできます。

水揚は、殊更行はなくともよろしいのですが、葉の光澤を失はしめないためには、根元の切口ちかくに、鋏目か鋸目を入れて、葉もろとも、深く水に浸しておいて生けるがよろしい。かうすると、水をよく揚げて、氣勢も保ちもなか〳〵よいものです。

(神林理好)

（八六）伽羅・百合

〔花器〕薄端、花臺は巻臺。

生け方は、右本手です。

伽羅木は、いちゐの一變種で、多く庭園に栽培せられる常緑の喬木であります。莖は通常、地に臥して成長する傾きをもつてゐます。

伽羅には、粘り氣もあり、撓めもよくきいて、大變生けよいものでありますが、とかく葉の出場所が不揃ひのため、これを巧に生けるには、なか〳〵手腕を要するものとせられてゐます。

常磐木でありますから、四季いつでも用ひられます。またその姿には、悠揚せまらざる落着きがあつて、微塵の俗氣もなく、まこと氣韻ある、高雅なものであります。

従つて、その一種生けも清雅極まりないものですが、これに白菊や濱菊、または葵などを取合せて、園景をうつすのもまた感興深いものであります。色彩が加はるだけに、言ひ知れぬ趣を増してくるものであります。

生花に於ける色の配合は、形のとり合せと同樣、重要であります。この伽羅の黒緑との對照として、黄赤色の小百合を選んだのも、まことに面白い試みといはねばなりません。

（國峰理益）

(八七) 縞すゝき

〔花器〕ずんど、花臺は塗平卓。

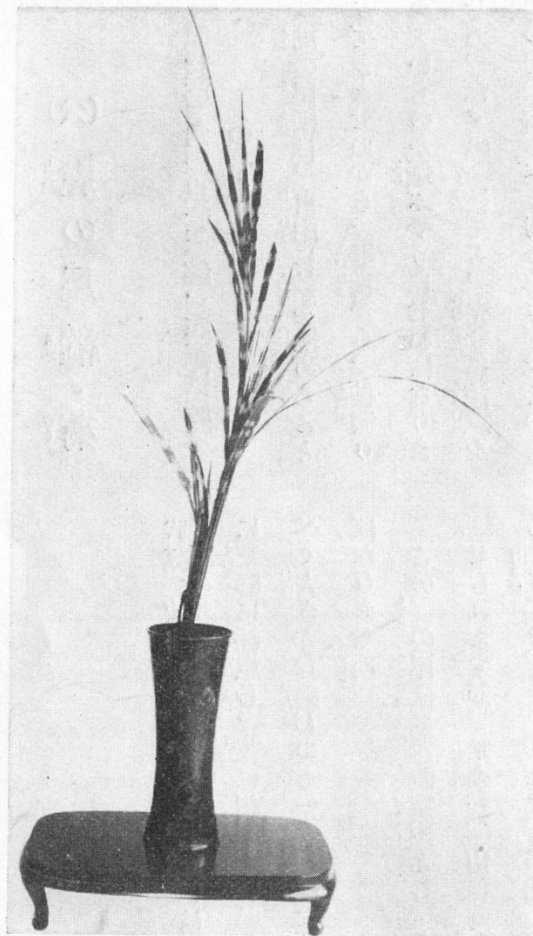
縞すゝきは山野原野に自生し、年々宿根より莖、葉を出し、五六尺の高さに達しますが、秋には、莖の先に長い穗、卽ち尾花を出します。

縞すゝきの生け上げた姿は、言ふに言はれない淡麗な中に、詩趣の掬すべきものがあります。これは秋の七草の一つに數へられて、別名を美草とも呼ばれてゐるほどで、秋ばかりでなく、夏も、好んで生花に用ひられるもの、一つであります。

生けるには、まづ葉が重なり合はぬやう、充分注意せねばなりませぬ。また風にあたると、すぐ葉を卷いてしまふ特質をもつてゐます。取扱には特に、心得ておかなければなりませぬ。

これは一種生けばかりでなく、常夏を根入にしたり、女郎花や桔梗とまぜ生けにしても趣のあるものです。また色彩の調和がよくて、一段と秋の風趣を添へます。

水揚は、根元を碎いて灰汁水に浸すのが、一番簡單な方法であります。葉が御覽のやうに單調でありますから、生け上げた姿が寂し過ぎぬやう注意せねばなりませぬ。

(內藤理悅)

(八八) 虎の尾樅・菊

〔花器〕角型虫喰水盤、花臺は唐木の平卓。

虎の尾樅は、自由に枝を撓めることができませぬから、最初から、枝振りのよいものを選ぶやうにせねばなりませぬ。たゞの一枝でも、充分に注意を拂つて、なるべく切り落さず、そのまの姿で用ひるやうに、心掛けるのであります。

苔などをつけた老木になると、その雄大な姿は、寫眞に見る通り、天空を摩する大木を思はしめるほどであります。根締には、色彩に特に意を拂ひ、數本の菊をあしらひました。かやうに幽邃な趣などを添へる場合には、殊に花器に注意し、花に相應しい、なるべく大まかな感じのものを選ばなければなりませぬ。

この虎の尾樅は、觀賞用としても栽培せられますが、元來が深山に自生する喬木でありますから、深山の幽邃な景色をうつすのには、何よりも申し分のない材料であります。これに、山百合や龍膽のやうな山野の草花を生け合はせるならば、意のまゝに、深山幽谷の景觀を髣髴たらしむることができるのであります。

（染谷理康）

（八九）油點草

〔花器〕杵型ずんどう、花臺は地紙、扇面型寄薄板。

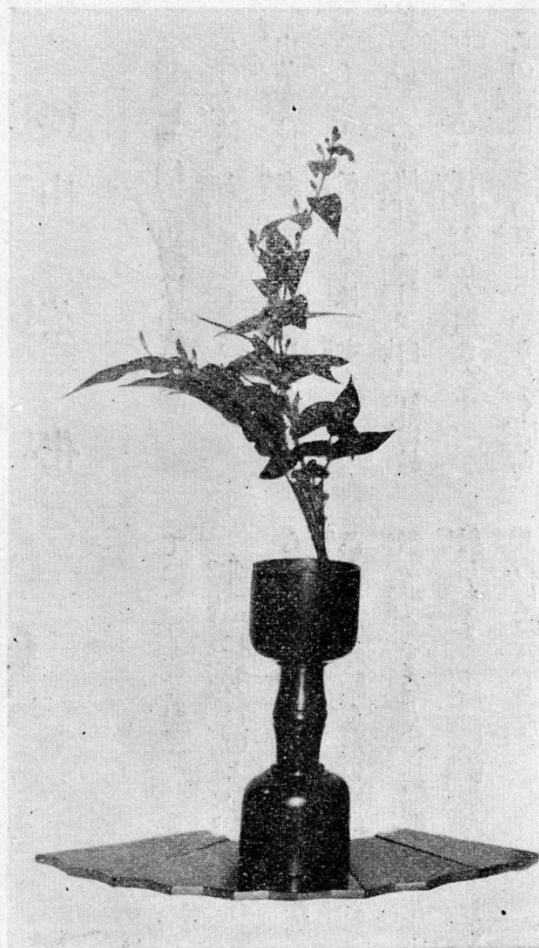
油點草は、山間の濕地に自生しますが、多くは觀賞用として、栽培せられてゐます。莖の高さは一二尺に達し、長楕圓形の葉をつけ、夏秋のころ、上葉腋に六瓣の花をひらきます。色は暗紫色の斑の多い白色であります。

生け上げた姿は、一種ものさびた、掬すべき風韻を持つものであります。但し、この趣を遺憾なく表現するには、呼吸のいるものです。注意しないと、その雅味を出し難いばかりか、却て反對の結果に終るものですから、その用ひ方と、形のつくり方とに、特に心すべきであります。

油點草は、秋の野山の景趣を眼のあたり現はす花として、見逃すことのできぬもの、一つであります。

水揚には、根元を一寸薄荷油に浸して生けるもよく、また根元をよく打ち碎いて、灰汁で煮るのも一方法であります。どちらでも、よく水を揚げるものです。

次の寫眞に於ては、特に生け上げた花と花器と花臺との、一分の間隙もない渾然たる調和に、お目をとめて御覽ください。

（安田理鶴）

(九〇) 山茶花

〔花器〕薄端、花臺は黒塗平卓。

生け方は、右中流しです。

山茶花は、多く觀賞用として培養されるもので、幹の高さは一丈くらゐ、秋冬のころ、淡紅、濃紅、白、紅白絞とりどりの、優艷な花を開きます。

この花は、その風情のやさしく清らかで、しかも、清雅な趣を持つてゐるものでありますから、その心持をもつて、手際よく生けませぬと、到底自然の特性を現はすことのできぬ、稚拙なものとなつてしまひます。

蕾を多くし、開きは五つか六つにとどめ、全體の花の數を、あまり多くしてはなりませぬ。

非常に勢ひのよい木でありますから、水揚の必要はありませんが、花の落ちるのを防ぐためには、なるべく花數を少くすると共に、鹽水を花頸に注射します。花器に鹽を入れておくのもよろしいのです。

山茶花の一種生けは、清新で覇氣があり、なかなか捨てがたい趣があります。そのまゝでも優美なものでありますが、また水盤などに入れて、これを寒菊の類を從花として配して見るのも、結構なものであります。

（野田理泉）

（九一）どうだん・菊

（花器）古銅壺、花臺は黒塗巻臺。

生け方は、右本手です。

どうだんは、その樹容が頗る奇形に富んでゐるものですが、その中に含む優しさと麗はしさは、畫家も筆にし難いものといはれてゐるほどで、特にこの紅葉したもの、美しさは、また格別であります。

これは専ら、自然の木振りを、巧みに利用して生け上ぐべきものであります。むやみに人工を加へることは、却て自然の美を損ずることになるので、避くべきこと、されてゐます。

これに黄菊、白菊を適宜にあしらひますと、一段と紅葉の美しさを引立たせるもので、これは大いに工夫すべきところであります。

また、寫眞のやうに本手に入れるのも結構であります。しかしその木振りによつて、中流しや流し生けの形に入れ、これに前の黄菊や、白菊の類を、根締として取合はせますと、一層引き立つものであります。いやが上にも、秋色の加はるを覺えます。

どうだんは、滿天星躑躅ともいひ、山地に自生し、春日、葉にさきだつて、灰白色壷狀の小花をつけます。

（西村理常）

（九一）どうだん・菊

(九二) 紫苑

〔花器〕ずんど、花臺は黒艶消巻臺。

生け方は、右本手です。

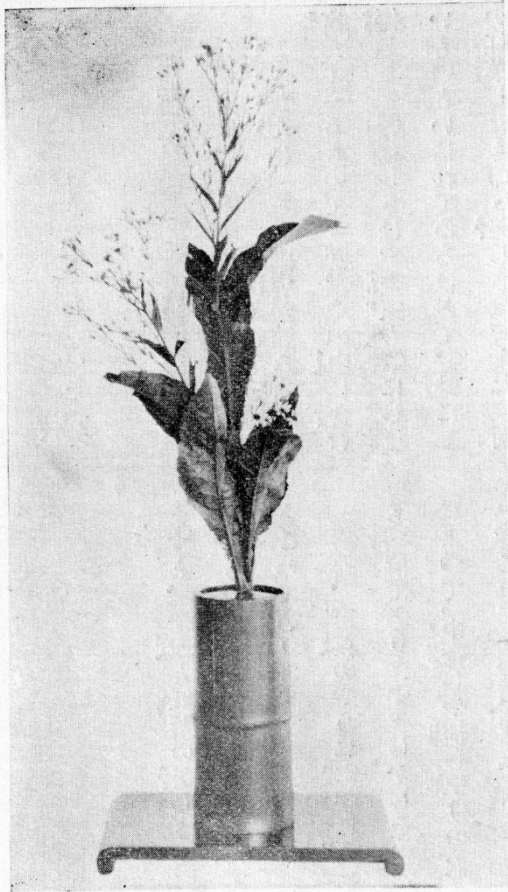
紫苑は、庭園に栽植せられる多年生の草本で、毎年春、舊根から長楕圓形の葉を叢生して、秋には五六尺に達して、淡紫色の花をひらきます。

この草は、一種の氣骨を持つてゐる葉の中から、やさしい花を出して、七草に負けぬ趣を持つてゐるもので、姫紫苑と共に、山野の景趣を描き出す上には、またなき相應しい花の一つであります。

葉柄と花軸とは、硬くて非常に折れ易いため、自然の葉振りや枝振りをよく見て用ふることが大切です。また大體、葉蘭などの大葉のもの、生け方に從つて、葉を用ひるがよいのです。殊に注意すべきは、受の花を、埋みの心持で、低く、小さく入れることを忘れてはならぬことです。

葉莖のすらりとしたものよりは、なるべく葉立に狂ひのあるものを使用することにすれば、形がとり易くもあり、また生け上げた風情が、一般に見ばえのするものであります。

水揚には、切口を熱湯に入れるか、鹽水で煮るか、または薄荷油を用ひれば、簡單に揚ります。

（土肥理芳）

(九三) 桔梗

〔花器〕 薄端、花臺は唐木平卓。

生け方は、右本手です。

桔梗は、多く山野に自生して、高さは三、四尺となり、秋になると、紫碧色、または白色の、釣鐘状五裂の美しい花を開きます。

これは、雛桔梗と共に、秋の野山や水邊の景色をうつすのには、絶好のものであります。女郎花、すゝきなどと生け合せるのも、秋色を彩る上に、まことに妙であります。

桔梗の莖は、うねりが多くて節々が高く、小枝の繁つたものですから、なるべくそれを除かずに、しかももつれ合はないやうにして、うまく生け上げることが肝要です。莖は非常に折れ易いものですから、なるべく節の間で撓めるやうにし、はじめから枝振りを選ぶことが得策であります。

この一種生けは、姿もやさしく、いかにも淸らかで、何ともいへぬものですが、これに可憐な常夏を、根締として用ひるなどは、また一際の美しさと雅やかさを増して、秋の生花としては極めて相應しいものとなりませう。

水揚には、根元を白汁の出るまで打ち碎き、冷水につけます。また酒精につけるのも、良法であります。

(片岡理喜)

（九四）雲龍柳・百合・燕子花

〔花器〕水盤、天然木の薄板。

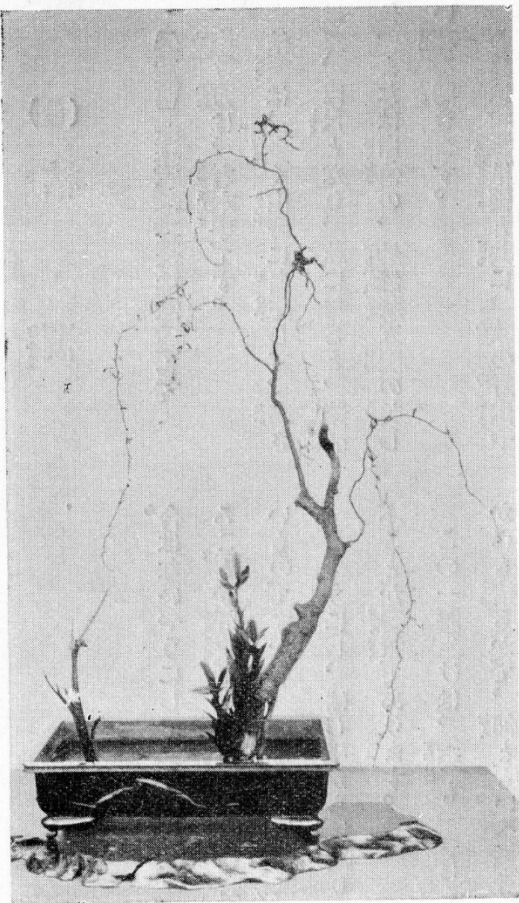
生け方は左本手に、燕子花三本の右本手配りです。

この柳は、枝に屈折が多く、なかなか雅趣あるものですが、枝をうまく選んで使ひませぬと、その雅致を充分に出しにくいものであります。すつかり生け上げてしまつた清雅な姿は、淡々として、思はず見る人をして、感嘆せしめます。しかし、この獨特の風趣を表現するまでに至るには、相當苦心を要するものであることは、申すまでもありませぬ。

百合または燕子花、水仙などを生け合せるのは、淋しさにおちるのを助けて、花の姿に彩どりを加へるものですからまことに結構です。これはたとへ一種でも、生け合はせるやうにしなければなりませぬ。

從つて雲龍柳は、寫眞のやうに、なるべく水盤の花器に入れて、池沼の畔をしのばせるか、或はその風趣をうつすことが最も大切で、花器や、根締の取合せが思はしくないと、雅趣に富んだ折角の雲龍柳も、その趣を到底出すことができないものであります。この點を充分心せねばならぬ。

（和田理勇）

(九五) 金雀兒

〔花器〕古銅壺、花臺は黑塗の巻臺。

生け方は、右手流しです。

金雀兒は、荳科の常綠灌木で、綠色の細く柔やかな枝を叢生させ、初夏の頃、葉腋に、黄金色の蝶のやうな花をつけます。葉はたゞ申しわけばかりの小さなものですが、常綠の細幹に捨てがたい風致があつて、觀賞用とし多く庭園に栽培されてゐます。

これを生けるには、相當苦心を要します。細い絲のやうな枝を、もつれさせぬやうによく筋立てゝ、その條々として清雅な姿をとらへるやうにせねばなりませぬ。しかし、笠立ちするのは、非常に醜いものですから、特に注意すべきであります。

また太い大木を用ひるのが一番よろしいのですが、それのできぬときは、借り木をしてゞも、幹を太く見せるやうにしないと、引き立ちませぬ。

水揚には、切口を燒いておけば、大抵大丈夫のものですが、切口を、一寸稀鹽酸に浸してから、これを生け上げるやうにすれば、一層よく水揚をし、清雅な姿を、更に長く保つことができます

（池田理梅）

(九六) 蔓梅擬・濱菊

〔花器〕すかし薄端、花臺は卷物型の卷臺。

生け方は、左本手です。

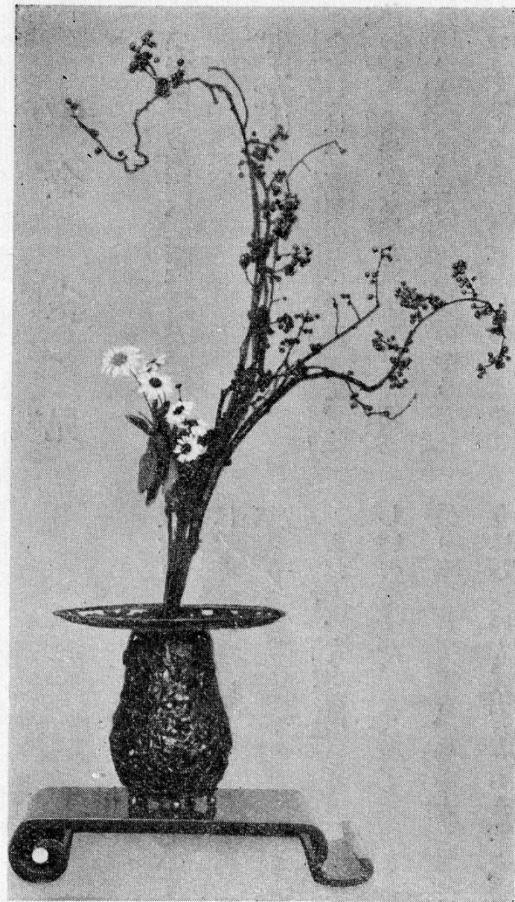
蔓梅擬は、山野に多い蔓性の落葉灌木で、五月頃葉腋から花枝が出て、數箇に分岐し、小さい花を開きます。やがて實を結び、それが熟すると三つにわれて、肉質紅色の假種皮を現しますが、これは花よりも却て美しいものであります。

生花には、すつかり落葉して、實の開いたものを多く用ひますが、冬枯の季節に、外皮を破つて赤い實を露出してゐる姿は、なか〳〵雅致に富んだものであります。

蔓梅擬と濱菊の取り合せは、初冬の野外の景色を偲ばせて、特に高雅な感じのものであります。

この季節のものは、別に水揚の必要がありませぬ。たゞ軒下に吊しておけば、翌春まで再三使ふことが出來ます。但し枯れてしまふと、折れ易くなりますから、まだ生氣のある間に、自由に枝を卷いたり、撓めたりして、自然の風趣を保たせておく必要があります。葉のある間は、特に水揚をする必要はありませぬ。

(岡本理生)

(九七) 椿

〔花器〕薄端、花臺は黒塗青貝緣の卷臺。

生け方は、左受流しです。

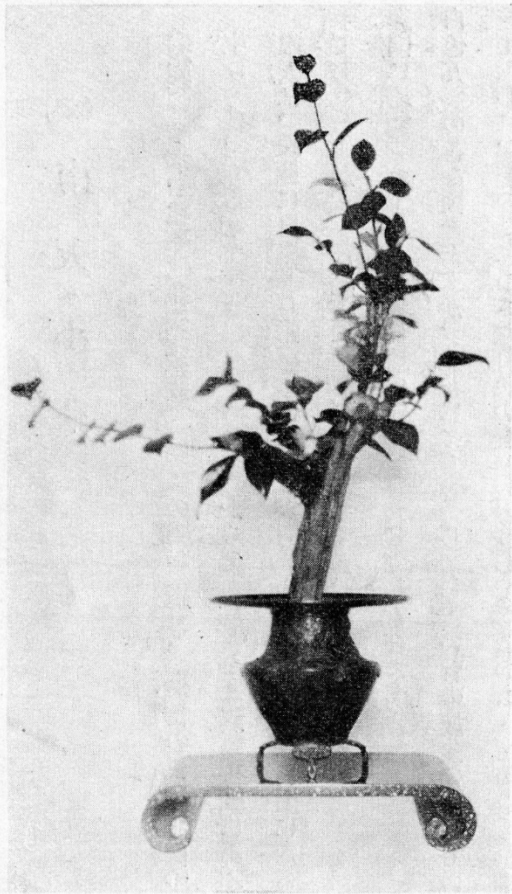
椿は、主として庭園に栽培され、冬から春にかけて大輪の花を開く常綠の喬木であります。花が散るとやがて實を結び、秋になつてその實から、暗黑色の種子を出します。

生花の材料としては、その大輪の花と、濃綠色の葉との色彩の調和が、まことに面白いので、よく用ひられる重寶なものであります。

生け上げる場合、特に注意すべきことは、葉が如何にも混雜し易いために、これを適當に切り透すことゝ、花の置場所を充分に考慮することであります。卽ち冬の寒いときは、葉が花を掩うてゐるやうに使ひ、春は、花が葉の表に出て、陽の光を一面に受けてゐるやうにせねばなりませぬ。

花數はあまり多くせず、淸らかに氣品高く入れることが大切です。そこに插す人の手腕を見ることができるのであります。

水揚の必要はありませんが、花がとかく落ち易いものですから、花柄に鹽を塗るか、鹽水を注射するのが、一番よろしいやうです。

(池上理谷)

（六）南天・小菊

〔花器〕薄端、花臺は黒塗花巻臺。

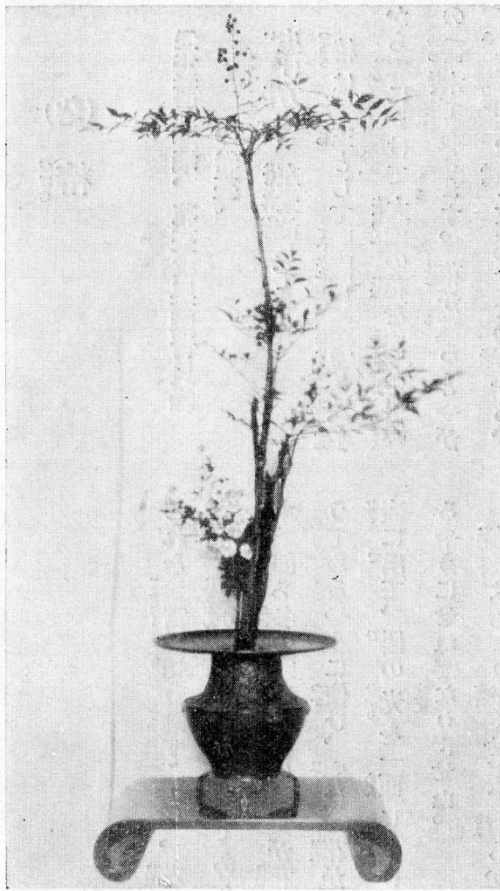
生け方は、左本手です。

南天は、暖地に自生する常緑の灌木でありますが、多くは觀賞用として、庭園に培養されてゐます。初夏の候に白色五瓣の花を開きますが、生花には花でなしに、花の後に小さな紅色の實を結んだものが、珍重されるのであります。種類により、實の白色のものもあります。

大變撓めにくいものですから、枝振りのよい、葉のなるべくしまつたものを選ばねばなりませぬ。撓めにくいばかりでなく、一旦撓めたものは、自然の姿を損ひ、獨特の風趣を傷つけるからであります。酒精燈にあぶりながら撓めますと、木は自由になるものですが、艶々とした實の色がすつかり失せてしまひます。

しかし古い幹の屈曲の多いもので、どうしてもこのまゝで用ひられぬときには、この方法で、曲りを正し、すぐに水に入れることを忘れてはなりませぬ。一般に莖の節の部分から折れ易いものですから、少し捻り氣味に撓めます。

特に水揚を行はなくとも、充分長保ちがします。

（池上理谷）

(九九) 水仙

〔花器〕ずんど、花臺は薄板。

生け方は、左受流しです。

水仙は、暖地の海岸などに、稀に自生種を見る他、主に観賞用として栽培されます。冬季、七八寸の花莖を抽いて、白い花を開きます。楚々としたその姿は、花の少い季節だけに、大いに珍重されてゐます。

別名を『雅客』とも呼ばれてゐるほどですから、あまり澤山挿さずに、多くとも五本、或ひは三本くらゐで、形をつくることが、極めて大切であります。これ以上を挿して、無暗に技巧を施すことは愼しむべきです。

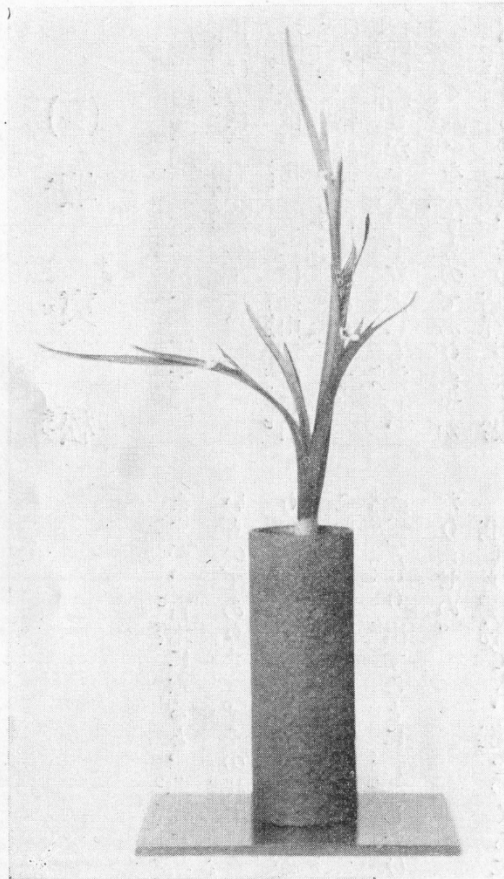
數が少くてこそ、清麗高雅な水仙の本來の姿を、現はすことができるのであります。

水仙を、ひと通り見られるやうに生け上げるといふことは、なか／＼困難で、古流では皆傳以上の者でなくては出來ないものとされてゐるほどです。

袴をとり、葉組みをするのには充分の手腕がなくてはなりませぬ。

水揚は、まづ切口を打碎き、薄荷油か蕃椒丁幾に一寸浸し、そのまゝ直ちに水に浸しておくのが、最も良い方法であります。

(岡本理生)

（一〇〇）蝦夷松

〔花器〕薄端、花臺は黑塗平卓。

生け方は、右中流しです。

蝦夷松は、北地または高山地帶に自生する、常綠の喬木であります。幹の高さが十丈、十五丈にも達し、天をつく勢を示すものでありますから、生けるのにも、その勢をよく表現するやうに努めねばなりませぬ。

樹容蕭條として巒氣迫り、如何にも俗塵遠い神仙境を彷彿せしむる姿は、全く他に見られぬもので、梢に高く掲げた翠傘もまた、古雅の趣を充分に與へるものです。

若木は相當に撓めのきくものでありますが、古木になると、非常に折れ易いものであります。その代り大變枝振りのよいものが得られるのですから、これによく鋏を加へて、その豪壯な姿を作り出すことに苦心しなければなりませぬ。

何れの場合でも、花をつくるに當つては、庭園に培養せられるものでも、野山に自生するものでも、それ〴〵の環境をまづ考慮に入れて、形以外に、その自然に成長する趣をとらへ、これを表現することが、何より必要であります。

（酒井理雪）

(一〇一) 萬年青

〔花器〕馬盥水盤、花臺は黒塗大平卓。

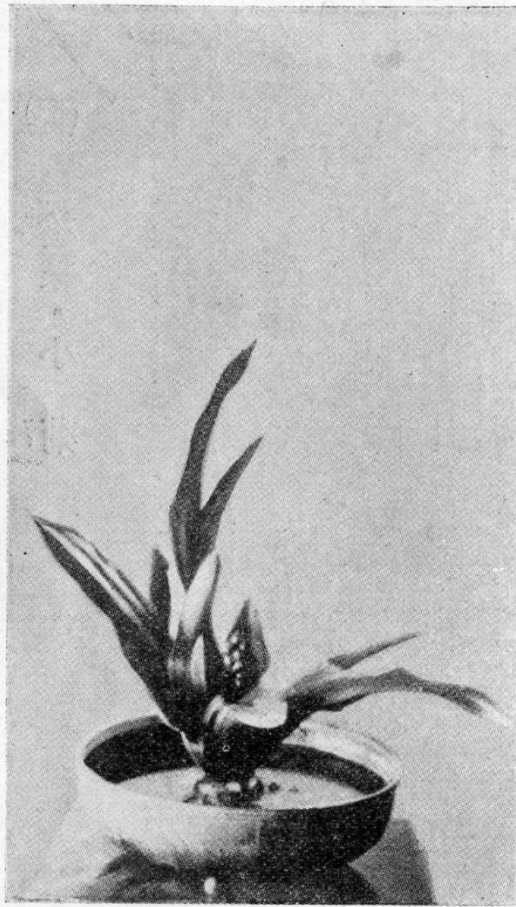
生け方は、右受流しです。

觀賞用植物だけに、變種の數が少くありませんが、本來は、暖國の山地に自生する、多年生の常綠草本であります。春、葉の間から薹を出して、淡綠白色の花をつけ、やがて紅色、または黃色の丸い實を結びますが、専ら觀賞の中心は、その滑らかな濃綠色の葉にあります。生花には、變種でないものを用ひます。

撓めのよくきかぬものですから、最初自然の形で組合せて見て、適當な葉を選ぶ必要があります。根を藁でしばつたり、針金を使つたりするのは、その天性を失ふものであることを忘れてはなりませぬ。

また葉蘭と同じく、故意に葉先を卷くやうな事も避くべきであります。自然の葉振りをうまく利用するだけで、立派なものが生けられるのであります。葉の中に赤い實を見せた姿は、お目出度い席に、相應しいものです。

これは葉を十一枚に、赤い實を二箇用ひて生けたもので、萬年青は、この赤い實を中心にして生けなければなりませぬ。特に水揚法は、行はなくてもよろしいものです。

(一〇一) 萬年青

(小川理鶴)

（三）絲檜葉・小菊

〔花器〕置船、花臺は黒塗巻臺。

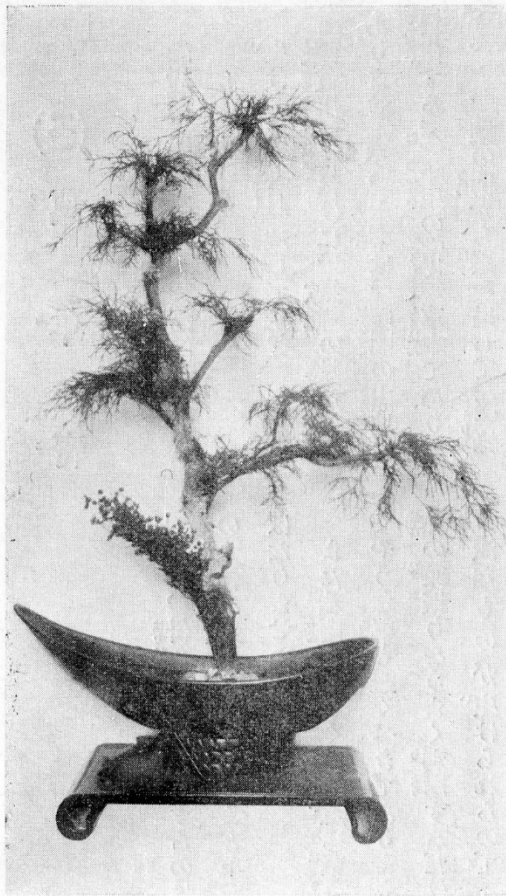
生け方は、右中流しです。

絲檜葉は、別名を『ひよくひば』または『ゐんこうひば』ともいひ、椹の栽培變種で、多く觀賞用として、庭園に栽植されてゐます。枝が細く下垂し、葉は鱗のやうについて、四時綠色を呈してゐます。

葉が垂れてゐるために、生け上げる上に、非常に苦心を要します。透しすぎると、その本來の姿を失ひ易く、また少しも透さずに用ひますときには、到底見るに堪へないものが出來てしまふからであります。その樹容を整へるのに、特別の工夫と、手腕を用ひなければなりませぬ。

これは三本の絲檜葉で形作つたものですが、その木振りを利用して生上げることが、最も肝心であります。

勿論一種生けとしても、相當雅致あるものですが、小菊などを根締として配すれば、寫眞のやうに一層引立つて見えるものであります。

絲檜葉は、別に水揚の必要はありませんが、菊は、根元を燒き逆水をそゝぐか、切口を薄荷油、または稀鹽酸に浸して用ひると、大變壽命の長いものであります。（完）

（内田理艶）

◇池坊と古流の生け方寫眞集◇

【定價九拾錢】

昭和六年四月十二日印刷
昭和六年四月十五日發行
昭和六年四月十八日再版
昭和六年四月二十八日三版
昭和十年八月十八日四版

編輯者　主婦之友社編輯局

東京市神田區駿河臺一丁目六番地
發行者　石川武美

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　安達信雄

發行所　東京・神田・駿河臺　株式會社　主婦之友社（振替東京一八〇）

（大日本印刷株式會社榎町工場印刷）

友叢書

各冊共 六拾錢 送料四錢

多産鷄の飼ひ方
副業としては養鷄がいつでも一番有利です。本書は流行の多産鷄の飼ひ方を詳しく公開のものです。

良人選擇の祕訣百ヶ條
婦人の一生は良人の選擇の良否に依つて定まります。それほど大切な祕決百ケ條を公開した書

民間療法四百種
民間療法ほど重寶なものはありませぬ。本書は手輕で有效な療法ばかりを四百種も公開のもの

犬の飼ひ方
畜犬としても副業としても犬は今日大流行です本書は犬の飼ひ方一切の知識を公開されたもの

最も便利な住宅を最も經濟に建てようといふ方には本書ほど重寶な參考書はないといふ大評判

池坊生花の生け方
何といつても池坊生花の勢力はすばらしいものです。本書は池坊の生花の詳しい生方の新公開

和洋附屬着の仕立方
シヤツやズボンは申すまでもなく下着類からエプロンその他の附屬着一切の詳しい作方を發表

手輕な西洋料理法
御家庭向きの手輕で美味しくて經濟な西洋料理の作方ばかりを發表したもので何處でも大人氣

冬の男兒洋服の作り方
これは男兒用の冬の洋服の作方ばかりを下着から上着や外套まで一切詳しく發表したので評判

漬物の上手な漬け方
漬物ほど重寶な食物はありませぬ。本書は何から何まで一切の漬物の漬方を公開したものです

お菓子の作り方百卅種
家庭で作られるお菓子の作方ばかりを百三十種も發表したもので本書一册があれば非常な便利

生花の水揚法
生花の水揚法は祕傳物となつてゐますが本書を御覽になれば和洋の生花一切の水揚法がわかる

衣類洗濯法と保存法
手入の良否は保ちに至つて非常な差を生じます家庭の奥樣方は本書一册を是非御用意ください

支那料理の拵へ方
このごろ非常な大人氣は支那料理であります本書は簡單な材料と作方で出來る支那料理です!!

新健康術の獨習法
最も簡單に出來て最も有利な健康術を一々詳しく發表したもので健康を望む方への好參考です

パンの作り方と食べ方
家庭で簡單に出來るパンの作方をいろ〳〵詳しく發表したもので何處の御家庭でも大評判です

赤坊衣類一切の仕立方
赤ちやん用の可愛らしい衣類の作方四十一種を一々詳しく發表したもので若いお母樣の評判書

門・玄關・床の間・押入の設計
和洋の住宅に調和する門と玄關と床の間と押入の便利な作方を何から何まで發表した便利な書

病人の看護法
病人の全快は藥よりも看護法と云はれてゐますが本書は家庭でぜひ心得ねばならぬ看護の祕訣